
家路 ルーフェイア・シリーズ16

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家路 ルーフェイア・シリーズ16

【Nコード】

N5976S

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

反王道、安易なご都合展開ゼロ。「無情という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 其処は誰の物なのか。誰の手に渡るのか。心優しい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第16弾。 前作とは一転、オールスターでの大立ち回り。爽快に行けたらいいな “夜8時過ぎ” 毎日更新です。 携帯版は1行毎の改行or空行です

Episode : 01

R u f e i r

テストも終わって、あとは春休みを残すだけの昼下がり。あたしはみんなと、食堂でおやつを食べてた。

中は珍しく、人の姿が少なめだ。きつと上級生が、大規模な演習をしてるからだろう。

「やっぱおじいちゃんのケーキ、美味しいよね」

「うん」

「……ルーフエ、味分かってないかもー？」

なんかひどい事を言われる。

「でも、美味しいし……」

「じゃさじゃさ、何入ってるかルーフエ知ってる？」

「え……」

答えに詰まった。

「ほら、やっぱ分かってない」

「ミル、それ味が分かってないのと、少し違うってば」

ナティエスがフォローしてくれたけど、これはこれでなんか微妙な言い方だ。

「ほらあんたたち、騒ぐのいいけどお茶冷めるよ」

「あー！」

慌ててミルがカップに口をつけて、今度はヘンな顔をした。

「あつーい！」

「そうかい？」

「だよねえ」

シーモアとナティエスは平気な顔してるけど、ミルは猫舌だったみたいだ。

「あつい！　ぜーったい熱いつてば！」

「熱くなくちゃ美味しくないだろ」

「それ違う、シーモアがヘン！」

「なに言ってるんだい」

いつもの軽快なやり取りに、つい可笑しくなる。

「あー！　ルーフエ笑ったな！」

「え？　あ、えっと、そういうわけじゃ……」

慌てて言い訳しようとしたその時、通話石が鳴った。

「あれ、呼び出し？」

「そうみたい……」

でもいい加減授業は片付いてるし、だいいち先輩たちと一緒に教官も演習島だから、呼び出す人が居ないはずだ。

「何だろね？」

みんなで首を傾げる。

と、ミルが手を叩いて立ち上がった。

Episode:02

「わかった、ルーフエが可愛いからだ!」

「違うと思う……」

そんな理由で呼び出されてたら、学院の女子はみんな常に呼び出される。

けど、みんなの考えは違うみたいだった。

「マジそれかも。だったらヤバイよ」

「無視したほうがいいんじゃない?」

なんだかすごい台詞が飛び出す。

「でも無視したら、減点……」

「あー、それはあるか」

学校の決まりを破れば減点は当然だけど、教官から呼び出されたのに応じないともっと減点が大きかった。

「あたしなら行かなけどなー」

シーモアがそう言うミルの頭を小突いた。

「いったあい!」

「普段から迷惑かけまくりのあんたと、一緒にするんじゃないよ」

「えー、どこがー?!」

聞いているだけで疲れてくる。

「ルーフエ、行っちゃいなよ。ミルの話聞いていると、キリ無いから」
「うん」

ナティエスの言葉に甘えて、急いでケーキを食べて立ち上がる。

食堂の外も、いつもより人影は少なかった。低学年は少し時間が違うし、高学年は大規模演習で居ない。だから見かけるのは中学年ばかりだ。

こういう感じもいいかな、と思いながら歩いていく。

管理棟も、今日はすごく静かだった。ただ大規模演習にしては、残ってる教官の数が多い感じた。

そのことをちよつとだけ不思議に思いながら、教官室のドアをノックする。

「ルーフェイアIIグレイスです」
すぐにドアが開いた。

「遅かったな」

「すみません……」

やっぱりケーキを全部食べてから来たの、まずかったかもしれない。

「まあいい。こつちへ」

「はい」

どうなるかと思ったけど、それ以上は咎められずに済む。

教官は振り返りもせず、先へ歩いてく。そしてちよつと見ただけじゃ分からないような場所の、鍵のかかったドアを開けた。

「あの、ここ……？」

「いいから来なさい」

ドアの先は、下へと続く階段だった。

Episode:03

「ここ、ですか？」

「そうだ」

教官が先に下りていって、首をかしげながらあたしも続いた。

階段は石造りで、かなり古い感じた。シエラ創設の頃からあったような気がする。

階段の終わりは、どう見ても牢屋だった。

こんなものがあつたんだと、感心しながら覗き込む。

けど、なんでこんなところに、あたしを案内……？

「ここは昔、まだこの島が学院じゃなくて傭兵の養成所だった頃、手に負えない連中を放り込んだそうだ」

「歴史があるんですね」

そういうことだとすると、ざっと2000年は前だろうか？

教官は何故か呆れたような顔をしながら、説明を続けた。

「穴を掘って脱走しようとしたヤツもいたらしいが、何しろ島だからな。逃げようがない」

「ですね」

そういう意味じゃ、囚人を収監するのに向いてるだろう。

「あとここは、結界が張ってあるそうだ。だから魔法は使えない」
「そうなんですか？」

ちよつとこっちは信じられなかった。

魔法を完全に無効化する結界なんて、そう簡単に作れるものじゃない。それにメンテナンスしなきゃ、だんだん効力が無くなつてし

まう。

この辺の事情を考え合わせると、仮にあつたとしても、あんまり効果は高くないだろう。

と、教官が背筋を伸ばして、急に威圧的な視線になった。

「ルーフェイア」グレイス」

「はい」

呼ばれて思わず返事をする。

それにしてもこんなところで、あたしに何のようなんだろう？

「お前を収監する」

「しゅうかん、ですか……？」

言われた言葉は短かったけど、意味を飲み込むのに時間がかかった。

「しゅうかんって、ここに入れ……です、よね？」

「そうだ」

「えっと、えっと、理由を……」

こういつとき対処法はどうだっただろうかと、一生懸命頭の中のページをめくる。ともかく、理由は訊く権利があつたはずだ。

「理由か？ 麻薬の所持疑惑だ」

「え……」

確かにあたしはその手の薬を持ってる。でもちゃんと学院長には理由を説明して、許可ももらった。

だいいち今までだって普通に持ってイザって時は使ってたのに、いまさら急に「ダメ」って言うのもおかしい。

けどそのことを教官に言おうとして、ふと思った。

Episode:04

——言いがかり、かもしれない。

何でそんなことを思ったのかも、教官がそうする理由も分からない。

けどそう思っ、ともかく言うのをやめる。

もし……もし本当に言いがかりなら、あたしから持っている言ったら、それこそ利用される。自分で証拠を出すようなものだ。

それによく考えてみれば、教官はあたしの扱いが色々ふつと異なることは、ある程度まで知ってる。なのにいまさら言い出すのはおかしい。

やっぱり、持っていることは今のところ、黙っているほうがよさそうだった。

少し考えて言う。

「えっと、学院長に……」

仮にこの教官が知らなくても、学院長はきちんと分かっている。だから学院長に連絡さえ取ってもらえば、すぐ片付くはずだ。

でも返ってきたのは、予想もしない言葉だった。

「学院長には、連絡できん」

思わず首をかしげる。

確かに学院長は、いろいろ用事でシエラを空けてたりする。けど緊急時——シエラは何か起こるかわからない——に備えて、いつも連絡が付くようになってるはずだ。

なのに連絡できないなんて、ふつうの状態じゃない。

「えっと、病気……ですか？　じゃなきゃ、会議とか……」

「お前が知る必要はない」

あたしの中で警告ランプが灯る。

具体的に「何が」とは言えないけど、絶対に何かがおかしい。

「ともかく、いいから入れ。上手く行けば、学院長に言っというてやる」

「そんな……」

自室待機ならまだともかく、こんな理由で収監はさすがに横暴すぎる。

けど迷って立ち尽くしてたら怒鳴られた。

「早く入らんか！　入らないなら、減点だぞ」

言ってることがメチャクチャだ。

教官に従わないから減点、それそのものは分かる。けどあたしが麻薬を持つてるかどうかは、今の時点でちゃんと分かってはいないだろう。そうじゃなかったら、「容疑」なんて言わない。

どっちにしても、上手く立ち回らないと大変なことになりそうだ。

「早くしろ！」

「——はい」

気は進まないけど、牢の中へ自分から入る。

「武器は持っていないな」

「持ってません」

食堂で食事してすぐ戻るつもりだったから、珍しく武器は持っていない。でも今度からは絶対持っていようと内心思った。

まあ今回の場合は、持っても取り上げられるだろうけど……。

Episode : 05

音を立てて、鉄格子の扉が閉まる。

—— すごいえば牢屋って、何で鉄格子なんだろう？
何故かそんな、つまらない疑問が頭に浮かんだ。

教官のほうはほっとした顔で、通話石でどこかに連絡してる。

「はい、ええ、確保しました。今は牢の中です」

学院内でふつうにおやつ食べてて「確保」なんて、やっぱり納得が行かなかった。これじゃ何だって理由になる。

教官の話は続いてて、耳をそばだてる。

「武器は持っていないようです。とりあえず大人しくしています」
いつそ暴れてみようか…… とも思った。教官を巻き込むのさえ気にしなければ、このくらいどうにかなるはずだ。

話はまだ続いてた。

「え？ あ、それはまだ…… はい、言っておきます」
教官がこっちを向いた。通話が終わったらしい。

「言っておくが」

「はい」

きっと、言い忘れたのを指摘されてた件だろう。

「ここから出ようと思うな」

「…… はい」

釘を刺して何の意味があるんだろうと思いつつながら、返事する。

「もし出たら、イマド〓ザニエスが収監されると思え」

「え？」

頭が回らない。

あたしがあたし自身のことで収監されるなら、まだ分かる。けどイマドは関係ないはずだ。

「あの、どうして」

「お前が知る必要はない」

それだけ言って、教官は行ってしまった。
地下に独り、取り残される。

——どうしよう。

あたしは中を見回した。

よくある鉄格子に、錠前。残る三方はがつちりした石壁だ。
どういうわけか、天井はかなり高い。あたしの背丈の三倍以上あるだろう。そして天井近くに、明り取りらしい小窓があった。

「——セレスティアル・レイメント」

呪文を唱えて、石組みの壁に手を掛ける。

「……あれ？」

昇ろうとして、あたしは違和感に気づいた。魔法の威力がいつもより弱い。

これだと上まで昇るにしても、そう何度かは出来なそうだ。

Episode:06

辺りを見回したけど、ロープ代わりに出来そうなものもなかった。これだと、あの窓から出るのは難しいだろう。

「えっと……」

いつも持つてるポーチを開ける。けど学内でこんなことになるとは思ってなかったから、大した物は入ってなかった。

魔法で強化したごく細い紐と糸が入ってるけど、これで上り下りはちよつと辛いだろう。

そして気づく。

——なんであたし、素直にここ入っちゃったんだろう？

よく考えてみれば理由は言いがかりだし、やたらと学院に寄付してる母さんに知れたら大騒ぎになる。だからその辺を言えば、別に入らなくてよかったはずだ。

よっぽどあたし、気が動転してたらしい。

ただ、今それを言ってもムダだろう。自分で墓穴を掘ったようなものだけど、この状況を何とかするのが一番先だ。

それにしても、なんでわざわざ閉じ込めたのか、その理由が分からない。

麻薬所持って言うてたけど、あたしが持つてるのは要は痛み止めだ。

シュマーの体質のせいで、あたしはふつつの薬はまず効かない。だから必要な薬は自分で持つてないと、イザと言うときに困る。そ

ういう理由だ。しかもこのことは学院に最初から伝えてあるし、学院長の許可も出てる。

だいいち今までずっと持ってたんだから、今頃問題になるほうがおかしい。だから、この罪状は後付けだろう。

だとしたら、何のために……？

教官たちが、あたしを自由におきたくないのは間違いない。何が理由かは分からないけど、うるうるされると困るんだろう。けどそれだけなら、自室待機で済むはずだ。あまり楽しくはないけど、でもそう言われたら、あたしはいつも従ってる。

なのに閉じ込めてるんだから、自室待機じゃ足りないってことだ。「脱走したら代わりにイマドを収監する」って脅してまでいるんだから、よっぽど閉じ込めておきたいんだろう。ともかく状況を整理してみる。

食堂でおやつを食べてたところまでは、取り立てて何かあったようにも思えない。

強いて言えば、今日は先輩たちが本島に居ないってくらいだ。この時期はいつも夜間まで含めた大規模な演習をしてて、上級生と傭兵隊の候補生、つまりあたしたちより上が全部居なくなる。

——この時期狙われたら、ヤだな。

ふとそんなことを思った。

誰が狙うんだと訊かれたら困ってしまうけど、上級生と教官が居ないこの時期は、このシエラは要するに戦力不足だ。だからもし狙われたら口々に戦えない下級生ばかりで、ひとたまりもないだろう。

Episode : 07

どうにか戦力になりそうなのは、一番上の学年のあたしたちくらい。でもAクラス以外は、やっぱり力不足だ。

しかもそのAクラスも、実質的に戦力って言えばそうなのは、実戦経験のあるあたし、イマド、シーモア、ミル、ナティエス、この辺だろうか？ でもこれだつてかなり甘い見積もりで、実際に使えるのは、あたしとイマドだけじゃないかって気もする。

そこまで考えて気づいた。

「もしかして、戦力低下狙い……？」

これだと何となく、筋が通る気がする。

あたしがよく分からない理由でここへ呼び出されたり、常に連絡がつくはずの学院長と連絡がつかなかったり、何か起こってるのは間違いない。しかもそれが、コントロールしづらい上級生が不在の間に起こってる。

偶然と言つには出来すぎだ。このタイミングを狙って、と考えたほうがいい。

そういえば今日は、教官たちもほとんどが訓練島へ行つてて不在のはずだ。いつもの年は行かないムアカ先生も、何故か今年は行くことになったと、診療所を休みにしてた。

残ってるのはあんまり評判のよくない、嫌なタイプの教官だけだ。いつもの年は下級生に好かれてる先生たちが残るのに、今年はメンバーがぜんぜん違う。

ナティエスに話を聞きたいな、と思った。彼女はそういう、先生同士の力関係とか生徒同士の勢力図とか、そういう噂に詳しい。だ

から顔ぶれを見れば、何か情報が出てきそうだった。

いずれにせよ「何か」起こってるのは確実だから、ここから出られるようにしておいたほうがいいだろう。

まず錠前を調べてみる。

「あれ、これ……」

つい声が出て、誰も聞いてないかとあたしは辺りを見回した。けど幸いさっきの教官が出てったきり、人の気配はない。聞いてた人は居なそうだった。

錠前は、昔からある古いタイプのものだった。これなら開けられる。

シエラで開錠を教えるのは10年生以上で、あたしたちは新学期からだ。だから本来なら、あたしたちの学年は知らない。

けどこの学院にはいろんな子が集まってるわけで……中でもスラム育ちのシーモアは、ふつうに育ったら覚ええないようなことをたくさん知ってた。開錠の技術もそのひとつだ。

それをイマドが教わって、さらにこの間あたしが教えてもらって、だからこの程度なら、何とか開けられる。

もしかしたら魔法でも施錠されてるかもしれないけど、そっちはあたしは前から開けられる。ここじゃ魔力が弱まるみたいだけど、全く使えないわけじゃないから、何とかなるだろう。

教官も甘いな、と思った。

もちろん鍵があたしでも開けられる物だったのは、幸運だったっただけだ。でもイザとなったら被害無視で牢ごと壊す方法もあるから、これじゃ完全に閉じ込めたことにはならない。

あたしを収監したかったのは分かるけど、だったらもつと嚴重にしたほうがいいと思う。

ただ出られるって分かってても、イマドの身の安全が確認できない
うちは、動けないのだけど……。

Episode: 08

Natties

午後のお茶終わって、それからレポートの資料漁りを図書館ですて。だからあたしが部屋に戻ったときは、もうだいぶ日が傾いてた。

「ただいま……あれ？」

開けた寮の部屋の中は、がらんどろ。居ると思ったルーフェの姿、なかったの。

「ルーフェー？」

彼女のベッドルームも覗いてみたけど、やっぱり姿はない。

「……訓練でも行っただかな？」

夕方はルーフェ、よく訓練島へ行っちゃう。

——歴史のレポートのこと、今のうちに訊きたかったんだけどな。

ルーフェはともかく成績よくて、中でも歴史は得意だから、教わるにはうってつけ。訊けば概要、すらすら答えてくれる。だからそれ書き留めて参考にして、そこから資料当たれば間に合っちゃう。けど、居ないんじゃないかな。

あたしは机の前で、持ってきた本を開いた。でもなんだか用語やら年代やらが、読んでいるうちにこんがらかっちゃったり。

それでも頑張って、ひとつひとつ整理しながら読んでたけど、だんだん疲れてくる。

「やっぱ、解説ないとダメー」

誰も聞いてないけどそんなふうに言って、本を机の上に置いた。

思ったより本を読むのに時間かかったみたいで、窓の外はすっかり夕暮れだった。

なんか甘いものでも食べよう。そう思って立ち上がる。

小さなキッチン——って言うよりちょっと広い洗面所——の戸棚開けると、ビンの中にはまだ、キャンディーがいっぱい入ってた。役得だなー、とちょっと思う。

ルーフェのお母さんって、すごくいい人。あたしたちがきつと困ってるだろうって、こうやってルーフェ通じて、お菓子とか送ってくれる。だから相部屋のあたし、甘いものに困らなかった。

他の生徒にはもちろん内緒。部屋でいつでも食べられるなんて分かったら、何されるか分かんないから。

もちろんちゃんとおすそ分けしてるけど、この部屋ほどには食べられないから、余計なことは黙ってるに限る。

でもご飯前だから、そう思ってキャンディーは一つで終わりにしたの。

——あれ？

ご飯前ってことは、もう日が暮れるってこと。

で、訓練島が使えるのは日暮れまでで、その後は最後の便が本島へ向けて出発して、無人になっちゃう。そうになったら一晩帰れない。

だから誰が訓練島へ来たかは全部チェックしてるし、最後の便で全員返すのが決まり。

なのに、まだルーフェは帰ってこなくて……。
なんだか急に心配になって、もう一回彼女のベッドルームを覗いてみる。

Episode : 09

「——え？」

目に入ったもの見て、あたし思わず声上げちゃったの。

だって部屋にあるの、ルーフェの太刀。

もし訓練島へ行ったなら、これを置いてくワケない。ルーフェじやそんなことありえない。

「どこ、行っちゃったの……？」

よく分かんない。けど絶対おかしい。

ルーフェ、何しろ真面目。だからふらふらどっか遊びに行っちゃったりしない。たまーに任務とかで急に居なくなるけど、そういう時は太刀は必ず持ってくし。

ともかく、ルーフェの身に何かあったのは確か。

——イマド、探さなくちゃ。

ルーフェを探し出すなら、ぜったい彼。何しろルーフェがどこに居ても分かるんだから、ちょっと凄すぎ。

「えっと……」

でも部屋出て男子寮に向かう前に、思いついてシーモアのところへ。ドアをノックする。

「なんだい——ってナティか。早いけど夕飯でも行くのかい？」

「ううん、そうじゃなくて。えーと、入っていい？」

口ではそう言いながら、返事を待たずに部屋に入った。

「何かあったのかい？」

「それがね……」

部屋で気づいたことを、順番にシーモアに話す。

「太刀が置きっ放しつてのは、さすがにあり得ないな」

「でしょ？ だから、何かあったんじゃないかなって」

あたしの推理に、シーモアも頷いた。

「あり得るね。探しに行くかい？」

「うん」

じゃあ、と言って、シーモアが部屋を出て。

ただどこをどう探せばいいかは、ぜんぜんわかんなかった。

「んー、まずやっぱイマドかね」

「かも。彼いれば、ルーフェすぐ見つかるし」

けど、男子寮にイマドは居なかった。

取り次いでくれた人が言うには、部屋どころか寮のどこにもいないみたい。

「調理室かなあ……？」

イマドが居る確率が高いの、部屋の次がこれ。料理が得意だから、よく調理室で何か作ってる。

ただ、今は居ないんじゃないかな、と思った。

ずっと前は知らないけど、今のイマド、調理室に行くのはルーフェに何か作ってあげるとき。でも肝心のルーフェが居ないのに、わざわざ作るなんて思えない。

Episode:10

「——ここもハズレか」

案の定、調理室の中には誰も居なかった。

「こりゃ、本格的に探したほうがよさそうだね」

「うん。……あ、あたしちよっと、部屋戻ってルーフエの太刀持つてくる」

シーモアに言い置いて、一旦部屋に戻って。

あっちこっち探してる間に、すっかり日は落ちてた。もうすっかり暗になっちゃうはず。

急いであたし部屋に戻って、ルーフエの太刀持って取って返した。

「ごめん、お待たせ」

「だいじよぶだよ。で、どこ行こうか」

シーモアと相談。そのときふつとあたし、思いついた。

「ねえ、ルーフエとイマド、ホントに本島に居るよね？」

「居るんじゃないか？ あーでも分かんないか。んじゃ船着場で訊いてみるかい？」

シーモアの提案で、棧橋まで行ってみて。

「ルーフエとイマド？ いや、あの子たちは今日は見てないね」
それが答えだった。連絡船の人も棧橋の管理してる人も、誰も2人を見てないって言う。

「やっぱ本島の中か」

「でもどこだろ？」

部屋には居ないし、調理室も居ない。

——意外と、知らないんだ。

ルーフェのこともイマドのことも、ずっとクラスが一緒だから、結構知ってると思ってた。けどこうなってみると、どこにいるかさえ思いつかない。

なのに「知ってる」って思ってたことが、ちょっとショック。

「図書館、覗いてみる？」

「だね。イマドはともかく、ルーフェが居るかもしれないし」

また取って返して、今度は図書館へ。

ここも人がまばらだった。よく利用してる上級生たちが居ないから、どこもかしこも空いてる感じ。

ただ、思いがけない姿があった。

「アーマルにヴィオレイ？ 珍しい、何してんのさ」

「あー、こいつの追試」

「言っなよ！」

話聞いて、なるほど思ったり。アーマルって学科によって成績が極端で、だからAクラスの中じゃ成績下のほう。けどBクラスよりは出来るから、すっごい微妙な位置。そんなわけで、毎回追試で何とかクリアしてる。

「明日、最後の追試なんだってさ」

「なる。ところであんたら、イマド見なかったかい？」

シーモアが質問して。

Episode : 11

「寮は？」

「居なかった」

「じゃあ調理室」

「そこもハズレ」

2人が考え込んだ。

「どっちも居ないとなると、どこだろな」

「んー、あとは海岸とか……」

ぜんぜん考えてなかった場所が飛び出してきた。

「海岸って、訓練施設の奥の秘密の？」

「あ、そこじゃねーよ。船着場の奥の、岩辿って行けるほう」

そこはあたしも知ってた。滑って危ないから禁止ってなってるけど、けっこうみんな遊びに行く。もちろんあたしも行ったことあるの。

「あんなとこ、あいつ行くのか。知らなかったよ」

「イマド、けっこう行ってるぜ。よくあそこでデルピスと遊んでる」

「へえ……」

すっごく意外。あいつがそんなのと遊ぶ趣味あるとか、ぜんぜん思わなかった。

デルピスっていうのは、けっこう大きい海の生き物。ぱっと見た感じ魚みたいなんだけど、あたしたちと同じ動物だって話。ちよつとそうは思えないけど。

ただ魚と違って、すっごく頭がいい。漁に使うところもあるって言う。

「これから行くのか？　けど、お前らがアイツ探すなんてどーしたんだよ」

「それがね……」

起こったことを話す。

「んじゃ、ルーちゃんが行方不明？」

「そうって決まったわけじゃないけど、なんかちょっと、気になっちゃって」

そう。ルーフェに何かあった、って決まったわけじゃない。でもどうしても気になっちゃう。そのこと話したら、アーマルとヴィオレイがうんうん言いながら頷いてくれた。

「分かる分かる、一度そう思うと、居場所確認するまで落ちつかないよ」

「いやオマエの場合、そういうのルーフェイア限定だし……」

「当たり前じゃないか！」

2人のいつものやり取り。それ見てちょっと笑ったら、なんだか気持ちが悪く落ち着いたかも。

「そしたらあんたら、イマドんどこ行ってもらっていいかな？　あたしらまた、ルーフェ探してみるよ」

「ん、分かった」

シーモアにそう答えて図書館出てこうとした2人を、あたし呼び止めた。

「ちょっと待って、あのね、これ持ってたって」

ルーフェの部屋から持ち出した太刀を差し出す。

Episode : 12

「なんで？ お前らがルーちゃん探すんだから、そっちで持ってたほうがいいんじゃないか？」

「そうなんだけど……。でもなんか、持ってもらったほうがいい気がする」

自分でも何でかよく分かんない。けど、そんな気がしてしょうがないの。

「よく分かんねーけど、んじゃ持ってくよ。サイアクでもイマドに渡せば、ルーフェイアの手に行きそうだし」

アーマルが不思議そうな顔しながらも、受け取ってくれて。

「うん、お願い。ルーフェより、イマドのほうが見つかりやすい気がするから」

「あー、それはあるね。んじゃ、ちょっと行ってくる」

アーマルとヴィオレイが走り出す。

夕闇に2人の姿が消えた。

「さて、あたしらも行くか」

「うん。でも、どこ行く？」

これが問題。

ルーフェの行きそうなとこって、実はかなり限られてる。教室、図書館、夕方の訓練島、イマドと一緒に調理室、あとは自分の部屋くらい。

「あの子、行動範囲狭いんだけどねえ」

「だから心配なんじゃない」

ミルみたいに、いつつもふらふらどっか行っちゃう子なら、心配なんてぜったいしない。というか、ミルなんて心配するだけムダ。けどルーフェはぜったい、そういう子じゃないわけで……そりゃ、バトルは強いけど。

そこまで思ってはつとする。

「よく考えたら……心配するだけ、ムダだったかも？」

「なんだい急に」

シーモアの呆れ顔。でも当たり前かも。

「さっきまであんたが、やたら心配してたんじゃないのかい？」

「そうなんだけど、よく考えたらルーフェ、危ないことって無いかも……」

大人しくて小柄で華奢で泣き虫だからつい忘れるけど、あの子に危害加えられる人なんて、ほとんどいないはず。その証拠にアヴァンに任務で行ったときも、2回ともあの子だけで、あらかた片付けちゃってるし。

「まあ確かに、あの子じゃね。寝てたってヘタに近寄れない」

「でしょ」

なんだかちよつと脱力。馬鹿みたい。

「よく考えたらルーフェなんだよね……ああもう、本気で心配したんだけどな」

自分に腹が立ってきちゃう。あの子が学年主席どころか上級隊並なの、何で忘れてたんだろう？

「けどさ、居ない理由は気になるね」

「……うん」

そこはあたしも同意。黙っていなくなるような子じゃないし。

Episode : 13

「教官に呼ばれて、それっきりだもんね」

「そこなんだよね……ヘンな目に遭わされてなきやいいんだけど」
ルーフェッたらほんと、自分が美少女だって自覚ないの。危なかしいっいたらありやしない。

まあさすがに身体に触られる事態になれば、返り討ちに出来るだろうけど。

「教官に呼ばれてそれっきりだから、もしかしてずっと説教されるとか」

「えー、ルーフェじゃそれはないでしょ」

夏休みが始まる前に宿題終わらせちゃうような子、どこを怒ればいいんだか分かんない。

「どうしよ、とりあえず1回寮戻る？」

「だね。ここでこーしてたってしゃあないし、もしかしたらルーフェも戻ってるかも」

そうして寮のほうへ歩き出そうとして……シーモアがあたしのことを止めたの。

「どうしたの？」

「こっちだ」

彼女の後ろにくっついて、物陰へと身を隠して。

「ほんとにどしたの？」

「ほら、あれ」

シーモアの指差したのは寮の入り口で、でもなんか、いつもと雰囲気違った。何でか分かんないけど、何人もの教官が物々しい感

じで立つてる。

あといつもと違うのが、下級生が並ばされてるところだった。

「暗くなつてから集合？」

「そりやおかしいじゃないか。だいいちよほどの事がなきゃ、下級生なんて着替えさせたりしないだろ」

そう言われちゃうと、ちょっと反論出来なかったり。

寮の入り口はその間もてんやわんやで、最後は教官、並べるのは諦めたみたい。何人かの下級生をひとまとめにして、講堂のほうへ連れてつてる。

――何がしたいんだろ？

ホントにそこが分かんない。

これから夕食時だつて言うのに、下級生を集めて講堂に。そんなことしたら、大騒ぎになっちゃうのが目に見えてるのに。

ともかくそのまま隠れてて、教官と下級生とが行き過ぎるのを待つて。

「もういいかね」

「うん」

人影がなくなったのを見計らつて、物陰から出る。

「あれ、なんだつたんだろ？」

「さあ？ 教官達に直接聞いとくれ」

意味不明の出来事に2人で首捻りながら歩き始めたとき。

「お前達、なんでここに居る！」

あたしたち、後ろから声をかけられた。

Episode : 14

Armal

「なあ、ルーちゃんどこに行つたのかな？」

「俺に訊かれても分かんねーよ。つか、早くイマド探そうぜ」

シーモアにナティエスと分かれて俺ら、暗くなつた道を歩いてた。

走るのは早々にヤメ。疲れるし。

手には、預かつた太刀。

—— けっこう、重いんだな。

見た目が華奢に見える武器だけど、手にしてみるとずっしり来る。これを楽々振り回すんだから、ルーフェアはやっぱり桁外れだ。

「やっぱ気になるな。ルーちゃん探しに行こうかな」

「だからその後で」

ヴィオレイのヤツ、さつきから思考が脱線しまくりだ。ルーフェアのことばつか気にして、すぐどつかへふらふら行きそうになる。

「でもさ、イマドはほら男子だから放っておいていいだろ？ だからルーちゃん……」

「イマド探さねーと、ルーフェアも見つからないって」

「あ……」

ヴィオレイのヤツ、頭の中ルーフェアのことばつかで、肝心のこと抜けてるし。

しかしホント、イマドは変わってる。他人の居場所が分かるとか、人間業じゃない。

何でかはよく知らなかった。でもアイツ、いろいろヘンなところがあるヤツだから、こういう芸当も出来んだろう。

船着場が見えてくる。

でもギリギリのところで俺ら、左へ折れた。崖下の岩場伝って歩いてく。

いつの間にか日は完全に沈んで、月明かりの世界になってた。でも今日は月が大きいから、明るくて楽だ。

「あー、やつぱ居た」

暗い海に突き出た黒い岩場の上に、人影があつた。

「おーい、イマドー」

「なんだお前ら、2人揃つて」

いつもの軽口が返ってくる。

「イマドこそ、こんなところで何してんだよ」

「んー、あいつらと話してた」

同時に水音立てて、黒い姿が海から宙へ飛び上がる。

「デルピスカー」

「頭いいんだぜ」

確かに俺も、そんな話は聞いたことあつた。けど、会話できるとか絶対イマドだけだ。

「あいつら、人間の言葉分かるのか？」

「んー、それとは違うかな。通じるけどな」

なんか余計にワケわかんなくなってくる。

Episode : 15

「で、お前ら揃って何しに来たんだよ」

「いや、それがさ」

なんせ伝言の伝言。俺もよく分かってなかったりする。

「なんかシーモアとナティエスが言うには、午後ルーフェイアが教官に呼び出し食らったらしくて」

「あいつが？ 何で」

「そこはオレもワカンネ」

分かってりゃ苦労しないし。

「ともかくさ、ルーちゃんが呼び出された後、行方不明なんだよ」

「またどつか、任務で行ったんじゃねーのか？」

イマドのヤツ、案外冷静だ。ルーフェイアに何かあったって聞いた瞬間、血相変えると思ったのに。

「それがさ、シーモアが言うには、ルーちゃん本当から出てないって」

「マジか、それ」

ここ来てやっと、イマドの顔色変わった。俺らじゃなくて、どこかあらぬ方向見て、何か考えてる。

「イマド、だいじょぶか？」

「……あいつが見つかんねー」

低いつぶやき。

「見つからないって、お前いつもルーフェイアの居場所、見つけてたよな？」

「ああ」

イマドの雰囲気が変わる。マジ怒ってる。こうなったら離れたほうがいい。てか離れないと巻き添え食らってヤバイ。

「い、イマド、落ち着け、な？」

「るっせーな。お前からここに居ろよ」

完全にブチ切れてるし。

けどこれで、ルーフェイアになんかあったのは確定だ。んじゃなきや、イマドこんなに怒ったりしない。

ただいいのか悪いのか、ヴィオレイが相変わらずだった。

「イマド、とりあえず説明しろよ。ルーちゃんに何があったんだ？」

「分かんね。けど、アイツの気配がやたら薄いから、どつかへんな場所に居るんだろな」

「へんな場所……？」

ヴィオレイと2人、首をかしげる。

そりゃ確かにこの学院古いから、妙なウワサになってる場所とかあるけど。でもイマドが言ってるのは、たぶんそーゆーのじゃないだろう。

「それってどこだ？」

「分かりや行くつての。ただなんか、おかしいんだよな。建物中じゃなくて、その下っつーか……」

「下？」

意味不明だ。ふつう建物の下なんて、床下だけだ。

けどいくらなんだって、そんなところへは潜り込まないだろうし。

Episode:16

「地面でも掘って、隠れてんのか？」

「知るか。てか、ルーフェイアの反応すっげー弱え。こんなん初めてだ」

「……どーゆー頭してんだお前」

こんな謎台詞言うヤツ、イマド以外絶対居ない。

けど当の本人は聞いてなかったみたいで、俺らに構わず歩き出した。

「どこ行くんだよ」

「探すに決まってるんだろ」

ぶっきらぼうな言い方は、こいつの怒ってる時の特徴だ。

「待って、落ち着けよ」

いつもイマドのヤツ冷静なのに、今日は俺らが止める側になる。

「何だよ」

「いやだって学院、様子おかしいぜ？　なんかこう、上手く言えないけどいつもと違うっつーか」

「……」

イマドが黙って、何かを聴くみたいな顔になった。

こういうとき大抵こいつは、音じゃないものを聴いてる。俺らには聞こえないものを、イマドはいつも情報源にしてた。

「……確かになんかヘンだな。静か過ぎる」

「上級生がいないからじゃ？」

ヴィオレイが横から口挟んだ。

「今日は泊りがけで演習だろ。だから本島、人口少ないよ。食堂とか図書館とか、ガラガラだったし」

「いや、そゆのと違う」

イマドが言い切る。

「何が違うんだ？」

「チビどもが大人しいんだよ。ありえねー」

オレはヴィオレイと顔を見合わせた。たしかにおかしい。

低学年のチビどもと来たら、普段だって大騒ぎだ。ましてや上級生がいらないとなれば騒ぎ放題、毎年大変なことになってる。

なのにそいつらが大人しいとか、天地がひっくり返るような話だ。

「あれだな、用心して帰らないとアブないってヤツか」

「ああ」

3人で今度は用心して、辺り伺いながら校舎のほうへ戻る。

人が多そうなところへは近づかないよう気をつけて、俺らは様子を伺った。

「やっぱ静かだよな」

「だね……」

いつも何となくワーワーしてる校舎なのに、今日はやたらと静まり返ってる。

「こっちな」

イマドがつぶやいて、講堂のほうへ回ってった。

Episode : 17

「ルーちゃん、ここに？」

「いや、そっちじゃねー。チビども」

言いながらイマドが裏手へ行つて、俺らも慌てて後に続く。

しばらく講堂の周りを歩く。けどやっぱり、不思議なくらい静かだ。

「どうなつてんだ？」

「オレに訊くな」

その時、教官の話し声が聞こえた。

「イマド」ザニエスは、まだ捕まらないのか？」

「申し訳ありません、この島のどこかに居るのは確かなのですが…」

中での様子に、またみんなで顔を見合わせる。

「捕まるとか、オマエなんかしたのか？」

「してねーよ」

イマドがぶっきらぼうに答えた。

「だよなあ……」

確かにコイツ妙なところ多いけど、いきなり搜索されて捕まるようなマネはしない。てかメチャクチャ要領よくて、普通なら怒られるような状況でも、何か上手く切り抜けちまう。

その時神妙な顔して、ヴィオレイが言った。

「もしかして、ルーちゃん捕まったんじゃない？」

一瞬の空白。

「ま、待てよ。ルーフェア、それこそ捕まるようなことしないじゃないか。超優等生だぞ」

「けどさ、なんか学院おかしいし。イマドを捕まえるとか行ってるし。それにルーちゃん、教官に呼ばれてって……」

背中を冷たいものが伝った気がした。

イマドが腕組みして考え込む。

「ルーフェアのヤツ、まさか地下……か？」

「地下室？ そーいや、あるって話は聞いたことあるけど」

なにせこの学院古いから、俺らも全部は知らない。そしてホントかどうかはともかく、ヤバイ地下室があるとか、他所へ通じる門——特定場所へワープ出来る——がある、なんて噂まであった。

その中でも地下室は、かなり信憑性の高い噂って言われてる。だからルーフェアがそこに閉じ込められてるってのも、十分あり得る。

ただ、ひとつだけ解せない部分があった。

「もし閉じ込められてるとして、何でだ？」

オレが疑問を口に出すと、イマドとヴィオレイのヤツが考え込む。

「何でって言われてもなあ……」

ここがどうしても分からない。

イマドが鼻で笑うみたいにして言った。

Episode : 18

「理由なんてどーでもいいっての。教官連中が俺を追っかけまわしてて、ルーフェイアのヤツはいねえ。上級生も不在で、チビどもは静か。こんだけ分かりや十分だ」

「十分って……」

首捻る俺に、イマドが講堂を指差した。

「覗いてみる」

促されるままに開いてる換気窓探して覗く。そして絶句した。

「なんだよこれ……」

中で低学年が並んで座らされてた。列の数からみて、たぶん全員だ。

けど、あり得なかった。

もう授業はとくに終わってて、そろそろ夕食の時間だ。なのに食堂じゃなくて講堂へ集めてるなんて、非常事態の時しかない。

てか教官たち、あのチビどもにメシ食わせない気なんだろうか……？
疲れてんだろう、いちばん小さいチビどもの中には、居眠りしてる姿もある。なのにまだこんなとこに座らせとくなんて、まともな頭の持ち主のやることじゃない。

「何とかしないと……」

言いかけたとき、気配を感じた。

同時に鋭い声。

「誰か居るのか！」

思わず3人で身動き止めたけど、もうバレちゃったらしい。

「その物陰か？ 動くなよ、お前ら」
場所を察した教官がこつち来る。

(……お前ら、その太刀頼むわ)
そう囁いて、不意にイマドが動いた。
大きく目立つように動いて、教官の前へ飛び出す。

「イマドっ！」
追いかけようとしたヴィオレイを、掴んで引き止める。

(ダメだ、隠れてろ)
(けどさ……)
不満そうなダチに首を振る。

教官は、さすがに気づいたらしかった。
「イマド」ザニエスかっ！」
声と一緒に、捕まえようと教官が飛びかかる。
けどイマドは待っちゃ居なかった。ぱつと身をかわして数歩離れる。

「俺を捕まえようってんなら、もちつと早く動かねーと」
嘲り全開って声で、教官を煽ってるし。
「こ、この……」
けどそのときにはイマド、更に数歩先だ。

Episode : 19

「だから、それじゃ遅いつつてんのに」

嘲笑いながら駆けてくイマドを、教官たちが追ってた。

「ぼ、僕たちも行かないと」

「やめとけ」

焦るヴィオレイを止める。

「け、けどさ」

「オレらが行ったら、足手まといなだけだつて」

俺の一言で、ヴィオレイも思い出したらしい。はつとした顔になる。

「そ、そうか、そうだったけな」

「そゆこと」

イマドは人の行動を先読みするから、アイツが本気になったら誰も捕まえない。なのに俺らがついてったら、足引っ張るだけだ。

辺りはしんとした。

物陰からそーっと様子伺ったけど、誰もいないみたいだ。きっとイマド追っかけて、教官たちみんな行っちゃまったんだろっ。

そろっと出てみる。でも夜風がそよぐだけで、やっぱり誰も居ない。

「どうする……？」

おんなじように出てきたヴィオレイが、不安そうな表情で言う。

「どうするって言っても……」

俺もヴィオレイも考え込んだ。

ルーフェイアが居なくて、イマドが追っかけられてて、低学年が集められてる。これだけは分かってるけど、どうすりゃいいのかが分らない。

「低学年、何とかしなきゃだよな」

「ああ。あと、この太刀渡さないと。頼まれたし」

「んじゃ、ルーちゃんの居場所見つけないと……」

少しやることが見えてくる。

「そしたら、ともかくルーフェイア探してみようぜ。あと、低学年だな」

「うん。あーでも……」

ヴィオレイが考え込みながら言った。

「先輩達、呼んだほうが」

「何で？」

意味が分からなくて訊き返すと、また考え込みながらこいつが言う。

「よく分かんないんだけどさ……今、先輩たち居ないだろ？」

「まあ、演習だしな。——あ」

ヴィオレイの言いたいことを理解した。

「絶対おかしいことが、先輩たちの居ない間に、だもんな」

「うん。狙ってるだろ？　だったら先輩たちに知れたら、困るんじゃないかな」

一理ある。てか、きつとそうだ。

Episode : 20

「んじゃこの太刀渡して、それから演習島か？」

「かな……でもルーちゃん見つかるかな」

「うーん……」

ここが問題だ。イマドが言つとおりなら、どっかの地下にいるんだろうけど、それがどこか分からないし。

「教室あるとこの下になかったっけ？」

「あるけど、あそこじゃ閉じ込められないと思うぞ……」

俺らのクラスがある校舎の地下室は、ただっ広いだけの場所だ。あんな場所にルーフェイアを置いたら、全力で魔法使ってどっかの扉ぶち破つて出てくると思う。

「じゃあ、どこだろ」

「他にあるんだろうな。図書館か寮か管理棟か——」
自分で言つて、あつと思う。

ヴィオレイ

『管理棟！』と俺の声がハモった。

教室の地下にあるんだから、管理棟の地下にあつたっておかしくない。

「行つて、探してみようぜ」

「待てつて、気をつけないと、教官に見つかるぞ」

イマドを追いかけてつたから俺ら捕まっていけど、教官たちがあやつて見回りしてるくらいだ。ルーフェイアを閉じ込めたところなんて、もっと嚴重なはずだ。

「けどさ、行かないとルーちゃんが」

「そだけど……」

俺とヴィオレイ、どっちの言うことも正しいから困る。早く行って太刀渡さないとルーフェアは困るだろうし、けど行ったら捕まるってのも事実だし……。

その時ふと、俺は思い出した。

「そーいやさ、さっきイマドのヤツがデルピスと遊んでた岩場。あそこにヘンな話なかったか？」

「話？」

ヴィオレイが考え込む。

「話って……ああ、あれか。崖の上のほうに穴があるやつ」

「ああ」

なにせこの学院ときたら古いから、不思議みたいな話もいくつか伝わってる。んでそん中でいちばん有名なやつが、「学校には地下室があつて、殺された女兵士が化けてでる」ってヤツだ。

何で有名かって言うと、船着場周辺から島を見上げると、何かの穴が見えるからだ。だからそこが、噂の地下室じゃないかって言われてる。

けど今まで誰も地下室見てない——教室棟の地下はそれなりに知られてるから除外——から、ただの噂だつても言われてる。

けどこうなってみると、その噂もけっこうあり難かった。噂がホントかどうかは別として、まずやらなきゃいけないことが見えてくる。

Episode : 21

「あの穴、地下室じゃねーかって、イマド言ってたよな」

「言ってた。見に行こうぜ」

周りに気をつけながら物陰から這い出して、講堂を離れる。

遠くじゃ、なんか人が叫んでるのが聞こえてた。発砲音までするから、教官たちが相変わらずイマドを追っかけまわしてるらしい。

「——イマド、完全に遊んでんな」

「だなあ」

しかも暗くなってるから、完全にイマドに有利だ。

何でか知らないけど真っ暗闇でも行動できるあいつと、明かりがなきゃ動けない教官たちとじゃ差がありすぎる。いくら今夜が月が大きくて影が落ちるほどでも、勝負になんかならない。

ちよつとだけ教官を気の毒に思いながら、また船着場へ坂を下りて、更に脇の岩場へ出る。

「見えるか？」

「何となく……あそこだよな」

記憶を頼りに崖を探して、穴らしいところを指差す。

「けっこう、高いんだな」

「けど、登れそうじゃないか？」

崖についていても、けっこう岩棚とかでっぱりがある。気をつけていけば大丈夫そうだ。

「えーっと、太刀なんとかしねーと」

「あ、俺ヒモある」

アーマルがポケットから、細いヒモを出した。

「何でこんなもん持ってたんだよ」

「授業でほら、エプロン作るってただろ？ それのヒモ」

だからってポケット入れなくていい気がするけど、今はそれで助かってんだから文句は言えない。

「これだけじゃダメだな……あ、これ使えるか。悪いけどヒモ切るぞ」

「いいよー」

制服の上着を脱いで、太刀を包んでヒモで縛る。それから袖口どうしに残ったヒモで縛り合わせて、斜めに背負えるようにした。

「へえ、上手いもんだな」

「こーゆーのは得意だし。行くか」
手近な岩に手をかける。

「だいじょぶか？」

「平気っぽい。でも場所によっては滑るぞ、気をつける」

2人で声を掛け合いながら、ちよつとづつ登っていく。

崖は下から見てた以上に割れ目とかでっばりがあって、予想よりは登りやすかった。月が明るいのもあって、思ったよりは危なくない。

たぶん30分くらいかけて、俺らは目指す穴へたどり着いた。

Episode : 22

「なんで鉄格子？」

目に入っただけが理解できなくて、口から言葉になってこぼれる。

「これじゃまるで、牢屋じゃん」

「てか、最初から牢屋かも……」

2人で首ひねりながら中を覗いたけど、真っ暗で何も分からなかった。

「ちょっと呼んでみようよ」

「ダメだって！ もしここが牢屋で見張りが居たら、バレちゃうだろ」

「あ、そっか……。けどじゃあ、どうするんだ？」

俺はそれには答えなくて、辺りを探って石ころを拾い上げた。

鉄格子から手を差し入れて、中へ落とす。

「なるほどなあ。アーマル案外、頭いいじゃん」

「案外は余計だったの」

実言うと、この間ケンディクで会えた親戚のじいちゃんから教わったやり方だ。昔、掴まった仲間たちに合図するのに、こういう方法を使っただけだって言う。

もう1個落としてしばらく待つ。

「うわっ」

「すげ……」

突然俺らからそう遠くないところで、小さな稲妻が閃いた。それが

2回。

「これ、魔法だよな」

「うん、間違いない」

つまり中に誰か魔法が得意なのがいるわけで、たぶんルーフェイアだ。

また石ころを拾って、何個か落とす。けど今度はただ落としただけじゃない。

「それ、信号か？」

「習っただろ」

船乗りなんかを使う、光とか音の長短の組み合わせで伝える信号は、けっこう便利だ。んで、これは必ず学院生も習う。というか習ってちゃんと覚えないと、前線出たときにヤバい。

そして今送ったのは、「無事か」って問いかけだ。少し待つてると、また稲妻で応答があった。

「えーっと、ルーフェイア、無事、やっぱル……」

「しっ！」

叫びそうになったヴィオレイを慌てて黙らせる。

当人も俺の声で気づいたみたいで、はっとした顔で口を噤んだ。

「太刀、渡さないと」

「ああ」

でも覗き込んだ中は、やっぱりよく見えない。ただどうも、窓の位置がかなり高いところにある感じだった。

「これじゃ、差し入れても落ちるな……壊れるかも」

「それはダメだろ」

ヴィオレイの言っとおりだ。大事な太刀が折れたらヤバイ。

Episode : 23

「ともかく、聞いてみよう」

また石を拾って、次々落とす。意味は「太刀、ある」だ。
また稲妻の応答。「落として」だった。

「お、落としちゃっていいのかな？」

「ルーフェイアがそういうんだから、だいじょぶだろ……」

心配だけど、大事な武器が傷つくようなマネ、あの子がするとは思えないし。

たすきがけにしてた上着を、片手で何とかはずす。足場が悪くて捕まってないと危ないから、どうにも不便だ。

「ちよつと、中から太刀出してくれよ」

「分かった」

俺が押さえてる上着リュックの中から、ヴィオレイが太刀を引っ張り出す。

「じゃあ、まず石落として、それからそのまま中」

「了解」

俺の言ったとおりに最初に石が落とされて、次に太刀が押し込まれた。

「平気かな……」

「たぶん……」

なんでか俺まで息を止めて、中の様子に耳をそばだてる。けど、太刀が床にたたきつけられる音はしなかった。

そしてまた稲妻で、「ありがとう」。

「よかった、ルーちゃんちゃんと受け取れたんだ。さすがはルーちゃんだ」

ヴィオレイがひとりで納得する。

俺も胸を撫で下ろしながら言った。

「降りようぜ、今度は先輩たちに知らせないと」

「あ、そうだった」

登るときよりずっと時間をかけて、慎重に崖を降りる。だから最初の言わばに戻ったときは、だいぶ時間が過ぎてた。

「こんな時間に、船出してくれるかな」

言いながら歩いてく。けど船着場へ出ようってところで、俺は気づいた。

「ヴィオレイ、隠れろ」

「え？ う、うん」

変なこと続きのせいだろう、ヴィオレイが俺の言うことにすぐ従って、手近な大岩に隠れる。

船着場のところには教官が居て、連絡艇を任されてる人と何かを話してる。

「何話してんだ？」

「知るかよ」

自分だって聞こえてないのに、分かるわけがない。

でもじーっと聞いてるうち、ほんの少しだけ分かってきた。

Episode : 24

でもじーっと聞いてるうち、ほんの少しだけ分かってきた。
ここから見てるかぎり、船着場の人はちよつと嫌そうだ。何度も
首を振ってて、そのたびに教官が大声を上げる。

（もうちよつと前行かないか？）

（そうだな）

内容が聞きたくて、そろそろつと前へ出る。その時、足が滑った。

「つ——！」

声は必死に抑えたけど、潮溜まりに突っ込んで盛大に水音が立った。

「誰だ！」

教官が振り向いて、こつちへ歩き出す。

俺は岩にはいつくばったまま動きを止めた。暗いのと少しくぼんだところに入り込んだのとまだ見つかってないけど、時間の問題だろう。

その時、海の中から波を割って、大きな姿が躍り上がった。

——デルピス。

たぶん、イマドが可愛がってるやつだ。そいつが空中で一回転して、水しぶきを上げてまた海の中に沈む。

「なんだ……」

教官はすっかり勘違いしたみたいで小屋のほうへ引き返して、二言三言船着場の人に言つと、坂道を校舎のほうへ引き上げてった。

（だいじょぶか？）

小声でヴィオレイが訊いてくる。

（ああ。でも驚いた）

絶妙のタイミングでデルピスがジャンプしてくれなかったら、絶対見つかったはずだ。

なんだか身体から力が抜けて、そーっと元の岩陰へ戻る。

と、船着場のほうから人が近づいてきて、岩の手前で止まった。

（み、見つかったんじゃ？）

（見つかったと思う……）

ここで教官に知らされたら、一巻の終わりだ。

「誰がいるのかね？」

声をかけてきたけど、答えるなんて出来るわけない。

俺らがそのまま黙っていると、おじさんは明後日のほうを見ながら喋りだした。

「ふむ、勘違いか。それにしてもあの連中ときたら。本当に岩場の先に隠した船が、見つからなくてよかった」

ヴィオレイと顔を見合わせる。

独り言にしちゃ内容がヘンだ。だからこれは、きっと俺らに聞かせる気で、独り言風に言ってるんだろう。

「あいつら、訓練島に知らされたくないから船のカギを全て寄越せなぞと言っておって。これじゃ迎えにも行けん。通話石も切りおったし」

なんだか分からないけど、状況はよくないらしい。少なくとも本当と訓練島は、分断された状態みたいだ。

Episode : 25

「何とか上級生たちに知らせてやりたいが、私ひとりではな……小屋を空けたら怪しまれてしまうし」

要するにこれ、俺らに「知らせに行け」って言ってるわけで。

だったらあとは、船の場所だ。そしてきつと、このおじさんは教えてくれるはずだ。

「隠した船が見つかったら困るが——この岩場の先といつても、ここから直接は行けないし、やつらもさすがに気づかんだろう」

頭の中で思い浮かべる。

イマドがよくデルピスと遊んでる岩場の先は、行き止まりだ。渡れる岩がなくなつて、崖だけが続いている。

「あの先にある洞窟は、岩場からも上からも見えないしな。斜面が他より緩くて降り易いが、まさかやつらが降りたりしないだろうしへえ、と思う。あの先岩場の先、いつも見てただけの場所。そこが実は上から降りられるなんて、ぜんぜん知らなかった。

「しかも降りるのが、食堂の裏手からだからな。分かるわけがない」確かにかなり見当違いの場所だ。いくら岩場の先だって言っても、まだ管理棟の手前になる。なのに管理棟の更に先から斜めに降りるなんて、このおじさん以外知らないんじゃないだろうか。

「まあ、降りるやつなどいないだろうがな」

言っておじさんが肩をすくめた。

「まったく、何が副学院長だ。前からいけ好かない男とは思っていたが、この期に及んであんなことをしでかしおつて……」

おじさんはそのあとも何呟きながら、小屋のほうへ引き返してつた。

ほっとして、大きな岩に背を預ける。

一緒に居たヴィオレイも、俺と同じように並んで座った。

「どうする？」

「行くしかないだろ」

他に方法があるんなら、俺のほうが訊きたい。

「けどさ、もし罠だったら」

「その時考える」

俺の答えに、コイツが深いため息をついた。

「アーマル、もう少し考えたほうがいいんじゃないかな？」

「考えたってしょうがないって。それより、ともかくやってみたほうがいいだろ」

「そりゃそうだけど……」

呆れ変えるヴィオレイを横目に、立ち上がって歩き出す。

「お、おい、ちょっと待てよ」

「待たないって。それより、一緒に船、捜しにいかないのか？」

「あ、行く」

ヴィオレイも立ち上がった。

Episode : 26

辺りを見回しながら、暗がりを伝って進む。

まだイマドは逃げ回ってるらしくて、時々小さい爆発なんかの音が聞こえてた。どうも寮のさらに先、島の奥のほうで追いかけてっこしてるらしい。

「すごいな、イマド」

「だよなあ。教官たちがみんなで追っかけてるのに、それから平気で逃げてんだもんなあ」

実戦経験が豊富なルーフェエアに首席こそ譲ったけど、それまでトップ独走だっただけのことはある。というか、逃げ回るだけならイマドのほうが上かもしれない。

それでも何度か見回りらしい教官の姿は見たけど、物陰に隠れてやり過ごした。

「食堂の裏って言ってたよな」

「言ってた。ちよつと茂み入ってみるか」

崖のそばの茂みの中へ、気を付けながら入ってみる。

「うわ、こうなってたのか」

ヴィオレイが茂みの向こうを覗き込んで声を上げた。

「おい、聞こえるだろ」

「あ、ゴメン」

あんまり悪いと思ってなさそうな声でヴィオレイが言う。

「まったく、気をつけろよ……教官に見つかったらヤバすぎるって」
言いながら、俺も隣へ並んで覗き込んでみた。

「なんだこれ、坂道？」

ヴィオレイじゃないけど、俺も思わずそんな言葉が出る。
崖はデルピスが居た辺りと違って、かなり切り立ってた。けどよく見ると岩肌のでっぱりが、上手い具合に坂か階段みたいになっている。幅はさすがに広くないけど、気をつければ大丈夫だろう。

「ここ、道なりに降りりやいいのか」

「そうだと思う」

落ちないように後ろ向きになって、崖にぶらさがるみたいにして
大きな目の出っ張りに降りる。

あとはそう難しくなかった。ジグザグにこそなってるけど一本道を、
気をつけながら降りるだけだ。

「あれじゃないか？」

何度目かの折り返しを過ぎたところで、ヴィオレイが俺に言った。

「他に、それっぽいのないしさ」

「そだな」

もう少し先、崖にぽっかり空いた洞窟が見える。

近づいてみると一部は中まで水が入り込んでたけど、ちゃんと歩ける岩場もあって、奥に確かに船があった。

けど。

「これ……僕たち使えない気がする」

「俺もそう思う」

見つけた船は手漕ぎだった。

Episode : 27

そりゃ授業で一応、船に乗ったことくらいはある。でも波のない湾の中で一回りする程度で、外洋へ出たことなんてなかった。

「ど、どうしよう?」

「やるっきゃないだろ。通話石使えねえもん」

まず船に乗り込んで、前に教わったことを思い出しながら備品を確認してみる。けどやっぱり動力はなくて、あるのは櫂が1組と木で出来た幾つかの救命具だけだった。

「あのオジさん、本当にこれで行く気だったのかな?」

「いやまあ……慣れてる人なら行けるんじゃないかな……たぶん」

自信ないけど、大昔の人は動力のない船で海を渡ったって言うから、島と島の間くらい行けるだろう。

「どうやって漕ぐんだっけ?」

「その前に、綱解かなきゃダメじゃね?」

右往左往しながら一つ一つ進めてく。それでもしばらく経ったころには、2人で漕ぎ出せる状態になった。

「綱、外すぞ」

「う、うん」

これ解いたら最後、もう戻れなくなるんじゃないか。そんな不安を押し殺して、杭に舫ってあった綱を解く。

ゆら、と船が揺れた。

「こ、漕がなきゃ」

「ああ」

櫂を両手に持つ。

「ヴィオレイ、オマエ舳先に座って見ててくれ」

「わ、分かった」

櫂を漕ぐと進行方向に背を向けることになるから、誰かに見ててもらわないとちゃんと進めない。

前に実習したとおりに漕ぐと、イヤになるくらいゆっくりだけど、船が動いた。

「すごい！ アーマルやるじゃん、進んでるよ」

「そ、そうか？」

これなら行けるかもしれない。

けどそう思ったのもつかの間、船が斜めに進みだした。

「右、もっと右、ぶつかる！」

「こ、こっちか？」

「反対だよ、それは左！」

ヴィオレイと俺が反対方向を向いてるから、左右が違って混乱する。

「うわぶつかる！」

次の瞬間、鈍い音がして俺たちは壁に突っ込んだ。

反動で船が揺れて、危うく落ちそうになる。

Episode : 28

「だ、だいじょぶか？」

「アーマル、気をつけるよ」

「そう言われても……」

何しろやったことないから、上手くいくわけがない。

「これじゃ僕達、ホントに島まで行けるかな？」

「分かんね……」

ヘタしたら外洋に出た時点で流されて、漂流するハメになりそう
だ。

「い、一回戻るか？」

「うん、僕もそれがいい気がする」

知らせに行かなきゃいけないのは確かだけど、自分たちが遭難し
たら目も当てられない。

その時、水しぶきが上がった。

同時に何かが笑うような、不思議な音。

「な、なんだ？」

「アーマル、あそこ！ デルピスだ」

言われて振り向くと、差し込んだ月明かりに照らされて、水面に
デルピスが頭を出してた。

「さっき、ジャンプしたやつかな……？」

「た、たぶん。イマドと遊んでたし」

こうしてみると、かなりデカい。俺たちの倍くらい身の丈があり
そうだ。

そいつがまた、笑うみたいな声たてながら近づいてきて、舟の周

りをぐるぐる泳ぎだした。」

「何してるんだろっ」

「俺に訊くなよ……」

イマドならともかく、言葉が通じないヤツの考えてることなんて分かるワケない。

でも、ヴィオレイはそう思わなかったらしい。

「おーい、お前さ、もしかしてイマドの友達なのか？」

海の中に向かって話しかける。

と、デルピスが回るのをやめた。そして舟の近くに寄ってくる。

「あのさ、僕たちこの先のえっと……ほら、あの島まで行きたいんだ」

ヴィオレイが洞窟から見える演習島を指差すと、また笑うみたいな声がした。

「通じてんのか？」

「通じてると思うよ。だってイマド、いつも普通に話しかけるしそれとこれとは絶対違う……俺はそう思っけど、ヴィオレイはそう思っていないみたいだ。」

「あのさ、お願いがあるんだ。この綱引っ張って、僕たちを連れてつてくれないかな」

言って舟を岸に舫ってた綱をヴィオレイが差し出すと、デルピスが啞えた。

「ほら、やつぱり通じてるんだよ！」

「信じらんねえ……」

それとも人間が気づかなかっただけで、頭がいいデルピスたち、

ずっと昔から俺らの言葉が分かってたんだろか？

Episode : 29

がくん、と後ろに引つ張られる感じがして、舟が動き出した。

「すごい！ やっぱ早いや」

「さすが、海の生き物だな……」

舟はすぐ洞窟の外へ出て、波を分けてまっすぐ進んでく。櫂でオロオロしてた俺たちとは、エライ違いだ。

「あとでお礼、何したらいいかな？」

「……俺じゃなくて、イマドかデルピスに訊いてくれ」

なんかもうクラクラしながら俺は返した。イマドといいヴィオレイといいこのデルピスといい、常識を足蹴にしすぎだ。

どのくらいのスピードが出てるのか、舟は暗い海を渡ってく。月明かりに照らされた海面がきらきらして、おとぎ話の中に迷い込んだみたいだ。

——気がするだけだけど。

教官に追い掛け回されたり、そのついでに爆発があったりするおとぎ話なんてさすがにイヤだ。ましてやそれを子供が読むとか、激しくイヤ過ぎる。

「ホント早いね。あと少しで着くよ」

ヴィオレイが感心したような声で言った。

「アーマル、やっぱりこの子にお礼しようよ」

「だからそれはイマドに訊けて」

なんでこう、同じコトを何度も訊くんだか。

そうやってるうちに、もう演習島は目の前に迫ってた。デルピスが泳ぐスピードを落としたんだろう、舟の進み方がゆっくりになる。

「そういえば、俺たちどこに上陸すりゃいいんだ？」

「えっと……どこだろ？」

慌てて、肝心なことを忘れてた。

「地図なんて、持って来てないし…… ヴィオレイ、何やってんだ？」

何を考えたんだか、デルピスが啞えてる綱をヴィオレイが引っ張ってた。

「うん、こうすればデルピスが気づくと思って」

「そりゃ気づくだろうけど、驚くだけじゃないのか？」

けど今回も、デルピスのほうが賢かったらしい。綱啞えたまま、舟の横に顔を出す。

「ほら、ちゃんと分かってるんだよ。——ねえ、僕達でも楽に浜に上げれるとこ、知ってる？」

またあの笑ってるような声。そして舟の進む向きが変わった。

——どーなってるんだよ。

ヴィオレイとこのデルピス、どう見ても会話が成立してる。あり得ない。

舟のほうはその間にも進んで、小さな砂浜へと進路を変えてた。そして最後に、デルピスが綱を放す。

「もうこれ以上は、行けないみたいだね」

「かなり浅くなってるからな。この先まで行くと、戻れなくなるんじゃないか？」

何しろ俺らよりよっぽど大きい身体だ。いくら海はお手の物って言っても、砂にはまったら大騒ぎだろう。

Episode : 30

「しょうがない、漕ぐか」

最初と同じように、俺は舳先に背を向けて座って櫂を持った。

「じゃあ僕見てる」

ヴィオレイが船尾に向かう。

「あれ、お前押してくれるの？」

「なんだよ急に」

ワケがわからないことを言われて、俺は聞き返した。

ヴィオレイが振り向いて答える。

「違うよ、デルピスが後ろから押してくれるって」

「……まあ俺も漕ぐわ」

任せておくのは人間としてどうかって気がするから、俺も漕ぎ始める。それにデルピスはあんまり浅いとこまでは行けないだろうから、どっちしても最後は漕がなきゃダメだ。

少しずつボートが岸に近づいて、デルピスがついに押すのをやめて、最後は何とか自力で漕ぎきった。

波打ち際にボートが乗り上げて、ついに動かなくなる。

「やった、上陸！」

「腕イタイ……てかヴィオレイ、オマエ少しは漕げよ」

「えーでも、櫂は一組しかなかったよ」

嘯かれる。なんだかすつごく損した気分だ。

「帰りは絶対オマエな」

「ほーい」

やけに軽い返事しながら、ヴィオレイが砂浜に飛び降りた。
俺も続く。湿った砂に少し足が沈んで、くつきりと靴の跡が残った。

「ここ、どういう地形だっけな」

「僕も良く知らないけど、東西に小高い丘があつて、そこをよく陣地に使うって聞いた」

「東西か……」

ぐるりと見回すと、海の方こうにケンディクの灯りが見えた。どうやら俺ら、演習島の北側に上陸したらしい。

「あっちが北だから、大雑把にこつちと向こうで東西じゃね？」
南側に向き直つて、左右を指し示す。

「そつか。じゃあどつちかに行けば、間違いなく先輩達とは会えるってことか」

「だな、行こうぜ。てかこんなことなら、方位磁石でも持つてくるんだつた」

そんなものが学院内で要りようになるなんて思わなかったけど、今度からは持つてたほうがよさそうだ。

と、隣のヴィオレイが意外なことを口にした。

「僕持つてるよ？ ルーちゃんが前にくれた宝物！」

なにやら誇らしげに胸を張る。

「ほら、これこれ。見てよ凄いだろ！」

「……ああ凄いな。てか早く言え」

何の変哲もない方位磁石に、どっと力が抜けた。この調子でコイツ成績だけは悪くないんだから、すっげー腹が立つ。

「さ、早く行こ。知らせなきゃ！」

「……ああ」

何もしないうちから疲れながら、俺はヴィオレイと一緒に歩き出した。

Episode : 31

Lytina

もうひと頑張りすればごはん、そんな時間で、リティーナはうきうきしていた。

「今日はなになさ？」

つい独り言が口を突く。

この部屋は2人部屋だが、今日は誰もいなかった。

アウトドア派の同室の同級生は、どこかへ出かけたままだ。きつと直接食堂へ向かうのだろう。

まだ低学年で同級生と同室というのは、実は珍しい話だった。

低学年はたいてい上級生と部屋が一緒だ。そうでないと細かい日常生活で、いろいろと滞ることが多い。

だが寮は無限に部屋があるわけではないし、上級生も無限に居るわけではない。だからたまに、こういう組み合わせも起こる。

もともと部屋の少女2人にしてみれば、何故そうなったかはどうでもよかった。同級生同士で気楽でいい、ただそれだけだ。

時間がたつのが待ち遠しい。その時間になれば、相部屋の友達も帰ってくる。

だがそこで、通話石を通して連絡が入った。

『下級生は全員、講堂へ集合せよ』

「そんなあ」

思わず通話石に言い返す。それから「向こうに聞こえない設定で

よかった」とリティーナは思った。

少女の見たところ、シエラの教官には2種類居る。

ひとつは学院長やムアカ先生のように、生徒が大好きな人だ。こういう人たちは一緒に居て安心できるし、生徒にも納得できないようなことは言ってこない。

そしてもうひとつは、すごく偉そうにしている人だ。こっちはちよつとでも言い返すと大変なことになるし、いつも納得できない事を命令する。

いま通話石を通して命令してきたのは、きっと偉そうにしているほうだろう。だからもし聞かれてたら、どれだけ怒られたか分からない。

『繰り返す。下級生は全員、講堂へ集合せよ』
命令を聞きながら、何かおかしいと思った。

リティーナが学院へ来てそろそろ4年になるが、こんなことは初めてだ。しかもこれから夕食というときになんて、どうにも納得が行かない。

しかも「下級生」と言っている。これは上級生以外全員で、つまり今この島に残っている生徒全員、ということになる。

「理由くらい、教えてくれた方がいいのに……」
それでも行かなければ減点だ。だから少女はしぶしぶながら部屋を出る。

廊下は生徒でごった返していた。しかも口々に不安や不満を言っているから、すごい騒音になっている。

Episode : 32

「もう、教官てば何考えてんの?!」

「お腹すいた! もういい、あたし部屋の食料持つてく!」

「あ、うちも持つてこ」

そんな会話を耳にした生徒たちが、あつという顔をした。

「そうだよね、持つてっちゃお」

「私、他の階にも知らせてこようかな」

「いつそ、今のうち食べちゃえ」

口から口へと話が伝わり、かなりの数の生徒が一旦部屋へと戻る。

リティーナも一度部屋へ戻った。保冷庫に入っていたソーセージとチーズとミルク、それにテーブルの上にあったパンを急いで食べる。それから怪しまれない程度の小さいポーチに、飴玉やビスケットやチョコレートを入れるだけ詰め込んだ。

『もう一度言う。下級生は全員、速やかに講堂へ集合せよ』

また通話石から声が聞こえた。さっきよりイライラした感じた。

もう行かないと危険、そう感じてリティーナは部屋を出た。だが階段の途中で人にぶつかり、足を踏み外す。

「痛たた……」

「だ、大丈夫!?!」

周囲が驚いて声を上げる。

「何年生かな? 立てる?」

見知らぬ上級生が手を貸してくれた。

「足首は？」

「だいじょうぶです」

痛かっただけで、大したことはなさそうだが、
けれど先輩のほうで驚いた顔をした。

「血が出てる！」

「え……？」

指差されたところを見ると、確かに長めの引っかけ傷が出来ていた。

「あー、ここの釘じゃない？ 前から危ないと思ってたんだ」

「いちおう診療所行つて、消毒してもらったほうがいいかも。釘つて良くないって聞いたもん」

周囲が口々に言う。

リティーナも最初は平気だと思ってたが、「良くない」などと聞くとさすがに心配になってきた。

「あ、あの、そしたらあたし、診療所に」

「うん、行つてらっしゃい。教官には言つといてあげるから」

親切な先輩に学年と組と名前を伝え、リティーナは途中で列を離れて診療所へと向かった。なんとなく不安で周囲をうかがいながら暗い道の端を行き……立ち止まる。

診療所の前で、教官富むムアカ先生とが押し問答をしていた。

「ともかくダメ！ 具合の悪い子を、講堂になんて行かせられないわ」

どうやらこんなところまで、教官たちの生徒集めは及んでいるようだ。

診療所へ入るに入れず、リティーナは物陰に身を潜めた。

Episode : 33

「だいいちね、無理やり連れて行ってこの子が具合悪くなったら、どうするつもりなの！」

「……分かった。ならばここで見張らせて貰おう」
かなり危険な雰囲気だ。

(どうしよう……)

このまま行っても、きつとあの教官に捕まってしまう。
リティーナには、それが良いこととは思えなかった。理由は上手く言えないが、今は教官たちは避けたほうがいい気がする。

しばらく考え込んで、少女は兄に知らせようと思い立った。

兄のセヴェリーグは上級隊、その中でもトップクラスだ。そのおかげで妹のリティーナは、他の生徒から一目置かれていた。

その兄は、いま演習島で訓練の最中だ。

いま本島で起こっていることは、たぶん兄は知らないだろう。

理由は簡単で、もし危険があると分かっていたら、兄は自分を放つてなどおかないからだ。それが違反だろうがなんだろうが構わず、確実に安全な場所に移動させてくれる。

妹のリティーナから見ても、兄は少々過保護だ。ちょっと姿が見えなければ大騒ぎをし、熱でも出そうものならケンディクの大病院に連れて行こうとまでする。

ただ、理由は分かっていた。

自分はよく覚えていないのだが、まだ小さかったころ家族と一緒に暮らしていた町は、突然戦火に巻き込まれたという。そして家族

の中で生き残ったのは、兄と自分だけだったそうだ。
そんなわけで兄は周囲からもからかわれるくらい、自分には過保護だ。

その兄が自分を混乱の中に置いているのだから、知らないに違いない。もし知っていたら訓練など放り出して助けに来ているか、そもそも訓練をすっぱかして自分をどこかへ連れ出している。

だからリティーナは、船着場へと歩き出した。

診療所へ行くときと同じように、周囲に気をつけながら歩く。だが幸い、教官たちとは出会わなかった。

暗い坂道を降り、船着場の番小屋の明かりに思わず駆け出す。

「あの……」

戸を叩くと、中から声がした。

「誰だね？」

「あ、えつと、リティーナ＝マルダーです。その、3年生のAクラスです」

かちやかちやと音がして鍵が開き、扉が開いた。

「お入り、早く」

「はい」

おじさんに促され、慌てて小屋の中へ入る。

「あの、えつと……」

連絡船を出して欲しい、それだけのはずなのに声が出てこない。

Episode: 34

おじさんが優しく話しかけてきた。

「よくここまで来られたね。そうとう混乱してるのかな？」

「あ、はい。えっと、生徒全員集められてて、でも全員だからまだドタバタしてて……」

一生懸命伝える。

それからリティーナは、何を聞けばいいか気が付いた。

「学院、どうなっちゃってるんですか？」

「うん、反乱かな。どうも副学院長が、この学院を乗っ取るうとしてるらしい」

「そんな！」

リティーナは副学院長は嫌いだ。いつでも優しい学院長と違って、副学院長はお金儲けは上手そうだけど、生徒のことが好きには見えない。

そんな副学院長がいちばん偉い人になったら、シエラはきっとひどいことになるだろう。

「そんなの、絶対やです」

「うん、私もだ。学院長は私の大事な友達だし、戦争で片腕、足も悪くした私にこうやって仕事をくれたんだ。恩がありすぎるよ」

この人は信じて大丈夫、そうリティーナは思った。なんでと訊かれたら困るけれど、ウソは言っていないと思うのだ。

このおじさんに頼めば、演習島まで連絡船を出してもらえるだろう。

「あの、お願いが……」

「なんだい？」

おじさんが優しい茶色の瞳で、リティーナを覗き込む。
どう言おうか迷ってから、少女は口を開いた。

「その、お兄ちゃんにこのこと、知らせたいんです」

「お兄ちゃん……ああ、セヴェリーグか。今日は演習だったね」
「はい！」

兄の名前が出されて、リティーナは嬉しくなった。兄は上級隊だから、こんなところにまでちゃんと知られている。

けれどおじさんの顔が曇った。

「実はね、船がないんだ」

「え……？」

おじさんが頷いて話し始める。

「少し前に、副学院長が来てね。全ての船の鍵を持っていつてしまったんだ。だから演習島へ行けないんだよ」

「そんな！」

いまの乗り物はどれも魔力石で動くが、最初は「鍵」と呼ばれる対の小さい魔力石を使って、外から起動させる必要がある。逆に言うとその鍵を無くしてしまうと、動かすことが出来ない。

もっとも魔力が桁外れに強い人だと、そんなものに頼らず強引に起動させることも出来るらしいが……自分にはもちろん、兄でもそれはムリだった。

だから、船での連絡はもうムリだ。他の方法を使うしかない。

Episode : 35

少女は必死に考え、もうひとつのやり方を思い出した。

「そしたら、通話石……」

すぐ思いつかなかったのは、下級生は私用で使うことが禁止されているからだ。だが返ってきたのは、信じたくない言葉だった。

「私もそう思ったんだが、繋がらないんだ。さすがに相手も、そのくらいはお見通しらしい」

「そんな！」

これでは連絡のしようがない。

「どうすれば……」

「ともかく、学院長が無事かどうか確かめないと。——ああいや、無事だと思うよ」

リティーナが泣き出しそうになったからだろう、おじさんが慌てて付け加えた。

「ほんとですか？ 学院長、無事なんですよね？」

「いや、私も確かめてはいないんだが——でももし学院長に何かあったなら、それ以上は探さないと思わないかい？」

「あ、そっか」

おじさんの言うとおり学院長を捕まえたなら、副学院長たちはわざわざ探したり、生徒達を集めたりしないだろう。

「そしたら、学院長探さないと」

「そうなんだが、どこにいるか分からないからね。かといって、ヘタに探し回って教官たちに見つかってもまずいし」

どうやら、そう簡単な話ではないようだ。

「このまま、何にもできないの？」

「いや、ムアカ先生には知らせられる。これから何とかして行くところだよ。カーコフ先生にも知らせたいが、こっちは演習島だから厳しいな。下級生もなんとかしないといけない。教官たちの配置も調べないと。それからもちろん、学院長の居場所に――」

「そんなにいっぱい？」

やることの多さにくらくらしてくる。どれかひとつだって大変だ。おじさんが優しく笑ってリティーナの頭を撫でた。

「そうだね、いっぱいだ。けどひとつずつ片付けていけば、そのうち終わるさ」

「あ、そうですね」

確かにおじさんの言うとおりだ。順番にやっていけば、どんな問題集だって終わる。

「えっと、じゃあ最初は、学院長？」

「いや、知らせるほうかな」

おじさんの意見は、リティーナには納得がいかなかった。

「でも、早く学院長、探さないといけないんでしょう？」

「うん、そうだね。けどいまこの島の中には、教官がたくさん居る。だから1人じゃ危ない」

「あ、そっか……」

何しろシエラの教官たちだ。上級隊でも一対一で勝てる人は殆ど居ない。悔しいけれど兄も勝てない。

ましてや自分では、ひとたまりもないだろう。

Episode : 36

「ともかく、診療所へ行ってくるよ。君はここに隠れていなさい」

「え、でもあそこ、教官が見張ってます」

慌てておじさんに教える。

「本当かい？ だったらまずいな……。あ、教えてくれてありがとう、知らずに行って捕まるところだった」

お礼を言われて、リティーナはちよつと嬉しくなった。言ってしまってから「怒られたらどうしよう」と思ったのだが、心配のしすぎだったようだ。

「それにしてもこうなると、どこから手をつけるかな」

おじさんが考え込んでしまう。

リティーナも真似して、どうしたらいいか考えてみた。

いくつかやらなくてはいけないことの中で、いちばん簡単そうなのはムアカ先生に知らせることだろう。何しろ先生が診療所にいるのは分かっているのだ。

ただ診療所に入るのが難しい。ヘタに近づくと見張りの教官に見つかって、きつと講堂へ連れて行かれてしまう。それではダメだ。

そのときおじさんが、独り言のように言った。

「そういえば診療所、換気窓があったな。そこを使えば知らせられるか……？」

「換気窓って、あの教室にある小さいの？」

思い出して尋ねる。

おじさんが頷いて答えた。

「うん、それと似たようなやつだ。だからそこから手紙でも差し入れば、きっと伝えられると思う」

だったら、トリティーナは思った。

教室にある換気窓は、自分たちにとっては遊び場だ。かなり小さいのだが、下級生の小柄な子ならけっこうくぐれる。だからよくみんなで、どれだけ早く潜り抜けられるか、休み時間に競っている。

中でも小柄なリティーナは、そこを潜るのが得意だった。

「そしたら、あたし行きます」

「お嬢ちゃんが？ ダメだ、危なすぎる」

反対するおじさんに、リティーナは食い下がった。

「だって、おじさんじゃ潜れないでしょ？ それにおじさんが見つかったら大変」

「それはそうだが……」

なおも渋るおじさんに言い募る。

「あたしも、見つかったらヤダけど。でもあたし見つかったても、講堂へ行くだけだと思う。けどおじさんだと、講堂じゃないと思うし」
「上手く言えないが、きっとそうだと思う。自分だったらただの迷子で済みそうだが、このおじさんだとヒドい目に遭わされそうだ。」

Episode : 37

そしてリティーナは、最後の一言を言った。

「それにおじさんだと、足が痛いから遠くは辛そう」

「——こりゃ一本取られたな」

怒られるかと思ったが、またおじさんは笑った。

「確かにお嬢ちゃんの言うとおりだ。私じゃ坂道を登りきる前に見つかって、営倉に入れられてしまうか」

ひとしきり笑ったあと、おじさんが真剣な顔になる。

「私が言った話は覚えてるかな？ 副学院長のことだ」

「はい、覚えてます。学院を乗っ取るうとしてる、って話ですよね」
このくらいも覚えられないようでは、シエラのAクラスには居られない。

おじさんが頷いた。

「うん、その通り。そうしたら、それをムアカ先生に伝えて欲しい。落としたときのことを考えると、メモなんかは渡せないから、しっかり頼むよ」

「はい」

話が重大だ。自分が間違えたら大変なことになる。

まあ話が単純だから、そう簡単には間違えそうにないが……。

「そしたら、行ってきます」

「あ、待ちなさい」

引き止められて立ち止まると、おじさんが黒っぽい布を持ってきた。

「この布を羽織っていきなさい。もう日が暮れてるから、かなり見
つかりづらくなると思うよ」

「ありがとうございます！」

たしかに制服の上にこの布を被って暗がりには隠れたら、そう簡単
には見つからないだろう。

黒と思った布は受け取って羽織ってみると、暗い緑色だった。確
かにこれなら、夜は見つかりづらそうだ。

「えっと、行つてきます」

「うん、頼むよ」

おじさんに送られて、暗くなった外へと出る。

見上げると、星が綺麗だった。それに今日は満月で明るいから、
足元もそんなに苦労しなくて済む。

だが坂を中ほどで来たところで、向こうから来る人影を認めた。
慌てて脇の茂みに身を寄せる。

「全く、生徒は足りないわ、イマドは逃げ回って捕まらないわ、あ
いつらと来たら……」

ぶつぶつ言いながら教官が坂を降りてきた。

船着場のおじさんに知らせに行こうと思わず体が動いたが、踏み
とどまる。ここでやたらと動いても、状況が悪くなるだけだ。それ
にあのおじさんなら、きっと上手く切り抜ける。

息を潜めて、教官の姿が遠ざかるのを待つ。動くなら十分に離れ
てからだ。

「ともかく、あのイマドがいちばん問題だな。あれを何とかしない
ことには、搜索に手が取られてたまらん」

しめた、とりてぃーナは思った。

Episode : 38

兄と仲良しのイマドは、リティーナもよく知っている。そして兄が「あいつが本気になったら誰も捕まえられない」と言っていたほど、逃げ回るのは得意だ。

そういう人が講堂に掴まっていないのは、すごくラッキーだろう。きつと何かやれる。

ぶつぶつ言いながら教官が行ってしまったのを確かめて、またリティーナは動き始めた。物陰を伝って進み、いつもの何倍もの時間をかけて診療所へたどり着く。

出入り口には相変わらず見張りの教官が居た。だからそれに見つかからないよう、そつと横手へ回る。

身を低くしながら窓に触ってみると、非常時に脱出口として使うためののか、換気窓には鍵がかかっていたいなかった。

辺りを見回し、音を立てないように慎重に開ける。そして小柄な身体を生かし、リティーナ診療所の中へ滑り込んだ。

たまたま具合が悪くて来ていたのだろう、ベッドで休んでいた生徒がこちらを見て、あつという顔をする。

「リティーナ……？」

寝ていたのは、同室の同級生だ。どこかへ遊びに行ったと思っていたが、来た先はここだったらしい。

「しーっ」

リティーナは友人に「黙って」という仕草をしてみせた。ベッドの中の少女もうなずく。

「二ネット、どつか痛いの？」

「うん、ちょっとお腹。でも薬飲んだら治ったみたい」
そこへムアカ先生が来て、目と口をまん丸にした。

「どうして増えてるのかしら……？」

「せんせ、しーっ」

リティーナの仕草に、先生も慌てて口を押さえる。
それから小声で、少女たちに話しかけてきた。

（いったい、どこから？）

（せんせ、あそこあそこ）
換気窓を指差す。

（なるほどね。私たち大人じゃ通れないから、思いつかなかったわ）
（ほんととは、船着場のおじさんが考えてくれたの）

それからリティーナは、おじさんに言われたことを伝えた。
ムアカ先生が腕組みをして考え込む。

「副学院長が……でもやっと、何がどうなってるか分かったわ。ありがとう」

「けど、もしそうなら、うちらどうなっちゃうの？」
先生に続いて言ったのは、同室の二ネットだ。

「副学院長って、子供キライだもん。うちらきつと、いじめられるよ」

「あたしもそう思う……」

そのときどこから声が聞こえた。

Episode : 39

「ヘーキヘーキ」

リティーナは二ネットと顔を見合わせ、互いに「自分じゃない」と首を振る。

と、隣のベッドの上、毛布がもそもそと動いた。

「じゃじゃーん、ミルちゃん参上ー」

「……ミル、後輩の前であなた、何をやってるの」
呆れた先生がたしなめる。

毛布から出てきたのは薄い水色の瞳にふわふわした髪の人だった。どうやら先輩らしいけど、小柄なせいかなり年の差がないように見える。

二ネットがびっくりした顔でつぶやいた。

「隣のベッドって、寝てる人いたんだ……」

「んふふ、死んだフリ成功ー」

この先輩、絶対何かが間違ってる。けど当の本人は何も気にしていないらしい。

その先輩が声を落として言った。

「なんか外がわーわーしてると思ったら、ふうん、副学院長なんだ」

「そういうのだけは、聞き耳立ててるんだから……」

先生がまた呆れ顔で言う。

「だって面白そうだし」

「面白くないわよ、大変なんだから」

先生と先輩とで、よく分からない言い合いが始まった。

「ふうん、大変なんだー。でも、何が大変なの？」

やっぱりこの先輩おかしい。

「そりゃ、副学院長のことに決まってるでしょう。あとは、学院長が居ないことね」

水色の瞳をくるくるつとさせて、先輩がいたずらっぽい顔をした。

「でもセンス、今は居ないほうがいいんじゃない？」

「え……あ！」

先生がはつとした顔になる。

「確かにそうよね……学院長が見つからないほうが、今はいいんだわ」

「んふふ、ミルちゃん頭いいー」

先輩の言葉を聞きながら、内心「どうなんだろう」とリティーナは思った。確かに頭はよさそうだけど、激しくどこか間違っていると思う。

と、急にまじめな顔になって、この先輩がひそひそ声になる。

「学院長はね、まだこの島にいると思うんだ」

「あ、それ間違いないです」

リティーナは答えた。

「ほんとに？」

「ほんとです」

もう一度短く答えてから、先輩に説明を始める。

Episode : 40

「あの、あたしさつきまで、船着場の小屋にいて。そこのおじさん、学院長は島の外へ行つてないって」

うんうんと先輩が頷いた。

「だとすると学院長は、この島のどつかと。どこかなー」

分かれば苦労してない。そう思ったがりティーナは言わなかった。先輩にそんなことを言うなんてよくないし、何よりこの先輩、言つても聞いてくれなそうだ。

そしてその感想を裏切らず、先輩はひとりで勝手に喋っている

「んー、やっぱありそうなの、『秘密の場所』？」

「え、あそこですか……」

秘密の場所は、学院生に代々伝えられている場所だ。

と言っても、何か特別なものがあるわけではない。訓練施設の奥にある何の変哲もない砂浜だ。ただそこへ行く道がなく、訓練施設の隅に出来た塀の破れ目から半分ジャングル化した林の中を通つて崖を降りないとたどり着かない。

そのおかげで見回りが来ることもなく、いろいろと教官に知られたくないことをする場合に、こっそり生徒達が使っていた。

とは言え魔獣が放たれている——訓練用といってもホンモノ——の中を抜けていくので、時々事故はある。だから低学年のリティーナにしてみると、行くのは命がけの場所でもあった。

先輩が大きく頷いた。そして大きな声で言う。

「やっぱりどう考えても『秘密の場所』！ あそこならバッチリだ

もん」

「ちよつとミル、あなた静かに――」

慌ててムアカ先生が止めたが遅かった。外まで響くほどの声が、教官に聞こえたようだ。

診療所の入り口で、遠ざかっていく足音が聞こえた。

「まったくもう、ミル、あなたどうするつもり？」

「えー？ あたし何にもしてないしー」

しらばつくれる少女をムアカ先生が叱る。

「そんなワケないでしょう！ いま大きな声で言っただじゃないの。これじゃ学院長が……」

「あれ？ あたしどこかなんて、ハッキリ言っただいよー。だいいちセンセ、『秘密の場所』ってどこ？」

「どこって……」

そこで先生が言葉に詰まった。

「そういえば『秘密の場所』って名前は聞くけど、どこだか知らないわ」

「でしょでしょ」

先輩が得意げに胸を張った。

「みんなで隠してたから、教官じゃ知らないはずー」

「確かにそうかもね……」

先生がうんうんと頷きながら考え込んだ。

「ともかくそういうことなら、早く学院長と合流しないと」

「しなくていいと思うー」

また予想もしなかった言葉が飛んできて、みんなで首を捻る。

Episode : 41

「ミル、あなたの言うことが分からないのだけど。さっきあなた、秘密の場所だつて言つてなかった？」

「うん」

そう答えてから、ミルという先輩が何とも言いようのない腹黒い笑顔になった。

「でもあたし、秘密の場所に『いる』なんて言つてないよ？ きつとそうだと思う、つては言つただけど」

「あ……」

なんて先輩だろう、とりティーナは思った。たしかにそう言つてはいないけど、こんな言いわけナシだ。

さらに先輩が言う。

「あの教官は、信じちゃったみたいだけど。けどさ、自分で『情報は必ず精査して、デマに惑わされないように』つて教えてるのにね」
言いながらクスクスと笑う様子は、まるで小悪魔だ。
ムア力先生がため息をついた。

「まったく、あなたつて人は……でもだしたら、学院長はどこに？」

「さあ？」

先輩が首をかしげながら答えた。

ムア力先生が、また大きいため息をつく。

「本当に知らないのね？」

「知らないでーす」

答える先輩は何故か嬉しそうだ。けど先生はそうは行かない。

「ああもう、これじゃまた振りだしね」

「そうでもないかもー」

先輩が言っのを聞いているうちに、だんだん混乱してくる。

「あの、先輩……」

さすがにリティーナは声をかけた。

「何かなー？」

訊かれて正直に答える。

「何がなんだか、全く分からないです……」

先輩がけろりと答えた。

「うん、分からないと思う」

なんだか力が抜けてくる。分からないのが当たり前だとしたら、いままでの話はいったいどうなるのだろう？

一方で先輩のほうはご機嫌だった。まあ周囲の全員がやったことに騙されているから、これ以上おもしろいことはないのだろう。だがそれにしたって、こんなことを言っのはどうかと思う。

呆れ顔のリティーナに気づいたのか、先輩が説明を始めた。

「えーっとね、まず学院長はこの島にいる、だよね？」

「はい」

これだけは確かだ。

Episode : 42

「でしょ。まあ他にルートがあつたら別だけど。あとは、上手く船に隠れて演習島に行っちゃったとかもあり得るけど。でもこの本島にいる可能性大、と」

「ですね……」

なんだか信用できない先輩だが、話の筋は通っている。
説明はまだ続いていた。

「じゃあさ、次。なんで学院長、この島にいるのかな？」

「え？ それはえっと、逃げられなかったから、とか……」

自分が危ないと分かってたら、学院長だつてとつくにどこかへ逃げてるはずだ。けれど先輩は首を振った。

「ざんねーん、ちょっと違うと思うな」

「違うんですか？」

「うん」

何故か先輩は自信たっぷりだ。

そして偉そうに胸を張って言っ。

「学院長、ああいう性格だから。生徒だけ置いて逃げるとかしないから」

「あ、そっか」

その点はリティーナにも納得が行く。どうしてと言われても困るが、学院長は自分だけ逃げたりしないはずだ。

ムアカ先生も同意した。

「確かにそうね。学院長はそんなことをするタイプじゃないわ。でも、そうだとしたらどこに……」

「どこにも逃げてないかもねー」

しゃらつと先輩が言ったことがみんな飲み込めず、数秒の間が空く。それからみんなが、あつという顔をした。

「ちょっと待つてミル、つまり学院長は動いてないってこと？」

「んー、わかんないー。けどあたしなら、最初だけ隠れて元の部屋かなー。だから学院長もそうするかなーって」

怖い先輩だな、とりティーナは思った。こんなことをあつさり考え付くなんて、この先輩はよほど悪巧みが得意なのだろう。

ただ先生のほうは、そこまでは思わなかったようだ。

「十分アリとは思うけど、確かめたわけじゃないのね？」

「だってミルちゃん、ここで寝てたしー」

やっぱりこの先輩、時々鋭いことを言っても全体的にはオカシイ。先生がため息をついた。

「どちらにしても、打つ手ナシかしら……困ったわね」

「えー、ありますよー」

またクスクス笑いながら先輩が言った。

Episode : 43

先生が驚いた顔で尋ねる。

「あるって、どんな手が？」

「んー、だからえーっと、学院長がいちばん困ること」

「……ミル、人間の言葉じゃないと分からないんだけど」

口には出さなかったが、ホントにそうだとリティーナも思った。

先生が言うようにどこかの知らない言葉を使ってるわけではないが、意味が通じないという点では同じかそれ以上だ。

だが先輩は気に入らなかったらしく、ぷうと頬をふくります。

「ちゃんと説明してるのに」

「あれのどこがよ」

言い合いが始まる。傍から見ていると、先生と生徒と言うより姉と妹だ。

「だいいちね、学院長を助ける相談してるのよ？　なのにどうして、困ることをするわけ？」

「えー先生、『する』なんてミルちゃん言ってるじゃないー」
思わぬ方向へ話が転がる。

「言っていないって、言ったじゃない」

「違っちゃってば、学院長が困ることを考えれば、どうすれば分かるって話なの」

「なら最初からそう言いなさい」

どうやらやっと、話がスタート地点に着いたようだ。

ムアカ先生に促されて、先輩が話し始めた。

「それで、何をどうするつもりなわけ？」

「だからだから、今いちばんなのは、学院長が困ることでしょう？」

「それはさっき聞いたわね」

また堂々巡りだ。よくムア力先生は耐えていると思う。

「で、結局どうするの？」

「だから、学院長が困らなくすれば何とかなるー」

ここまで聞いても、リティーナには言いたい事がさっぱりだった。何となくぼんやりとは分かるのだが、実際にどうすればいいのかわからない。

ムア力先生も同じだったようで、何度目かのため息をつきながら先輩に訊いた。

「大筋は通ってるんだけどね。あなた自分で言ってる、何が『学院長が困ること』かわかってないんじゃない？」

「分かってるってばー」

また自信満々で先輩が言う。

「じゃあ言ってみなさいな」

「はい、じゃあミルちゃん言います。学院長が困ることって、『学院生』です」

また意味が分からない。

「ミル、さっきも言ったけど、通じるように言ってくれないかしら？」

「ぶう」

先輩が動物みたいな声を出した。

Episode : 44

「さっきからちゃんと言ってるのに……だからね、生徒が人質なのが、学院長がいちばん困るの！」

「——なんで初めからそう言わないの」

またまたため息をつきながら、先生がこめかみを押さえる。たつたこれだけのことにとんでもない回り道で、隣で聞いているリティーナでさえ頭が痛くなったのだから、相手をしていた先生はなおさらだろう。

けれどようやく、先輩が何を言いたかったか分かった。

先生が考え込むように腕組みしながらつぶやく。

「つまり、生徒が人質だと学院長は身動き取れない……ましてや殺すと脅されでもしたら、従うしかない。これを回避するには、人質を取り返さないとダメ……」

「そうそう、簡単でしょ」

その簡単なことを混乱させたのは先輩だ、そうリティーナは思ったけれど言えなかった。やっぱり先輩にそんなことを言うのは怖い。けれど当の先輩のほうは大はしゃぎだった。

「あとは、どつかーん！ で人質取り返せばいいだけー」

「それが簡単だったら、誰も悩まないわよ。相手は教官たちで、講堂に集められてるのは下級生、上級生は居ない。どうやって対抗するの？」

「んー、数の暴力？」

首をかしげながらいたずらっぽい笑顔で言う先輩を、ムアカ先生

がたしなめた。

「あなたねえ。いくら生徒が多いって言っても相手は本職よ？ 返り討ちがいいところだわ」

「えー、出来ないと思うけどなー」

のんびりと先輩が言う。

「どうして」

「だってもしそんなこととして外に知れたら、学院の経営、傾いちゃうもん」

「あ……！」

リティーナはもちろん、先生もはつとした表情になった。

何故か勝ち誇ったふう先輩が言う。

「シエラの経営、先輩たちの稼ぎと身代金と、あと本土のお金持ち校の親の寄付で、なんとかやってるでしょ。なのに本校で大スキャンダルあったら、お金持ち校の生徒はみんな辞めちゃうと思うなー」

言われてみればそうだ。

シエラは本校のほかに、いくつも分校がある。その中にはシエラと言っても名前だけの、「お金持ち専用」の分校が幾つかあった。

上級隊の先輩たちは「金持ちのお遊び」とバカにしている。ただ兄が言うには、そういう人たちの親が寄付してくれるお金がものすごく多くて、それで自分達の服や何かが買えるのだそうだ。

お金のことにはあまり詳しくないリティーナだが、そんな人たちがシエラを嫌がって辞めてしまったら、たちまち大変なことになるくらいは理解できる。きっと学校は、とても貧乏になってしまうだ

Episode : 45

「なるほど、言われてみればそうね。まあ彼らじゃ隠蔽に走り層だけど……」

「いんぺい、ってなんですか？」

難しい単語が出てきて、リティーナは先生に訊いてみた。

「ああ、ごめんなさいね。隠蔽って言うのはそうね……悪いことを隠して、なかったことにする、って言ったら分かる？」

「あ、何となく」

要するに、クラスの男子が悪さをしたのを隠したりするのと、似たようなことだろう。ただ教官がやるとなると、ちよつと規模が大きそうだ。

（どうせバレちゃうのにな……）

リティーナが今まで見た感じ、隠し通せたものはない。だいたい誰かが見ていて、口止めしてもどこから漏れて、最後はみんなに知れ渡ってしまう。

「あ、そっか……」

つい口からこぼれた言葉に、先生が不思議そうな顔になった。

「なにが『そっか』なの？」

「え？ あ、えつとですネ」

考え考え説明する。

「えつと、だから、ウソって、バレたら困りますよね」
「そうね。だから隠すんだろうし」

先生の言葉が、リティーナの考えを裏付けた。

確信を持って言う。

「だったら、みんなではらしちゃったらダメですか？」

ミルという先輩が突然手を叩いた。

「わお、チビちゃんあたしと同じこと考えてる！ やるじゃん！」

「そ、そうですか……」

褒めてくれたのだろうが、何か複雑だ。だいいちこれでは、腹黒さを褒められたようなものだ。それにチビちゃんというが、自分とこの先輩とではそんなに年も身長も変わらない。

先輩のほうはリティーナの気持ちになど気づかず、嬉しそうにベツドの上で跳ねながら喋り始めた。

「でね、でね。チビちゃんが言ったとおり、バラしちゃえばおつけーでしょ。だからねー、中へ動映機と通話石持って、入っちゃったら面白いよね？ ついでにみんなにホントのこと教えたら、もっともっと面白いよね？」

「そ、それはそうだけど」

計画を聞かされた先生が焦る。

「けど、そんなことして大丈夫なの？」

「へーきへーき。何かしたら、それも流しちゃうもん。『講堂に仕掛けた』って言えば、分かりっこないし」

心底面白そうに、このミルという先輩が笑う。

Episode : 46

そして先輩は真つ黒な笑みを浮かべて言った。

「センス、動映機と通話石、あるよね？」

「通話石は学院長から渡されてるのがあるけど、動影機はどうだったかしら……？ 部屋になら、ぜったいあるんだけど」

「んじゃ、センスの部屋にいこー」

にこにこと言った先輩を先生が止めた。

「ダメよ、この状況で出たら、あなたたちも掴まるでしょ。私が独りで行って取ってくるから、あなたたちは待ってなさい」

「ぶー」

また先輩がおかしな声を出す。

でも、今はぜったいに先生の言うことが正しい。先生だけなら「忘れ物」で済むだろうけど、生徒が見つかったら連れて行かれてしまう。

「みんなここで大人しく待ってるのよ。いいわね」

「はい」

「よろしい」

最後にちよつとだけおどけて、先生は診療所から出て行った。

先生が向かった「部屋」は、同じ島内にある教官たち専用の寮だ。ただ島内と言っても学生寮の先で、ここからは島の反対側に近いから、歩いて往復するのけっこうかかる。

早く戻ってくればいいなと思いつながら、リティーナは同室のニネットのベッドに腰掛けた。

「足、下敷きにしないでね」

「うん」

先生が行ってしまうと、診療所の中はなんだかざんげとした感じだ。どこに何があるか分からないのも手伝って、少し不気味にさえ見える。

ずっと黙ってたら何だかおかしくなりそうなので、リティーナは口を開いた。

「あのね——」

「ねえねえねえねえ、その2人聞いてくれる？」

言いかけたところで、先輩が横から割り込んできた。

「えっと、何ですか？」

「うん、センセの前じゃ言えなかった、とっておきの話」

リティーナは思わずニネットと顔を見合わせた。この先輩の「とっておき」は、良くないことの気がする。

かといって先輩の話は無視できないのが、後輩の辛いところだった。

「とっておきって、何ですか……？」

本当は聞きたくないなと思いつながら、先輩に訊く。

先輩は以外にも級にまじめな顔になって、リティーナたちに話し始めた。

「さっきも言ったとおり、今このシエラ、副学園長のせいで大変な状態になってるよね」

「はい」

それは言われなくても分かる。リティーナの知っている限り、こんなことが起こったのは初めてだ。

Episode : 47

「けど先輩、問題じゃないんなら何がダメなんですか？」

「じゃなくてね、問題を作るの」

「につこり笑って先輩が言った。」

「問題作るって……？」

「うん、問題作るの。で、教官たち混乱させるの」

「え……」

思いもかけなかった話に、頭の中が真っ白になる。

「問題、問題、作る……」

「あーごめんね、驚かしちゃったか」

先輩に頭を撫でられた。

リティーナは言う。

「いえ、大丈夫です。それで、問題作るってなんですか？」

「うん、このままだと一番の問題は、生徒が人質になってるせいで、学院長が折れちゃうことだね」

先輩の言葉に頷く。実際には何もされないとわかってても、あの学院長だ。もし子供を殺すと強く脅されたら、仕方なく学院長の座を渡すだろう。

けれど、これは困る。

「絶対、イヤですよね……」

「でしょ。だからね、生徒解放しなきゃ」

「でも、どうやって」

生徒が何かされないよう、動映機と通話石を中に持っていく話は

さつき決まった。だからそれ以外のことなのだろうけど、見当がつかない。

「さつき、動映機と通話石の話はしたよね？」

「はい。講堂に持っていくって」

だがそれがどうしたのだろう？

先輩の説明は続いていた。

「だけど動映機と通話石だけだと、教官たちを牽制は出来るけど、追い出せないんだよね」

「そうなんですか？」

てつきり上手く行くと思っていたから、これは予想外だ。

「じゃあ、どうすれば」

「うん、だから中に入ってみんなを煽るの」

さらりと先輩が、怖いことを言っている。

「そ、それ、大丈夫なんですか？」

兄が上級隊なのもあって、リティーナは自分は余りいろんなことに驚かないと思っていたが、思い違いだったようだ。

Episode : 48

まあいくらこの先輩でも、みすみす捕まって身動きできない可能性のほうが高かったら、選ばないと思うが……。

当の先輩のほうは平然とした調子で答えた。

「だからヘーキだってば。どうせ手は出せないから。まあそれでもなるべくこつそりやるけど」

「そうなんですか……」

言っている主旨は何となく分かるが、やっぱり心配だ。

そんなリティーナの気持ちを見透かしたのか、先輩がクスクス笑う。

「大丈夫大丈夫、まず先に『教官は実は手を出せない』って広めとけばいいんだし」

ミル先輩を敵に回すことだけは、絶対にやめようとリティーナは誓った。

確かにこの先輩、普段の言動はおかしい。だがさまざまな道具を転用していくあたりは、どれも全く予想がつかなかった。だからこんな先輩を敵に回したら、絶対にタダでは済まないだろう。

「センセが帰ってきたら、あたし通話石と動映機持って行くね」

「え？先輩だけですか？」

自分も一緒に行くのだと思っていただけに、リティーナは慌てた。

「こういうの、人数多いほうがいいんじゃないですか？」

「あたしもそう思います。だって講堂、集められてる人数凄く多いし」

リティーナの友達、二ネットも似たようなことを言う。けれど先輩は譲らなかった。

「だーめ。あなたたちには違うことやってもらうつもりだし」

「そうなんですか?！」

ちよつと声が弾んでしまったのは、重大な仕事を任されたからだ。責任があるというのはミスができないけど、逆に言えば何でも自分のやり放題だ。

先輩に訊いてみる。

「あの、そしたらあたしたち、何を？」

「連絡係」

極上の笑顔で先輩が微笑む。

「お願いね」

「はい！」

さつきより更に声が弾んだ。

少し形は違うけれど、これは立派な任務だ。

「えっと、そしたら、ホントにあたしたち何を……あ、いえ、連絡係は分かりました。でも誰とですか？」

「んー、逃げ回ってる人たち全員かな。なるべく多く探して、この通話石を渡してあげて欲しいの」

「は、はい」

予想以上に大変そうだ。けれどここで出来るか出来ないかを天秤にかけてしまったら、きつと一生出来ない。

そうやってるところへ、ムアカ先生が戻ってきた。

Episode : 49

「動映機、あつたわよ。予備の通話石はいま出すわね」

「わーい、センス、ありがとうー」

言うやいなや、先輩は先生の手から必要なモノを奪い取った。そして止める間もなく、ぱっと外へ駆け出す。

「ちょ、ちょっと待ちなさい！」

言っても先輩が訊くわけはなくて、あつというまにその姿は草むらへ消えていった。

「全くもつ……こういうときだけ早いんだから」

腰に手を当ててちよつと外を睨みながら、先生はため息をついた。それから、リティーナたちのほうへと向き直る。

「はい、これ予備の通話石よ。無くさないでね」

「わかりました」

受け取って、何か聞こえてこないかと耳を澄ます。けれど今は、誰の声も聞こえなかった。

「これ、どこと繋がってるんですか？」

「たしか……学院長と、あと何人かの先生だけじゃなかったかしら。今はあなたたちと、あのミルも持ってるけど」

「少ないんですね」

それがリティーナのいちばんの感想だった。

けれど、いまの状況だと悪くは無いはずだ。少なくとも、たくさん
の教官が聞いているよりはずっといい。

何となくひとつ頷いて、通話石をポケットにしまい込む。

それからどう言おうとしばらく悩んで……リティーナは切り出した。

「先生、もっと予備、ありませんか？」

「あるけど、何にするの？」

不思議そうな先生に、意を決して言う。

「いえ、その、ミル先輩が他にもまだ、講堂に行っていない人がいるんじゃないか、って」

「確かにそうね。でも、どうやったら渡せるかしら……？」

「あたし行きます」

リティーナの言葉に、先生の顔色が変わる。

「ダメよ！ 外は危ないって分かってるでしょ？！」

「だいじょうぶです」

少女は言い切った。そして続ける。

「それに捕まっても、講堂へ連れてかれるだけです。危なくないです」

先生が答えに詰まった。

「先生、予備の通話石ぜんぶください。あたし、行きます。行かないきゃ助けられないです」

「……分かったわ」

ムアカ先生がついに折れる。そしてポケットから小さな袋を取り出した。

「これで全部。でも、絶対に無理しちゃだめよ」

「はい。——ニネット、ここで連絡係お願いね」

「うん、分かってる」

リティーナは袋をしまいこみ、入ってきた換気窓に手をかけた。

Episode:50

Seymore

「お前達、なんでここに居る！」

後ろから声かけられた瞬間、とっさに動いてた。ポケットに手え突っ込んで、煙玉を後ろの地面に叩きつける。

一瞬で背後に煙が広がって、あたしとナティはそれこそ走竜みたいに走り出した。

なんか後ろで激しく咳き込んでるけど、そいつは無視だ。

「どこ逃げるの？」

走りながらナティが訊いてきた。

「どこって言われても。教官が居なきゃどこでもいいんだけどね」
いま教官に見つかるのはヤバい気がした。なんでって言われても困るけど、なんとなくそんな気がする。

カンが間違ってるとは思わない。なんたってこのカン、何度もあたしらのこと救ってんだ。それが今日に限って間違いつてこたあ、さすがにないだろう。

少し走って、よさそうな藪を見つけて、慌てて二人で逃げ込む。

「あーもう、なにアレ」

「あたしに訊かないでくれ」

別にそういう意味でナティが言ってんじゃないのは分かるけど、思わずそう言っちゃまう。

「分かってるってばー」

「ごめんごめん、あたしも分かってる」

小声で囁き合ったあと、あたしらは顔を見合わせてちよつと笑った。気心が知れてるってのはいいもんだ。

それから一息置いて、ナティがまた小声で言った・

「でさ、あの講堂の騒ぎってなんだったと思う？」

「だからあたしに訊かないどくれ」

正直分かってたら、こんなところで無様に逃げ回ったりしてない。

ナティが肩すくめて言った。

「だよね。けどほんと、何がどうなっちゃってるんだか……」

これには思いっきりあたしも同意だ。だいいちこんな時間にチビたち集めるなんて、正気の沙汰じゃない。たぶんメチャクチャな騒ぎになっちまうはず。

「それにしたって、なんでわざわざチビども集めるんだか。部屋から出るなっただろうが楽だろうに」

何となく出た言葉に、ナティが答えてきた。

「もしかして、学院が攻撃されそうとか」

「まあ、無いとは言わないけどね……だったらもう、先輩達が戻ってくんじゃないかい？」

ウソみたいな話だけど、シエラがどっから攻撃されそうになっただってのは、今までに何回もあったらしい。そして理由はだいたい、この軍事力なんだとか。

けどあたしにやその辺がさっぱりだ。シエラがいくら実戦重視のMesだつても、所詮は訓練生。正規兵とガチでやり合ったらまず負ける。何とかなるのは、上級隊の先輩くらいだろう。

その程度のをどうにか潰そうだななんて、ずいぶん買いかぶら

れたもんだ。

Episode : 51

何より仮に敵襲だとしたら、先輩たちにいち早く連絡が行くわけ
で。ついでに戦力になるルーフェも同時に召集だ。

けど、あの子が呼び出されたのは、おやつ食べてたときの話だ。
それが今は暗くなってるわけで、かなり時間が過ぎてる。

しかもルーフェ、部屋に太刀を置きっぱなしときた。ホントに戦
闘が迫ってるんなら、これはさすがにあり得ない。

あたしはそれをナティに指摘した。

「もし敵襲だとして。だったら教官たち、演習島から先輩たち戻し
て、その他にルーフェも呼ぶだろね。なのに先輩たちは戻ってきて
ない、ルーフェにいたっては丸腰ってんだから、何か別の話じゃな
いか？」

「そっか……半日過ぎてからチビちゃんたち集めて、なのに先輩た
ち戻ってないんじゃ、防御にならないもんね。というか呼び出され
た話がバトルなら、ルーフェだって太刀取りに来るはずだし」

「そゆこと」

ただそうなる最初に戻るけど、教官たちなんであんなマネをし
てるかってことだ。ルーフェを呼び出して戻ってこれない状態にし
て、しかもチビたちはご飯時に一斉に集めてとか、理由が分かりや
しない。

おんなじように首かしげてたナティが、ひとりで二、三度頷いて
言った。

「ともかくさ、このまんまじゃ埒明かないよね。なんかしなくちゃ」

「だね。ただまあ、最初は情報収集かね……」

何がどうなってんだか分からないから、動きようも無い。

ナティが暗くなった空を仰ぎながら、指折り数えた。

「今分かってるのってやっぱり、ルーフェが武器ナシで居なくなっちゃったっていうのと、チビちゃんたちが集められてるのと、それだけだね」

「だと思っよ。せめてイマドでも居りゃ、もちつとなんか分かりそうなんだけどね」

なんせイマドときたら、人間の基準から見事にズレてるわけ。けどそのせいかアイツだんだん、索敵とか逃走が得意になってきてる。このまま行ったら上級隊に入る頃にゃ、とんでもなく上手くなつてそうで怖いくらいだ。

逆に言つと、あいつがその気になったらかなりの情報が手に入る。

「ねえシーモア、アーマルたちイマドに会えたかな？」

「どうだろね。でもあいつらだったら、会えてんじゃないかな。どうしても必要なら、イマドのほうから出てきそうだしさ」

ナティ相手に、気休めなんか言わない。そんなの言う必要もない。むしろ言ったら、逆にケンカになる仲だ。

ナティが笑った。

「だよね。イマドってそういうヤツだし。で、どする？」
その時、どっかで爆発音がした。

Episode:52

「どこ？」

「講堂のほうかね……？」

ただ暗いのもあって、ハッキリわからない。

「見に行ってみる？」

「行きたいとこだけど、もちっと様子見たいね。よく分かんないけど、なんか見つかつちゃヤバい気が——」

言いかけたとこで何か怒声が聞こえて、藪の中で黙って身をすくめた。

「いたぞ、あつちだ！」

「イマドめ……もう真相に気づいたのか？」

何本もの足がバタバタ目の前通つてくの見ながら、あたしはナテイに囁いた。

「イマド、追っかけられてるって言わないか？」

「言つと思う。けどこれで、教官たちが敵なのキマリかも？」

「だね」

イマドと来たら、メチャクチャに要領いいやつだ。だから教官に追っかけまわされるなんてこたああり得ない。

それに、教官が言つてた台詞。「真相」ってことは、知られちゃ困る何かがあるわけで。イマドはそこに気づいたと思われて、追っかけまわされてんだらう。

だとしたら教官たちは何か秘密を抱えてて、しかもヤバいことをしようとしてるはずだ。

——何か、は分からないけど。

ここが分ければ一瞬で疑問が片付くんだろっけど、現状尋ねる相手もないから、すぐにはムリってやつだ。

また他の教官たちが走ってく。

「いつそ、山狩りでもしたほうがいいんじゃないか？」

「そこまで人数が裂けないだろ。まあ最後は、やるしかないかもしれないかもしらんが……」

どうやら教官たち、全部敵だと思ってよさそうだ。

「ねえシーモア、あたしたちもずっとここはマズくない？」

「まずいだろっね、場所移動しよう」

どっか安全地帯見つけないことにゃ、こっちの身も危ない。

「どこ行こうか……」

「いつそ、管理棟とか」

ナティが呆れた声になった。

「シーモア、そこいちばん教官いるところ」

「まあ確かにそうなんだけどね」

そこで一旦言葉を切って、あたしは話した。

「けどさ、ナティ、考えてみ？　そこに生徒が居るなんて誰も思わないだろ。だから絶対探さないんじゃないかな」

「あ、そういう考え方はあるか……」

意味を理解したナティエスが、よこで考え込む。

Episode : 53

「もしもよ？　もしも管理棟で、誰も探しに来ない部屋があったら、いちばん安全ってことだね？　だって、まさか入り込むなんて思わないし」

「そゆこと。だから学院長室とか、案外安全な気がするんだがね」

「学院長室か……」

ナティがまた考え込んだ。

「もしも見つからないで、学院長室まで行けたとして。そしたら仮に学院長が居ても、絶対大丈夫よね。だって学院長、生徒のこと追いかけてりしないし」

「まあ講堂に連れてかれるくらいは、あるだろうけどね。けど理由くらいは教えてくれるんじゃないか？」

何となく互いの視線が合って、両方で頷いた。

「行ってみようよ、せめて理由だけでも知りたいもん」

「あたしも今、同じこと考えてたよ」

冷静に考えりゃ、ずいぶん無謀な話だ。けど行って見つかったからって死ぬわけじゃなし、そう思うと大して怖いとも思えない。

それに何より、この騒ぎがどうして起こったかくらいは知りたかった。イマドが追っかけられてたことから見て、教官たちが生徒を目の敵にしてる感じだけど、なんでそうなったか見当もつきゃない。

けど学院長なら、訊けばきっと教えてくれる。あの人はそういう人だ。

「行こうよ、シーモア」

「慌てなさんな、様子見て捕まらないようにだ」
「そだね」

茂みから茂み、じゃなきゃ茂みから建物の陰へ、見つからないように少しづつ動く。

その間、教官の姿は見なかった。たぶんイマドが騒ぎ起こしてるから、そっちへみんな行っちゃったんだろう。追っかけ回されてるあいつにや悪いけど、このままあたしらが学院長室たどり着くまで、そのまま鬼ごっこしててほしいとこだ。

ほどなく、あたしらは管理棟にたどり着いた。暗がりにも身を潜めて、建物のほうを見る。

「もしかして教官たち、ホントに出払っちゃってる？」

ナテイの言うとおり、管理棟の周囲にも教官の姿は無かった。

建物も、明かり点いてる部屋のほうが少ない。もうとくに辺りは暗くなってるわけで、わざと暗闇で行動する練習でもしてるんじゃないや、明かりつけないでってのはないだろうし。

「まあ全員ってこた無いだろうけど、でもかなりがどっか行ってるだろね」

どっちにしても、あたしらには好都合だ。

「行こう」

「うん」

何がどうなってんのか、それを知りたい一心で、見つかりづらい場所を進む。

ただ教官たち、よっぽど人手不足だったらしい。入り口の傍まで来ても、まだ人影がなかった。

Episode : 54

「ほんとに人いないね。そのほうがラッキーだけど」

「なんだかねー。あたしらみたいのに接近されるとか、ここの教官ども大丈夫なのかい？」

なんか違う方向で心配になるほど手薄だ。

「さて、どっから入るかね」

「いつそ、玄関から行っちゃう？」

案外怖いもの知らずのナティ、だんだん持ち前の度胸が表に出てきたらしい。あたしのほうがしり込みするようなことを平然と一言出す。

「まあちよつと中の様子くらい見よう。何も考えずに突っ込んで掴まるなんて、さすがに馬鹿げてるだろ」

「そだね」

入ってすぐのところにとどのくらい居るのか、それだけでも確かめたくて、壁に張り付いて必死に中を覗う。

と、動きがあった。何か中で話し声がして、バタバタと教官たちが出てくる。

「本当に見つかったのか？」

「分らん。だが確からしい」

そんな言葉を交わしながら、かなりの数が走ってった。

「……イマドでも捕まったかね？」

「そうかも。でもあいつ、そんなに簡単に捕まるかなあ？」

「んー、けど相手が教官たちだからねえ、何とも言えないよ」

ただ建物の中は、今まで以上に人の気配がない感じだ。今なら行けるかもしれない。

「ナティ、開いてる窓探そう」

「え？ あ、そうだね」

明かりの点いてない部屋を選んで、あたしは窓を次々確かめてった。

「ねえ、シーモア、ここ開いてるみたい」

「ほんとかい？」

ナティが見つけた窓をそつと動かすと、確かに動いた。

「入ってみよう」

「気をつけてね」

「分かってる」

心配そうなナティを後ろに残して、あたしはゆっくりと窓を開けた。けど何の警戒装置も働いてないらしくて、これといった反応はない。

「まったく、無用心だね」

言いながら棧に手をかけた。一気に身体を引き上げて、乗り越える。

「大丈夫？」

「平気だよ、なんも起こってないし。あんたもおいで」
あたしの言葉に、ナティが続く。

「ホントだ、ぜんぜん平気だね」

「だろ。教官ども、のんき過ぎるよ」

まさかあたしら訓練生が、こんな形で来るとは思わなかったんだ

ろっけど……それにしたって、教官がこんなことでいいんだるか？

Episode : 55

ドアの内側から聞き耳立てて廊下の様子を伺ったけど、人の気配はなさそうだ。

そっーとドアをほんの少しだけ開けて、それからあたしとナティ、2人して廊下へ出た。

囁きあう。

「学院長室、上だよな」

「階段で行こう。昇降台は教官たち使うから、たぶんヤバイ」
足音を殺して、あたしら建物の端へ向かった。

管理棟は真ん中辺に昇降台、両翼に階段って造りになってるがある造りだ。で、教官たちはどういうわけか、降りるときもいつでも昇降台を使う。だから階段を使うほうが安全ってやつだ。

「2階まで一気に行こう。で、そこで様子見るんだ」

「分かった」

ナティに言った後、階段の様子を見てから、あたしは一気に駆け上がった。

すぐ後ろにナティが続く。長年なじんだ気配で分かる。

ひとつ階を上がったところで、一旦階段から離れた。逃げ場の無い階段で教官たちに出くわすのは願い下げだ。

けど、これといった気配はなかった。それどころか建物の中全体が、やっぱりがらんとした感じた。予想以上に出払っちゃまってほしい。

「がら空きにもホドがあると思うんだけどねえ」

「んー、あれじゃない。演習もあるから、そっちに行っちゃったとか」

「なるほど……」

それから首をひねる。

教官たちが何したかったか知らないけど、生徒を集めるにしろイマドを追い掛け回すにしろ、数は居たほうがいいはず。なのになんだって却って不利な、泊りがけの演習の日なんざ選んだのやら。

とはいえそのおかげでここまで忍び込めてるんだから、ありがたく思っべきだろう。

「行こう」

また様子を伺ってから、階段を駆け上がる。学院長の部屋は一番上の3階だから、ここを上がれば階段は終わりだ。

2人で昇りきって、壁の影から廊下を覗いた。

（シーモア！）

（分かってる）

廊下の向こうのほうに教官の姿が見えて、2人して慌てて引込む。

「あれ、見張り？」

「たぶん……」

学院長室の前には、2人の教官の姿。ドアの前で動かないから、まあ見張りだろう。

「どうする？」

「うーん。学院長室はムリかしらんね」

根拠はないけど、あんな感じの大人に捕まるのは絶対にヤバイ。それだけは長年スラムにいたから分かる。

Episode : 56

それにしても生徒に悪意——どうもそついう感じしかない——
持つてる教官がなんで子供好きの学院長の部屋の前に居るのか、そ
の辺がどうにも解せない。

と、声がした。

「シーモア、ナティエス、こつちです」
驚いて振り向く。

「が、学院長?!」

視線の先に、見慣れた顔。階段脇の倉庫のドアが開いて、そこか
ら手招きしてる。

あたしらも急いで、倉庫の中へ滑り込んだ。

「学院長、なんでこんなところに」

「ちよつと待ってくださいね」

言つて学院長はそーつとドアを閉めた。けど奥に魔光灯があるお
かげで、真っ暗じゃない。

「足元に気をつけて。その右手の奥へ」

「はい」

言われたとおりに奥へ行く。つても狭い倉庫だから、大した距離
じゃない。

学院長も来て、一番奥の壁に手をついた。

「うそお……」

ナティが声あげたのも無理ない。なんせ壁が横に動いたんだから。
「すつごい仕掛けですね」

あたしの言葉に学院長が答える。

「この学院は古い上に、元が貴族の住まいでしたからね。特に管理棟は、面白い仕掛けがたくさんあるんですよ」

「へえ……」

初耳だ。

「さ、こちらへどうぞ。どうしてここへ来たか知りませんが、さすがに倉庫では落ち着かないでしょう」

そう言って、まず学院長が引き戸の内側へ入る。

「学院長、これって隠し通路ですか？」

「ええ」

学院長は慣れてるらしい。灯りこそあるけど、目印もなんにもない通路をすたすた歩いてく。そしてしばらく歩いた後、昇り階段になった。

「この先って、どこに出るんですか？」

ナティに訊かれて、学院長がにこやかに答えた。

「屋上ですよ。今お茶でも出しますからね。疲れたでしょう？」

その言葉聞きながら、やっぱりこの人は違うと思う。チビどもをいきなり集める教官とは、ぜんぜん違う人種だ。

階段を昇りきったところは行き止まりだったけど、学院長が頭の上、天井板をこそこそやったらパカッと外れた。

Episode:57

「こうなつてたんだ……」

屋上つてどこへ出るのかと思つたけど、顔を出した先は鐘楼裏のバルコニーだ。

管理棟は元々貴族の館だつたつてだけあつて、屋根に鐘楼兼ねた小さい尖塔がある。で、表から見ると分かんないけど、裏の教室棟なんかから見るとバルコニーがくつついてた。出たのはそこだ。

「さあさあどうぞ。この奥ですよ」

木のくぐり戸が開けられて、石造りの尖塔の中へ入る。

「すごい、ちゃんとした部屋なんだ」

「ええ。まあ狭いですがね」

学院長の言うとおり、中はかなり狭かった。幅は尖塔と同じだけあるけど、奥行きは大人が手を広げたらやっとくらい。窓はナシ。けど魔光灯が点いてるから暗くは無い。

ただ天井はすごく高く、しかも梯子を使ってロフトへ上がれるようになつてたりするから、寝る場所には困らなそうだ。

たぶんここも隠し通路と同じで、要するに壁の中つてヤツだろう。

入ってきたのと反対側には日持ちのしそうな根菜類に、石化した食料があつた。

「へえ、学院長も食べ物石化させるんだ」

目にしたナティが言つと、学院長が笑いながら答える。

「いえ、ルーフェイアに教わりましてね。作ってもらいました」

思わずナティと顔を見合わせた。

「それって、あたしらが任務でアヴァン行った時、ルーフェイアがやってたマネですか？」

「ええ、その通りです。これは腐る心配が無くっていい方法ですねえ」のんびり言いながら、どこからか学院長がポットを取り出す。そして丸い網カゴの中に炎の魔力石とお茶っ葉を入れて、ポットの中へ放り込んだ。

「お湯が沸くまで、少し待ってくださいね」

「はい。にしても学院長、なんでこんなとこに居るんです？」

あたしは疑問をぶつけた。

どう見たってここは隠れ家で、ふだん使う場所じゃない。なのにそんな場所に学院長が居るとか、どう見たって異常事態だ。

学院長が頭を掻いた。

「いやあ、実は副学院長がちょっと反逆騒ぎを起こしましてね」

「学院長、それ『ちよつと』じゃないです」

間髪入れずナティが突っ込む。

でも、これでやつと何が起こったか分かった。いきなりチビどもをご飯時に講堂へ集めてみたり、イマドを追っかけ回してみたり、みんな副学院長の仕業だろう。

「えーつとつまり、副学院長が学院乗っ取ろうとして。で、先輩たちが居ない演習中を狙ったのかな？」

「それで正解だろうね。いくら教官たちだって、上級隊が束になつてかかってきたら困るだろうし」

実際にやり合ったら、一部の妙なレベルの先輩とかが出てこない限り、まあ教官たち負けはしないんじゃないかなって思う。けどそれにしたって、かなり被害出るからやだろう。

Episode : 58

ナティが考え込んだ。

「けどそれって、けっこう厄介じゃない？ あれじゃチビちゃんたち人質同然なもの、先輩たちが首尾よく帰ってきてても、手も足も出ない気がする」

「確かにね……」

あたしらの会話に、学院長が横から口を挟む。

「チビちゃんたちが人質とは？」

「あ、えっとですね、実は低学年が講堂に集められてて——」
ナティの説明に、学院長の顔色が変わった。

「それでは、あの子たちが！ 行かなくては」

「学院長待った待った」

慌てて飛び出そうとした学院長をとりあえず止める。

「気持ち分かりますけど、闇雲に出るってマズくないです？ てかあたしら、授業でそう教わりましたよ」

「そうそう、まず情報収集！ って教えるし」

学院長が笑った。

「やれやれ、あなたたちにはわかりません。けれどこのまま他の子たちを放っておけないのも、分かってくれますね？」

「ええ、それは」

学院長は、そんなこと出来る人じゃない。ただだからこそ、そこへ付け込まれてる気がすごくする。

あたしは確認してみた。

「学院長、副学院長が反乱起こして、つてのは間違いないんですよ？」

「ええ。まあ情報が入ってすぐ隠れたので、副学院長かどうかは直接確かめていませんが」

学院長はそう言っただけ、これはたぶん間違いないだろう。と、ナティが不思議そうに訊いた。

「学院長、すぐ隠れちゃったのに反乱ってどうして分かるの？」

「鋭いですね、ナティエス」

学院長が孫を見るおじいちゃんみたいな顔になって、ナティのことを褒める。

「実はですね、この話自体は今始まったことではないんですよ。かれこれ３年ほど、彼から引退を迫られてまして」

「それ困りますって」

思わずホンネが出た。

「学院長居なくなったら、教官たちやり放題じゃないですか」

「シーモア、あなたもよく見てますねえ」

「普通分かりますって」

教官たちに二種類いることくらい、学院生なら誰でも——ルーフエは別——知ってる話だ。

ナティが確かめるみたいに言う。

「えーと。要するに前から副学院長と学院長は何となくケンカしてて、今日は向こうが本気になっちゃった、ってことか」

「実も蓋も無い言い方ですが、まあそんなところですねえ」

学院長が苦笑した。

Episode : 59

けどあたしにや、まだ解せないことがあった。

「で、学院長。副学院長がここを乗っ取ろうとしてるとして。なんでわざわざ、チビたちを人質にしてんです？ そんなもの、書類に無理やりサインさせたら終わりじゃないんですか？」

「やれやれ、スラム育ちは伊達ではないですねえ。大人の世界をよく知ってる」

また苦笑して、学院長は話し出す。

「シエラの学院長の交代は、特殊なんですよ。書類だけではダメなんです」

「へえ……」

これは初耳だ。

けど考えてみりゃ、ここは世界に名の知れたMESなワケで。横取りしたいヤツはたくさん居るはず。だからそれ防止のために、いろいろ策があるんだろう。

「特殊って、どんななんです？」

好奇心いっぱいって顔でナティが訊く。

ミルの吹っ飛び方に隠れてあんま分かんないけど、ナティも実はかなりのじゃじゃ馬だ。普段も何食わぬ顔で、ちゃらつとあちこち首突っ込んでたりする。

学院長のほうもどういうつもりか、説明しだした。

「実はですね、事前に決めた友人2人の確認が必要なんです」

「何ですかそれ」

意味わかんないし。

学院長が笑って続ける。

「院長職を引き継いだ時点で、自分の友人2人に頼むんですよ。で、それを書いて封をしておく。引退の時には事前には手紙をもらつか来てもらうかして、封をした手紙と同時に開けるんです」

面白い方法だ。

「それ、院長以外には『友人』が分かんない、ってことですよね？」
「ええ。だから勝手に交代させられないんです」

封された書類に書かれてる友人と一致すれば良し、違ったら無効で交代ならずってことだろう。これだと確かに、部外者は手の出しようが無い。

けどこの方法、抜け道がある。

「だいたい分かりましたけど、それ、いきなり学院長が死んじやったらどうなるんです？」

学院長が困ったような顔をした。

「やれやれ、本当に鋭いですね。というか、縁起でもないことを言わないでくださいよ」

「え、学院長ってそーゆーの気にするんですか?!」

ナティが更にヒドいことを言う。

「この年ですからね、そりや気にしますよ。それにしても今どきの子は、本当にマせているというか世の中を知りすぎているというか……」

……

「えー、学院長がピュアすぎるんですよ」

追い討ちに、学院長がため息をついた。

Episode : 60

「歳を感じますねえ、こうなると」

「しょーがないです、今の世の中って世知辛いからこれじゃどっちが大人だかわかりやしない。」

「で、死んじやったときはどーするんです？」

あたしは話を元へ戻した。

学院長がやれやれって感じで苦笑して答える。

「急死したときは、そういうときのために用意された別の封筒を開けて、中に書かれた人に連絡するんです。友人には次期学院長を指名して伝えてありますから、それを教えてくれます」

かなり用意周到だ。

ナティが更に面白がって訊く。

「それって、生きてるときに呼ぶ人と一緒なんですか？」

「ナティエス、もう少し言葉を選んだらどうなんです……違う人ですよ。同じだと、勝手に封を開けられた場合、誰だかを知られてしまいうでしょう？」

話を聞きながら、ずいぶん考えられたシステムだと思った。

「それって、部外者が口挟む余地不是吗ね」

「そうですね。まあそうでもしないと、権力を欲しがる大人が多いのですよ」

自嘲気味に学院長が言う。

けどまだあたしにや疑問があった。

「学院長、そこまでしてたらいくら副学院長つても、なんも出来ま

せんよね？ 自分がどんなになりたくたって、ひたすら指名待ちじや？」

「ええ、そうですよ」

答えを聞いて、更に疑問が大きくなる。

「それだと、なんだって副学院長、あんなふうにチビまで講堂に集めてるんです？ そんなことしたって、自分がなれるわけでもないのに」

学院長が寂しそうに笑った。

「そこは逆ですね。彼は私を捕らえて、次期院長を自分にしろと迫るつもりだったのだと思います。ただ私が早々に察して姿を隠してしまっただので、子供たちを人質にして引きずり出そうとしているのでしょう」

確かにそれなら辻褄が合う。

「ってことは、学院長が行ったらオワリじゃないですか」

「そうなります。けれど低学年の子達を、危険な目に遭わせるわけにはいきません。これから行きますよ」

「それ、相手の思う壺じゃないですか」

どう考えたって、副学院長の狙いはそれだ。チビたちを解放する代わりに、自分を次期学院長に指名しろって言うに決まってる。

学院長がため息ついた。

「私もそれは分かっていますよ。けれどあの子達を放ってはおけません。それこそ私を引っ張り出すために、何をされるか……」

まさにジレンマの真っ只中ってヤツだ。

Episode : 61

と、ほんと手を打ってナティが言った。

「それって要するに、人質がいなくなっちゃえばいいよね」

「……アンタ、ミルが伝染ったかい？」

あまりに突拍子も無い話に、ついそんな言葉が口を突いた。

「人質いなくなったらって、あの子たち居なくなったらまずいだろうが」

「あーごめんごめん、そーゆー話じゃないの」

ナティが手を振って慌てて言い訳する。

「要するにさ、人質がいるから困るわけじゃない？」

「そりゃそうだけどさ」

そんな分かりきったことを、なんで今更言い出すんだか。けど当人は大真面目だ。本気でミルの吹っ飛び加減が伝染ったかもしんない。

で、ナティがさらに大真面目で続ける。

「人質がいて困るんだもん、なくしちゃえば、って言ってるの」

「だからなくしたら困るだろうっての。あの子たちに何かあったらどーすんだい」

どうもさっきからこの重要なところがすれ違ってるのに、なんでナティがこだわるんだか。

けど次の一言で、あたしは思わず動きが止まった。

「違っつてば、逆。人質を解放しちやえばいいんじゃない」

言われてみりゃそうだ。足かせになってる人質がいなけりゃ、そ

もそも悩む必要なんかない。

ただ問題は……。

「あんたの言ってること正しいけどさ、ナティ、それどうやるのさ」

「んー、そこはほら、考えてみないと」

「やっぱこいつ、ミルが伝染ってる。」

あたしの表情に気づいたんだろっ、ナティが口尖らせた。

「もう、シーモアったら。人のことそんな顔で見なくたっていいじゃない」

「見たくもなるよ。見通しも無いのにアイディアだけ言って得意になってるんじゃ、ミルと変わらないじゃないか」

「あ、それもつとヒドい」

そういう辺りが更にミルに似てるの、本人は気づいてないんだろか？

けど学院長のほうは、そう思わなかったらしい。

「確かにナティエスの言うことは一理ありますね。何より、あの子たちの開放は最優先項目でしょうし」

「ですけど、あたしらだけじゃどうにもなりませんよ？ 先輩たちでも呼んでくりゃ別ですけど」

「そうですね…… 演習島への連絡手段は分かりませんが、本島内ならある程度できるかもしれません」

学院長の思いもかけない台詞。

「ホントですか？」

「確約は出来ませんがね」

そう前置いて、学院長が説明する。

Episode : 62

「副学院長の話、当然ですが前々から噂はあったんですよ。だから学院で使ってるのとは別に、通話石を用意しまして」

あたしは学院長をちよつと見直した。そんだけのもの——通話石はそう簡単に用意できるようなものじゃない——をわざわざしつらえてたなんて、やっぱりシエラの学院長だ。

「で、まあ、一応それを信頼できる方々に渡しておいたんですよ」「誰にです?」

好奇心に狩られて訊く。

「渡してある人ですか? でしたらムアカ先生に——」

何人かの名前が挙がった。みんな生徒から好かれてる人ばかりだ。ただ、問題があった。

「学院長、今言った人たちってムアカ先生除いて、みんな演習島ですよ?」

「ええ、そうなんですよ」

ちよつと困ったふうに学院長が言う。

「私もそれなりに警戒してはいたんですが、まさか演習で教官が手薄になったときにやるとは思いませんで」

「思ってください」

前言撤回、これじゃ学院長甘すぎだ。

さすがに言う。

「相手の人数が少ないときに行動起こすって、常套手段じゃないですか。なのになんで、無いと思ったんです?」

「うーん、言われてみるとなんででしょうねえ」
ダメだこりゃ。やっぱり学院長、どっか浮世離れしてる。

「そーゆーもんですよ。てか学院長だってシエラにいるんだから、そのくらいのこと気づいて下さい」

「そうですね、次はこうならないようにしますよ」

「次があつたら困るんですけど……」

学院長、このままどっかに隠者として籠ったほうがよさそうな気がしてくる。

なんだか粘土に釘打ってるみたいで、言っても張り合いがない。

「そうですね。で、万一のときは連携を取るつもりでした。まあ現状出来ていませんが」

院長頭掻いてるけど、ホントここは完全なミスだ。せめてもう少し、常に連絡が取れるようにいろいろ策講じときゃ、もうちつとコトが簡単に運んでるだろう。

ナティが横から口を挟んだ。

「要するに、その通話石を使えば、もしかしたら先生たちと連絡が取れるかも？っていうことですよね」

ナティは相変わらず、要点をまとめるのが上手い。

学院長が頷いたあと、視線を落とした。

「ただ先ほども言ったとおり、宝の持ち腐れですが」

あたしは考えた。通話石そのもののことは、間違はなくラッキーだ。ただ実質的には使えないんじゃない、アテになんてでしゃしない。

だから今はそんなことより、確実に出来ることを考えたほうがいいだろう。

Episode : 63

「いちばんのベストは、人質の開放か……さてどうやるかな」

「先輩たちいないしね。せめてイマドかルーフェが居ればいいのに」
学院長が寝耳に水って顔をした。

「あの2人が居ないのですか？」

「あ、イマドは居ます。けど教官たちと追っかけっこしてるみたいで」

かなり盛大にやらかしてたみたいだから、今頃大搜索隊が出来てるかもしれない。

——掴まりやしないだろうけど。

何であいつ、人の心を逆手に取るのがメチャクチャ上手い。しかも「それなら」って逆を突くと、今度は斜め上方向の行動とってくるんだから手に負えやしない。

今もきつと、教官たちを散々引っ張りまわしてきりきり舞いさせ
という当人は寝てるとか、そんなことやってんだろ。

「けど、ルーフェはどこか分かんないもんね」

心配そうに言うナティに、あたしも頷く。

「食堂で呼び出されて、それっきりだしね」

「そんなことになってましたか……」

学院長が考え込みながら訊いてきた。

「ルーフェイアがいなくなったのが、いちばん最初ですか？」

「ですね。あの子が戻ってこないんで探してたら、この騒ぎになっ

たんで。というか探してたおかげで、あたしら講堂に入らないで済んだんです」

あの時もしいつもとおり寮にいたら、今頃整列して人質の仲間入りしてる。

「それは何時頃ですか？」

あたしとナティは首をかしげた。

「正確には……みんなでおやつ食べてたんで、まあ午後ですけど」

「だとすると、私が知らせを貰う前ですね」

学院長の言葉からすると、ルーフエが拉致（？）されたのがいちばん最初だったらしい。

「それで、今も分からないのですか？」

訊かれてあたしは答えた。

「見当もつかないです。イマドなら分かるんじゃないかと思って知らせましたけど、あいつ追っかけてこしてるくらいだから、まだ見つけてないかと」

ナティと学院長が、2人して不思議そうな顔になった。

「シーモア、どうしてそれで、ルーフエが見つかってないってことになるの？」

「もしイマドがルーフエ見つけて組んでたら、今頃もつと大騒ぎだよ。ヘタすりゃ講堂開放されてる」

「なる……」

ルーフエ1人だけでも相当の戦闘力だけど、イマドと組ませたら何倍もヤバイ。息がぴったり合ってる上に、得意な分野が互いに補完する格好だから、おっそろしいことになる。

けどあたしが見る限り、今んとこイマドが教官を引っ張りまわしてるだけで、反撃してる雰囲気がない。だからたぶん、イマドはルーフェを見つけてない。

Episode : 64

「……もしかすると、地下牢かもしれないですね」
学院長が考え込みながら言った。

「この学院に、そんなものあったんですか？」

「ええ。何しろここは古いですからね、特にこの管理棟にはいろんなものがありますよ」

確かにそうかもしれない。なんせあんな隠し通路が縦横に通ってるくらいだ、地下牢のひとつやふたつ、あってもおかしくない。

「じゃあこの地下牢行けば、ルーフェいるかもしれないってこと？」

「分かりません。けれど見てみる必要はあるでしょうね。というか本当にルーフェイアがそこに閉じ込められているなら、急いで出してあげないと……」

なんでもか、学院長がやけに焦ってる感じだ。

「学院長、あの子ならだいじょぶですよ。万が一教官が手出しても、振り返ちだと思えますし」

「ルーフェじゃそだよねえ。というかあの子じゃ、牢壊して出てきそう」

「それが怖いんです」

学院長が言う。

「万が一牢を壊してもしたら、この建物がどうなるか。崩れないまでも、古い時代のものでけっこう貴重なんですよ。なのに傷が……」
「あー、そっちですか」

思わずナティと苦笑する。

たしかにルーフェ、イザとなったら建物のひとつやふたつ平気で壊す。しかもそうなたらそれが重要な国の建物だとか、そんなのは一切お構いナシだ。

にしても学院長、ちつともルーフェの心配してないのが。

「ともかくそういうことじゃ、学院長、急いで行きませんか？ あの子じゃもういつ動き出すか」

「そだよね。ルーフェって案外思いつきりいいところあるし」
ナティの言うとおりだ。

ただその「思いつきりがいい」ところは、気の毒って気もする。あの子は前線なんてとんでもないところで育って、出遅れが死に繋がるのをイヤってほど知ってるから、速攻で動くだけだ。だからもし普通に育ってたら、絶対にやらないと思う。

学院長が手早くお茶のセットを片付け始めた。

「ルーフェイアが仮に地下牢に閉じ込められたとして、何時間経ちましたかね……さすがにもうあの子でも、これ以上は待つてくれないんじゃないかと」

「もうかれこれ数時間だから、もう危ない気が……」

あの子じゃもつと早く動いたっておかしくないのに、ここまで待ただけでもある意味凄い。

「急ぎましょう、何かあってからでは——」

学院長がそう言ったところで、なんか爆発音が響いた。思わずみんなで顔を見合わせる。

「持たなかったみたい？」
「だね」

「と、ともかく行きましょう」

真っ青になった学院長が先に立って、あたしら隠し通路を駆け出した。

Episode : 65

R u f e i r

高い窓から差し込む光が弱くなって、牢の中が今まで以上に暗くなってきた。

なんでこんなところに居るのか、いまだに自分でもよく分からない。一応「麻薬の所持」ってことになってるけど所詮痛み止めだし、許可はきちんと貰ってる。

それにただそれだけを言うなら、上級隊の先輩達だって引つかかるはずだ。

やっぱり麻薬云々は言いがかりで、要はあたしを閉じ込めておきたいんだろうなと思った。

ただ、ここをうっかり出られないのが困りものだ。

出ること自体はそんなに難しくない。錠はあたしでも開けられる単純なタイプだし、施錠の魔法がかけられてても解けるから問題ない。イザとなったら鉄格子ごと破壊したっていいだろう。

でも教官は、あたしが逃げたらイマドを代わりに収監する、と言ってた。

だから迂闊に動けない。イマドの安全が確保されないうちは、ここから出るわけにはいかない。

——それにしても。

考えれば考えるほど腹が立ってくる。

あたしを収監したのはまだいい。何の意図か知らないけどどうに

でもなるし、実家から圧力かければ二度とやれないはずだ。

けどイマドは違う。あたしみたいに後ろ盾なんてないし、ここ以外に行く場所も無い。だから学院の言うことを聞くしかない。

そんなイマドまで、なんで巻き込むのか……。

あとで絶対言い出した人を探し出して、苦情を申し立てようと思う。

ただ、今はどうにもならなさうだ。

どういう造りになってるのか、この牢の中だと魔法がいつもより弱まる。だから上手く加減して……というのが難しい。なのに強引に使ったら、地下にある建物の基礎部分を崩壊させてしまいうさうだ。

もうひとつの理由は教官だ。

よほどあたしをここに閉じ込めておきたいのか、鉄格子の向こうには常に教官がひとり控えてあたしを見張ってる。おかげで何も出来ない。

もつとも教官は時々離れたところへ行くし、交代もあるみたいだから、その隙を突けば何とかなりそうさ。

あと、丸腰なのもちよつと気になってた。

別に武器がなくなつて魔法の威力は変わらないから、その意味じゃ問題ない。けど万が一教官たちと相対するハメになったら、主要な戦力はやっぱり太刀だ。魔法は小回りが利かないから、何をどう巻き込むか分からない。

もうこの状況じゃ巻き込んでいい気もするけど、さすがに最初から「巻き込んで当然」は良くないだろう。

何とか太刀を取りに行ければいいのだけど、ちよつと望み薄だ。

やっぱり今度からは学院内でも持っていようと誓う。

Episode : 66

どっちにしても外が暗くなっただし、適当なところで行動を起こしたほうがいいかも知れない、そう思っていた矢先。

こっん、と何かが音を立てた。

驚いて辺りを見回す。けど暗くてよく分からない。

気のせいだろうか、そう思ったとき、今度は何かがあたしに当たった。そしてコツコツと音を立てて床を転がる。

——石ころ。

当たり前だけど、こんなものが勝手に空を飛ぶわけ無い。何かの弾みで剥がれた天井のかげらが落ちてきたか、誰かが投げ入れたからだ。

教官の様子を伺う。

落ちてきた石ころに気づいた様子はなかった。それどころか、なんだかずいぶんそわそわしてる。交代の時間が近いからだろう。

大丈夫そうだと判断して、あたしは教官に気づかれないうち無詠唱で魔法を発動させた。

使った魔法は雷系、狙いは鉄格子の外だ。それを石が落ちたのと同じだけ、つまり2回放ってみる。

ちょっと間を置いて、また石が落ちてきた。今度は2回どころじゃなくて、しかも間が長かったり短かったりだ。

聞いているうちに、頭の中に文字が浮かび上がる。信号の長短を文字に置き換える通信信号だ。

前線では光だったり音だったり、いろんな形でこれが使われてた。それと同じだから、考えなくても意味が分かる。

『無事か』

教官の隙をうかがう。せっかくのチャンスなのに、迂闊な行動で潰したくない。けど教官はこっちなんで全然見張ってなくて、しきりに時計を見たあと階段を上がっていった。

——教官があれでいいんだろうか？

なんだか複雑な気分だけど、居なくなってくれたのは助かる。あたしはすぐに魔法で返した。

『ルーフェイア、無事』

教官が居なくなってしまったから、かなり大っぴらにやれる。またすぐに外から応答があった。

『太刀、いるか』

外にいるのが誰か分からないけど、あたしのことをよく知ってる人みたいだ。

ただ何となく、イマドじゃなさそうな気がした。だいいち彼なら、あたしが居るってわかった時点で太刀を放り込んでる。

シーモアたちかな、そんなことを思いながらまた返した。

『落として』

窓はかなりの高さがあるけど、魔法で減速させれば受け止めるのは簡単だ。ヘタに他の方法でノロノロ降ろされるより、よっぽど早くて確実だった。

Episode : 67

念のためだろう、最初に石が落ちてきて、次に太刀が落ちてくる。

「――セレスティアル・レイメント」

小声で魔法を唱えて発動させると、太刀の落ち方がゆっくりになった。それを上手く待ち構えて受け止める。

魔法の効果が切れると、ずしりと重い感触が手に伝わった。けどすぐ、牢の隅の暗がりへと押しやる。このまま持っていて、教官に取り上げられるのはイヤだった。

けど肝心の教官はなかなか戻ってこない。どうも階段を上がりかけた辺りで、通話石で誰かと話してるみたいだ。

耳をそばだてる。

「……あ、そうですか、じゃあまだ……ええ、こちらは大人しいです。代わりに収監が効いたかと」

要するに教官、あたしが牢の中で大人しくしてると言ってるんだろ。

――好きでやってるわけじゃ、ないのだけど。

教官も言ってる通り、イマドを身代わりにするって言われてなきや、こんなことづくに出てる。

話は続いてるみたいだった。

「え？　では捕らえていないのですか？」

教官の意外そうな声。予想外のことが起こってるらしい。

「……それだと、8年生のトップ陣は軒並みですか。ずいぶん逃げましたね」

8年生と言ったらあたしたちのことだ。そのトップ陣つて言ったら、あたしと同じAクラスの誰かだろう。これだとイマドやシーモアは、上手く逃げおおせたかもしれない。

「ええ、はい。こちらは大人しいので、捜索に行けるかと。分かりました」

どうやらこの教官、ここを留守にして誰かを探しに行くみたいだ。

話の続きに聞き耳を立てる。

「大丈夫です、身代わりの話が効いてますから。ええ、ですから早く、彼を捕らえた方が」

しめた、と思った。

この言い方だと、たぶんイマドは逃げ出してる。しかも全く捕まえられなくて、応援が呼ばれたみたいだ。

これならあたしがここを逃げ出しても、代わりにイマドを収監なんて出来ないだろう。むしろここを逃げ出して暴れたほうが、イマドが捕まる率が減るはずだ。

教官が応援に行くまでは大人しくしてて、そのあとここを破壊することに決める。

「まったく、てこずらせて」

ぶつぶつ言いながら教官が戻ってきた。そして牢の中を覗き込んで言う。

「少し席をはずすが、大人しくしてるんだぞ」

「……はい」

なんでそんなことをあたしに言うんだろうと思いいながら、素直に返事だけはした。早く行ってもらうにはそのほうがいい。

教官は満足そうに頷くと、牢から離れる。

Episode : 68

脱出するなら、やっぱりあの窓がいいだろう。

手近な壁も、頑張れば破れると思う。けどどのくらい厚さがあるか、やってみないと分からない。

その点窓になっているところは、壁の厚さはほとんど無い。だから破るのがいちばん簡単はずだ。

あたしはポーチの中から小さなナイフと細い糸を出して、刃の先端が爪先から少しだけ見えるように靴底にくくりつけた。さらに、いろんな道具が一束になったツールキットからピックを選んで、これは手に持つ。

それから少し考えて、あたしは詠唱を始めた。狙いは鉄格子のすぐ下辺りだ。

「時の底にて連なる炎よ、我が命によりて形を取り、うつつの世に姿を現せ——来いっ、サラマンダーっ！」

ゆら、と空間が揺れて、炎をまとった蜥蜴が現れる。そしてあたしの意思に従って、巨きな火球を窓の辺りに放った。

派手な音を立てて壁が吹き飛ぶ。魔法じゃなく召喚した精霊だから、結界で弱められても威力十分だ。

火蜥蜴が消えるのを待つて、次の呪文を唱える。

「幾万の過去から連なる深遠より、嘆きの涙汲み上げて凍れる時となせ——フロステイ・エンブランスっ！」

溶け出していた鉄格子と壁が凍りついた。こうしておけばたどり着いたとき、手をかけたりするにも楽だろう。

さらに別の呪文。

「——セレスティアル・レイメント！」

さっき太刀に使った浮遊の呪文を今度は自分にかけて、壁にピックを突き立てる。

後は簡単だった。爪先につけたナイフと手に持ったピックとを利用して、軽くなった身体で上へ昇っていく。

「よいしょ……」

昇りついた先に見えたのは、暗い色の海だった。どうやらここ、船着場から脇に反れた辺りらしい。

下を見ると、かなりの高さの崖だった。

——だから、窓なんてつけたんだ。

元々牢屋の中から見てもかなりの高さに作ってあったし、魔法はかなり威力が落ちる。窓自体にも鉄格子が嵌まって、仮に出られたとしても崖の上。これだけ条件が揃えば逃げられない、作った人はきつとそう思ってたんだろう。

でもちよつと甘い。魔法の種類を知らなすぎる。それにこの崖だって、簡単に降りる方法はある。

あたしは一旦壊れた壁に腰掛けて、足につけたナイフを外した。ここから先は逃げ回るだろうから、こんなものをつけておいたら走れない。

その時、下のほうで足音が聞こえた。

Episode : 69

「何があつた！」

さすがに壁を壊した音で氣いたらしい。もつとも氣づかれるために音を立てて破壊したのだから、来てくれないと困るのだけど……。

「居ないぞ！」

「早く扉を開ける！」

「か、鍵が」

やり取りにちよつと呆れながら、あたしは空中へ身を躍らせた。

一気に近づいてくる岩場。けどまだ浮遊魔法の効果が残つてて身体が軽いから、たいした衝撃もなく着地する。

辺りを見回すと、右手前方に船着場の小屋が見えた。だったら最初に判断したとおり、ここを右へ行けば船着場から管理棟へ向かう坂に出るはずだ。

さすがに暗いから走るのはやめて、それでも急ぎ足で岩場を歩く。

——教官たち、来るかな？

あたしが窓を破つて外へ逃げたと分かれば、きっと坂を封鎖するはずだ。

でもそれが狙いだつた。

今島内にいる教官は、そんなに多くない。だからイマドの搜索に当たつてる数も限られてるはずだ。

その状態であたしが暴れれば、当然二手に別れるしかない。そうなればイマドの負担が減る。

転ばないように気をつけながら岩場を抜けて、栈橋から続く道へ出た。

けどそのまま進まず、道の脇に隠れる。絶対に教官たちはここに非常線を張るはずだ。

息を潜めて待っていると、思ったとおり話し声が聞こえてきた。

「外へ出たなら、通るのはここだけだ。捕まえるぞ」

「はい」

捕まえるなんて、まるであたしが害獣みたいな言い方だ。

今すぐ飛び出したいのをガマンして、茂みの中から様子をつかがう。

声から判断して、教官たちは数人つてとこだろう。どんなに多くても10人は超えてないはずだ。これなら何とかなる。

教官たちが坂の中腹を塞ぐのを待つて、あたしは飛び出した。

「ルーフェイア・グレイス、何故逃げ出した！」

大きな声で教官の一人が問いかけてきたけど、そのまま走る。

「止まれ！ イマドをお前の代わりに収監したぞ！」

この言葉も無視した。

ついさっき、イマドが捕まらないと増援要請していたくらいだ。

それからいくらか経ってないのに、彼が捕まってるわけがない。

だいいち彼は他人の考えを読める。だから教官たちの逆を突いて

逃げ回るなんてお手の物だ。

Episode : 70

走りながら太刀を抜く。

教官の数は予想より少なくて5人だけ。どうとでもなる数だ。

「と、止まれ！」

スピードを落とさないあたしに焦ったんだろう、教官が上ずった声で命令してきた。

そこへ真っ直ぐ突っ込む。

「こ、このー！」

広げられた網——これじゃホントに動物扱い——を潜り抜けると見せかけて横飛び、網を持っていた教官の手を峰で強く叩く。

悲鳴が上がって網の片側が地面に落ちた。

「きさま——」

別の教官が覆いかぶさって捕まえようとしてくる。それを身体を入れ替えてかわして、首筋を峰打ち。

そうしてる間にもあたしを突破させまいと、教官が2人、前から迫ってきた。

「トオーノ・センチンツァ！」

雷撃が足元に炸裂して、教官たちの動きが一瞬止まる。そこへ踊りこんだ。

近いほうの教官の鳩尾へ、太刀の柄を突き入れる。更にもうひとりをしやがんでかわして、たららを踏んだ教官の腕を掴んだ。

そのまま勢いを利用して投げ飛ばし、教官たちがひるんだところで呪文を放つ。

「ゼーレ・シユラフ！」

眠りの魔法が周囲に広がって、教官たちが次々と倒れた。

——残るは1人。

さっき手首を強打した痛みで、あんまり魔法が効かなかったんだろ。手首を押さえながら痛そうにしてる教官の喉元へ、刃を突きつけて問う。

「なんであたしを収監したか、教えてもらえますか？」

「い、言っただろう！ 麻薬の所持——」

言葉が途中で止まったのは、あたしが切っ先を押し付けたからだ。

「それは許可を取ってます。理由は別にありますよね？」

あたしの問いに返ってきたのは、別の言葉だった。

「こ、こんなことをして、タダで済むと思ってるのか。た、退学させるぞ」

「どうぞ。でもそうなら、うちからの寄付はなくなります。あと政財界へ今回の件、もちろん流します」

教官の顔が引きつった。

シエラの資金繰りは決して楽じゃない。本校生の働いた分と、卒業生を軍事関係へ斡旋した仲介料、それに富裕層向け箔付け校の高額な授業料と寄付。その辺でどうにか賄ってる状況だ。だからあたしの親からの多額の寄付は、本校が自由に使える貴重な資金源だった。

そんな状況で、寄付が無くなったら。

加えて師弟を箔付け校に大量に入学させている、政財界の親たち

にまで「生徒に手を出した」と流されたら、間違いなく経営は大変なことになる。

Episode : 71

「で、何が起こってるか教えて頂けるんですか？」

あたしがもう一步詰め寄ると、教官の顔が更に引きつって、笑ってるみたいになる。

もっともあたし自身は、たぶん教えてもらえないだろうと思ってた。シエラ本校の教官ともあろうものが、簡単に口を割るようじゃ困る。

「だ、だから麻薬の——」

全部訊く前に後ろへ回って、この教官を昏倒させた。今は同じ説明を二度も聞いてられるほど、時間が余ってない。

昏倒した教官5人は、なんだか寝顔が気持ち良さそうだった。

——疲れたかも。

ため息をついてから、教官たちを拘束にかかる。ただきちんとした拘束具やロープがあるわけじゃないから、ポーチから魔法で強化された細い紐を取り出して、一人一人急いで後ろ手に縛る。それから魔法で軽くして、2人ずつ船着場へ持っていった。

使おうと思ったのは船だ。

本当はあたしが入ってたような牢に入れるのがいいけど、さすがにそんな暇はない。かといってここで見張りをしてるわけにもいかない。

だから船に教官たちを放り込んで、時間稼ぎするつもりだった。後ろ手に縛った上で船の中に転がしておけば、目が覚めてもすぐには脱出できないだろう。

船着場には連絡艇と、もっと小さいボートとがあった。

小屋の様子を伺いながら、ボートのほうへ近づく。と、ドアが開いた。

とっさに身を隠す。

「……おや、いい気味だ」

出てきた船着場のおじさんは教官たちを見てそう言っただけで、拘束を解こうとしなかった。

「誰がやったのか知らないが、たいしたもんだ。まあここはシエラだからな。下級生だからって侮るからこうなる」

ずいぶん大きな声だ。とても独り言には思えない。

「まったく、副学院長も何を考えてるんだか。このシエラを乗っ取るうなんて、簡単じゃないことくらい分かってるだろうに」

どうもこの人、あたしに話を聞かせようとしてるらしい。これをやったのがあたしだとは、おじさんもさすがに分かってないだろうけど、生徒の誰かだってことは見当がついたんだろう。

「そもそも学院長の変更は、勝手には出来ん。ただ名乗ってもダメだ。そんなことも知らずにこんなことを起こすんだから、無知の極みだな」

だいたいの状況が飲み込めてくる。

どうもあたしが牢に入れられてから、学院内で騒動になってるみたいだ。というか騒動を起こしたかったから、まずあたしを言いかけりで収監したんだろう。

「演習島へ2人ほど連絡に行ってくれたが、上手く伝わるかどうか……おかしな教官に見つからないといいんだが」

誰だかわからないけど、もうこっそり知らせに行った人もいるら

しい。

ただ、アテには出来ないなと思った。おじさんが言ってる通り、まず敵対してる教官に見つかる可能性がある。そうになったら捕まって、演習島の先輩たちは知らないままだろう。

Episode : 72

「ここへ来たお嬢ちゃんの話じゃ、低学年は講堂に集められてるらしいからな。何とかせんと」

耳を疑う。この状況で小さい子たちを一堂に集めてるってことは、待遇はともかく人質にされてるってことだ。迂闊に手を出せない。

「まああのお嬢ちゃんには、とりあえず診療所へ行ってもらったが……無事着いているといいが」

そこまで言うとおじさんは、また教官たちに目をやってつぶやいた。

「ロープが要るな。取ってくるか」

おじさんが小屋の中へ入るのを待つて、隠れた場所からあたしは出た。

おじだんと話をしようかと思ったけど、結局やめる。接触はいつでも出来そうだし、これが罠って可能性もゼロじゃない。だったらこのまま単独行動をしてたほうが、あたしの居場所やなにかを知られないで済むはずだ。

「セレスティアル・レイメント」

もう一度教官たちを軽くして、最初に目をつけていたボートの中へ1人ずつ寝かせていく。

ついでに舫つてある綱を解こうかなと思ったけど、さすがにやめた。流れていつて転覆でもしたら面倒すぎる。

まだ目を覚まさないのを確認したところで、小屋のドアノブが音を立てた。

急いでまた隠れる。

「おやおや、手際のいいことだ。これじゃ私の出る幕が無いな」
おじさんが面白がるような調子で言った後、更に続けた。

「それにしても演習島の教官連中、どうも一部帰ってくるらしいな。
そうなれば講堂の子たちの救出は、難しくなるか……」

嫌な情報だ。けど知らなかったらもっと大変なことになるから、
教えてくれるのはありがたい。

——偽情報の可能性もあるけど。

相手が焦るような情報を流して慌てさせて、というのは常套手段
だ。だから鵜呑みには出来ない。

そうは言ってももし本当に教官たちが帰ってくるなら、救出が難
しくなるのは間違いない。だから罠の可能性を考慮に入れながら、
講堂開放に動くしかなかった。

さっき教官たちを縛り上げたついでに懷から奪っておいた、通話
石を出す。あたしが発言するのはムリだけど、こっそり聞くだけな
ら問題ないはずだ。

『イマドⅡザニエス、捕獲できません』

『シーモア及びナティエスⅡデボワール、所在不明』

いろんな情報が飛び交ってる。それにしてもさすがAクラス、け
っこうな数がちゃっかり逃げてるらしい。

ただ、その逆も居た。

『ミルドレッドⅡセルシェⅡマクファディ、捕獲しました』

嬉しそうな教官の声が気の毒に思える。ミルには悪いけど彼女を
中に入れるなんて、猛毒を飲み込むようなものだ。

もっともミルが外に居たら居たで、やっぱり問題が多いのだけど

⋮
○

Episode : 73

『ルーフェイア「グレイス、脱獄しています」』

これには言い返したくなかったけど、頑張ってガマンした。けど脱獄も何も、言いがかりで収監したのだから、謝ってから外へ出すのが筋じゃないだろうか？

絶対あとで文句言おうと思いつながら、会話を聞き続ける。

イマドの居場所は、よく分かってないみたいだった。さつきから「やられた」という報告ばかりで、行くともぬけの殻らしい。

——今度教えてもらおう。

イマドの隠密と霍乱、それに逃走は、あたしでもかなわないところだ。だから素直に教えてもらうべきだろう。

ただイマドの場合他人の考えてることがかなり読めるから、それを利用してただけって気もするけど……。

『学院長、まだ見つかりません』

入ってきた情報にはっとする。

今回の一連の騒ぎで、どうも学院長はキーマンらしい。だからその居場所を裏切り組みの教官たち、必死になって探してるんだろう。会話はまだ続いていた。

『秘密の場所とやらじゃなかったのか？』

『先ほど向かいましたが、既に誰も居ませんでした』

教官たち、秘密の場所がどこか知ってただろうか……？ ただどちらにしても、学院長がつかまってるのは確かだ。

どうやったら合流できるだろう、それを考えながら、あたしは通話石の会話を聞くのを一旦打ち切った。

船着場のおじさんが海の向こうを見ながら言う。

「夜中を目安に、戻ってくるらしい。そうなったら本当に身動きが取れんな」

貴重な情報だ。ある程度これを考慮に入れながら、動いたほうがいいだろう。

「やれやれ。何か妨害できればいいんだが、この手足ではなあ。まあ、ゆっくり考えてみるか」

言いながらおじさんは片足を引きずって小屋へ戻った。そつと隠れていた場所から出る。

——どうしよう。

時間が限られてるだけに、ここでのった選択肢が後々致命傷になりかねない。だからよく考えてみる必要がある。

やったほうが良さそうなことは、学院長との合流、イマドか他のAクラスとの合流、それに講堂に集められてる子たちの開放だろう。

この中で最重要は、間違いなく低学年の解放だ。

ただ、あたし1人でやれるとは思えなかった。中にはたくさん教官が居るわけで、その人たちが思い余って手榴弾でも使おうものなら、大変な被害が出る。

もう少し考えて、あたしはまず診療所へ行ってみることにした。

Episode 74

船着場のおじさん情報じゃ、診療所はあたしたち生徒と敵対関係じゃないらしい。だから行ってみる価値はあるだろう。

もちろん、罾って可能性はある。けどそうなくても相手は教官だけで人数が限られてるから、その気で準備してれば逃げられるだろう。

船着場からの坂道を上がっていく。用心しながら進んだけど、こっちへ来る人は居なかった。

あたしが逃げ出したのはバレてるし、さっき教官たちが来てたくらいだから、ここに居るのは分かってるはずだ。

なのに誰も来ないってことは、さっきの5人で十分だと思ってたんだろうか？

なんだか複雑だった。数が少ないのは助かるけど、自分が舐められてるみたいでちょっと納得が行かない。

ただ他に誰も来ないのは、まだ捕獲隊が壊滅したのを知らないだけっていうのも十分ありえた。だから捕まえられなかったと分かれば、今度は人数を倍にして追ってくるだろう。

ともかく今のうちに、この坂を抜けるに限る。

結局最後まで出会わないまま——出会ったら困るけど——あたしは坂を昇りきった。

すぐに横へそれて、一旦脇の茂みに隠れる。これ以上面倒なことに巻き込まれたくない。

見上げた管理棟は、あちこちの窓から明るい光が伸びてる。

ただ、点いている部屋の数が少ない。どうもみんな、あたしやイ

マドを捕まえに教室を出てるみたいだ。

——そういえば、教官って何人残ってるんだろう？

ふと気になった。

シエラは生徒の数が多いだけあって、教官の数も多い。確かこの本校も、全部で100人くらい居たはずだ。けどそのうちの何人が演習島へ行ってるかは、参加してないあたしは知らなかった。

まさか9割が行ったってことはないだろうけど、9割ここへ残ってると思えない。そうすると妥当なところで、4〜6割の40〜60人だろうか？

ただけっこう多く残ってたとしても、教官たちはそれぞれ専門が違ふ。そういう意味ではつけ込む隙は十分だ。

実技専門の教官はもちろんいちばん数は多いけど、それでも確か三分の一くらいだ。そして戦術専門の教官たちと一緒に半分くらいは演習島へ行ってるはずだから、多くても本島には20人くらいしかいないだろう。

うち5人はさっき縛り上げたから、残りは10人ちよつとだろうか？ でも更に何人かはイマドを追い掛け回してそうだから、手が空いてるのは5〜6人な気がする。

どっちにしても大丈夫そうなら一旦診療所へ入れてもらって体制を整えなおして、それから出たかった。

管理棟を避けながら回りこむようにして、診療所の裏手へ出る。

ここも明かりが点いてるから、少なくとも誰か居るんだろう。

どこから入るうかとコソコソ見て歩いてるうち、裏のほうの通気窓が開いてるのを見つけた。ここから入れそうだ。

Episode : 75

考え込む。

棧に泥がついてるのを見ても、ここから出入りした人が居るんだろ。

けど、本当に入っているのか自信が無かった。もし情報が間違っていたり状況が変わってたとしたら、入った途端にまた捕まりかねない。

かといって確かめようも無いのが困りものだ。手紙や何かで連絡しても、ウソをつかれたらもう分からない。

どうしようかと考えあぐねてたら、入り口のほうから声が聞こえた。

「ちょっと！ 隣の食堂へ行くだけだって言ってるじゃない！」
ムアカ先生の声だ。

「具合の悪い生徒がここに居るといふから特別措置を取っているのに、それが不満と言ふなら特別措置を無くすが？」

「そういう話じゃないでしょう！ 夕食がまだなのよ、もっと具合が悪くなるわ！」

なんだか深刻な話になってる。

「だいいちあなたたち、何を考えてるのよ！ まさか、講堂の子たちにも何も食べさせてないんじゃないでしょうね？！」

「さあな。向こうの隊の動きは私の知るところではない」

やっぱりムアカ先生は生徒の味方で、反旗を翻した教官たちとは敵対関係みたいだ。これなら診療所に入っても大丈夫だろう。

でもその前にこの教官だ。

こっさり忍び寄る。この教官、先生と言いつのに夢中で、全く周囲を警戒してない。

教官越しに正面に向き合った先生が驚いた顔をしたのとはほぼ同時に、あたしは教官の背に手について魔法を唱えた。

「ゼーレ・シユラフ！」

至近距離からの眠りの魔法に、教官の身体が力を失う。

「危ない！」

言って先生が教官の身体を受け止めた。

「頭でも打ったら大変だわ」

先生はそう言ってるけど、その前に起きるかどうかが心配したほうがいい気がする。まあ、起きると思うけど……。

「ルーフェイア、あなたは講堂へ行かずに済んだのね。ともかく中へ」

「あ、でもその前にこの教官……えっと、ロープ、ありますか……？」

何しろあんな状態で収監されてしまったから、ロクな装備が無い。

「ロープ？ ちょっと待ってね」

先生が診療所の中へ戻る。

教官のほうはぐっすり寝ていた。起きる気配はなさそうだ。

「これがあつたけど、用が足りる？」

「大丈夫です、ありがとうございます」

今度からは例え学内でも絶対にきちんと持っていよう、そう思いながら先生が出てくれたロープを受け取る。

Episode:76

この教官も後手にして縛り上げて、魔法で軽くした。

「どうするの？」

「その辺に置いてきます」

本当は他の教官と一緒に船の中に置き去りにすればいいんだろうけど、距離を考えるとちょっと無理だ。

少し考えて、向かいの図書館の裏へ持っていく。

図書館の建物の裏手は、壁ギリギリまで茂みだ。その影へ適当に押し込んだ。

——全部片付いたら、迎えに来ないとダメかも。

こんな場所だと、捜索隊が組まれても見つからないかもしれないけど他の教官に放置したことを知らせると、大目玉くらいそうだし……。

ちょっと困ったなと思いながら、あたしは眠ってる教官を置き去りにして戻った。目が覚めたら自力で道路まで這い出してくる可能性もあるし、今考えなくてもたぶん大丈夫だろう。

「大丈夫？」

診療所まで戻ると、ムアカ先生が心配そうに入り口で待ってた。

「先生、中へ。見つかります」

「え？ あ、そうね。ごめんなさい」

あたしの言葉に慌てて先生がドアを開けて、2人で建物の中へ入る。

「わ、もしかしてルーフェア先輩?!」

部屋のベッドには、見知らぬ下級生が寝ていた。

そしてあたしを見て、ベッドの上で慌てて背筋を伸ばす。

「あの、えっと、あたし、ニネットって言います! その、リティーナの友達で……って先輩リティーナ知りませんよね……」

なんだかよく分からないけどずいぶん緊張してるみたいで、言ってることがメチャクチャだ。

けど、イヤだとは思わなかった。むしろ見ていて可愛い。

「ええと、ニネット? もしかして4年生?」

イマドが、リティーナという4年生の子のことを話していたの思い出して、そう訊いてみる。

女の子が手を叩いた。

「先輩すごい! そうです、4年生です!」

あてずっぽうのどこが凄いのかわからないけど、喜んでもらえたみたいだ。

ムアカ先生が可笑しそうに笑いながら言う。

「良かったわねー、ニネット。憧れの先輩と話が出来て」

「はい!」

何が憧れなのか不思議に思いながら、でもあたしは何も言わなかった。せつかく嬉しそうにしてるのに、水を差したら可哀想だ。

「もうニネット幸せですう。そうだ、明日みんなに自慢しなくちゃ!」

「え……」

なんであたしと話しただけで、友達に自慢するんだろう? けど首をかしげてる間にも、どんどん話が進んでいく。

Episode:77

「いつもみんなで、先輩のこと見てます！」

「いつも……？」

あたしなんか見て、何か面白いんだろうか？

そういえば世の中には、好きな相手を徹底的に付け回す人がいる、
っていう話を聞いたことがある。

でもこの子を見る限り、そういうのとは違う感じだった。

「あ、その、別にヘンな意味とかじゃなくて！ でも先輩美人だし」
話を聞けば聞くほど、謎が深まっていく。だからムアカ先生が話を
さえぎってくれたときは、心底ホッとした。

「はいはい、もうそのくらいにきなさいね。そういう場合じゃない
でしょ」

「え？ あ！ ごめんなさいっ！ ああ二ネットどうしよう、これ
じゃ先輩に嫌われちゃう」

前言撤回、やっぱり事態はこんがらかったままだ。

というか、別に誰も嫌ったりしてないのだけど……。

どうしたらいいのか困り果てたら、また先生が間に入ってくれ
た。

「二ネット、先輩が困ってるでしょ。あなたの話はその辺までにし
ときなさいね」

「はい」

ちよっと面白いところがある子だけど、悪気はなかったんだろう。
二ネットが少しだけ口を尖らせてみせてから黙った。

「で、ルーフェイア、あなたはどうしてここに？」
やっと話が進みだす。

「私が生徒たちから聞いたところじゃ、みんな講堂に集められてるらしいんだけど。あなたは行かなかったのね」

「行かなかったというか……行けませんでした。収監されてたので」
「収監?!」

先生が素っ頓狂な声を出した。

「収監つて、牢に入れられることでしょう?! なんであなたが
というか、この学校にそんなものあったの? あ、もしかして営倉
?」

「教官が言うには、古い時代の牢屋らしいです」

確かに言われてみると、どうしてあんなものがあつたんだろう?
それとも貴族の館つて、牢屋を作るのがポピュラーだったんだろうか。

先生も似たようなことを言う。

「なんだって建物に牢屋なんて……貴族の考えることって分からないわ。けどそれにしただって、どうしてあなたがそんなところに?」
「分かりません」

むしろ、あたしが訊きたい。

ただ先生は、この答えに納得出来なかったんだろう。言葉を変えてまた訊かれた。

Episode : 78

「でも、何も理由が無かったら収監できないでしょう?」

「一応、麻薬所持って……でも痛み止め用で、許可ももらってますし……」

「ああそうね。確かにあなた持つてるって、学院長から聞いてるわ。普通の痛み止めがなかなか効かないから、許可してあるって」

やっぱりこの話、ちゃんと教官たちには伝わってるみたいだ。だとしたら予想通り、言いがかりってことになる。

——絶対に文句言おう。

こんなことをされるんじや、許可の意味が無い。

先生も同じ考えみたいで、ぶつぶつ言いながら手を動かしている。

「まったく。副学院長ときたら自分たちで『あの子の件は全員覚えておくように』とか言ってたくせに、何がしたいのかしら」

お茶を淹れてるみたいで、診療所にいい匂いが広がった。

「だいいちここは曲がりなりにも学校。いちばん先にするのは、子供たちを育てることなのに——はいどうぞ。二ネット、あなたもね」
出されたカップの中で、透き通った瑪瑙色が揺れていた。香りがいいから、きつとどこか有名な産地のお茶だろう。

「ありがとうございます、いただきます」

「いいえ。ずっと閉じ込められてたんじや、お腹すいたでしょ? ごめんなさいね、こんなものしか用意できなくて。食堂が隣なもんだから、診療所の中にはあんまり食べ物用意してないのよ」

先生の言葉に、だからさっきの押し問答だったのかと思った。具合の悪い生徒を預かっているのに食べさせるものがないんじゃ、先生としては居ても立っても居られなかっただろう。聞いてみる。

「そしたら……これから、取りに行きますか？」

「そうね、お茶飲んだら行きましょうか。何か夕食と、出来たら明日の朝食だけでも確保しないと」

先生の言うとおりだ。どうしても調達できないなら仕方ないけど、可能なら、特に見通しのつかないときは食べておくに限る。

ただ、あたしは先生も行くのは反対だった。

「先生、食堂へはあたしが行きます。危険ですから」

先生はいわゆるふつうの医者で、医務官でさえない。だから武器を扱うとかそういう人を相手にするとかは、全く出来ない人だ。なのにこんな混乱した状況の中へ出て行くのは、自殺行為だろう。

「でも、生徒に行かせるなんてできないわよ」

先生の反論にあたしは首を振る。

「あたしのほうが、訓練を受けて慣れてます。何かあったときも、あたしだけなら対処できます」

イマドやシルファ先輩、タシユア先輩レベルならいいのだけど、同行者は大抵あたしの行動を制限することになる。ましてや素人の先生じゃ、申し訳ないけど足手まといったった。

Episode : 79

少し間があってから先生が言う。

「ルーフェイア、確かにあなたの言うとおりね。納得行かないけど」

「……すみません」

その必要はないのだけど、なんだか申し訳ない気がして謝る。

「あら、いいのよ。私がこういうときに役に立たないのは本当だし。そうしたら、急いで隣の食堂まで行ってきたもらえる？」

「はい」

お茶を急いで飲み終えて、あたしは立ち上がった。

先生が部屋の奥を見ながら言う。

「ドアから出て行ってもいいけど、奥の通気窓のほうがいいかもしれないわ。どっちでも、あなたの判断で使ってちょうだい」

「分かりました」

ざっと装備を確認して、通気窓のほうへ向かう。ドアは出入りはしやすいけど、見つきり易いのが難点だ。その点裏手にある通気窓は出入りはちょっと面倒だけど、まず見つかる心配はない。

小さな窓に身を寄せて外の様子を伺ったけど、何の気配もなかった。大丈夫そうだ。

うつぶせになって急いで足から外へ出る。そしてそのまま、食堂の裏手に走りこんだ。

——いい匂い。

中じゃ夕食が出来てるらしい。

まさか表の入り口へは行けないから、裏の勝手口に手をかける。ドアノブをそつと動してみると、忙しい時間帯のせいか鍵はかかってなかった。

ほんの少しだけ扉を開けて、急いで中へ滑り込む。

真っ暗だった外と違って、厨房は魔光灯が幾つも付けられてた。そして出来上がった山盛りの料理を目の前にして、何人もの調理人さんたちが難しい顔で話してる。

棚の影に隠れて、あたしは聞き耳を立てた。

「まったく、今日はどうなってんだい、誰も食べに来ないなんて」「教官の話じゃ緊急の集会だってけど……時間がかりすぎだよ、料理が冷めちまう」

どうも、誰も食べに来てないらしい。だとするとみんな講堂へ集められてから、何も食べてないってことになる。

どっちにしてもこの会話だと、真相は知らされてないみたいだ。あたしは棚の陰から出て、料理人さんたちに近づいた。

「あの……」

「うわっ、どこから!？」

なんだかすごくびっくりされる。

「あの、すみません、えっと……」

けどあたしが何か言うより早く、やたらと高さのある白い帽子——なんでこんなに高いんだろう——をかぶったおじさんが口を開いた。

Episode : 80

「やっとお客さんか！ ほら、食べていきなさい」

「——え？」

何か予想と違う方向へ話が転がる。

「あの、あたし、そういうわけじゃ……」

「何言つてんだ、食べ盛りじゃないか」

話を聞いてないし。

「何がいいかな、アンタたしか、さっぱりしたものが好きだったね」

「え、ご存知……なんですか？」

あたしなんて、たくさん居る生徒の中の一人だ。だからそんな細かいところまで見てるなんて、まったく思わなかった。

けど厨房のおじさんは当たり前、という顔でお皿に料理を盛り始める。

「毎日生徒の顔見てるんだ、そのくらい調理人として覚えて当然だよ。特にアンタは可愛くて目立つしね」

「そう、なんですか……」

あたしが目立つっていうのは分かるけど、可愛いと目立つっていうのがよく分らない。

悩んでいたら、目の前にお皿が出された。

「ほら、食べなさい。お腹すいただろう？」

「あの、たしかにそうなんですけど、それだけじゃなくて……」
慌てて言うと、厨房のおじさんが不思議そうな顔になる。

「この料理だけじゃダメなのかい？」

「えっと、そういうのでもなくて」

どうしてあたし、いつも上手く説明できないんだろう？

でもここには助けしてくれる人が居なそうだから、必死に自分で説明してみる。

「その、隣の診療所に、先生と後輩が居て。食べるものがないんです」

「なるほど、隣に夕食か！ それは気づかなかった、すぐ持っていこう」

「え、あ、待つてください」

このおじさん、悪い人じゃないけど、料理以外は何も考えてない感じた。

「なんだい、夕食がないって今アンタが言ったじゃないか」

「いえ、そうなんですけど、外、今危なくて……」

あたしの下手な説明に、おじさんはじめ厨房の人たちが首をかしげた。

「なんで外が危ないんだい？」

「その、学院内で今、分派騒動になってるみたいで……」
あたしが聞いた話を、大雑把に伝えていく。

「なんだい、じゃあ生徒が来ないのは、教官たちが閉じ込めちまつたから、ってことかい？」

「確認はしてませんけど、たぶんそうだと思います」

講堂に生徒のほとんどが監禁状態なのは確かだ。そしてその状態で食堂へ夕食を食べになんて、許可されるわけがない。

「許せんな、私らが精魂こめて作った食事を食べに来させないとは」
「ホントだわ。だいいち子供なんて食べてなんぼなんだから、食べなきゃ持たないのに」

「よし、これから持って押しかけよう」

「だ、だから待ってください！」
また慌てて止める。

「教官たち、武装してます。だから万が一って事も……あとその、隣に食事を。そっちは安全なので、先にお願ひします」

みんなにご飯をつていうおじさんたちの気持ちは分かるけど、危険なところへ真っ先に行くなんて論外だ。

「隣の診療所に届けるのは分かったが、講堂はどうするんだい？」
食事を持ち帰り用の箱につめながら、おじさんが言う。

「何人が講堂に行かずに済んでるので、そのみんなで協力してやってみます」

本当は協力できる保証がないけど、そうでも言わないとおじさんたち、講堂へ突撃してしまいそうだった。

「そうかい、分かった。じゃあまずこれを隣に——」

おじさんの言葉の途中で、裏手のドアが開いた。みんなの視線が一斉に注がれる。

「——イマド?!」

ダーティーブロンドの見慣れた姿が、扉の隙間から滑り込んできた。

「どうしたの？」

「……腹減った」

情けない声でイマドはそう言うと、その場へへたり込む。

「すみません、メシ……」

「よし来た！ いっぱいあるぞ、食べ食べ」

おじさんが嬉しそうに料理をお皿に盛って、彼に手渡した。

「ありがとうございます！」

喉に詰まるんじゃないかって勢いでイマドが食べ始める。

「どこに……居たの？」

「島ン中あっちこっち。つかお前こそどこに居た？」

「なんか、地下牢に入れられちゃって」

それから太刀を誰かが届けてくれたこと、牢を壊したこと、教官たちを何人が倒したこと、隣の診療所は安全なことを話した。

「太刀届けたのは、アーマルとヴィオレイだな。ナティエスがお前の部屋から持ち出したの、あいつらが受け取ってたから」
「そうなんだ……」

あとでちゃんとお礼しないといけない。

それにしてもさすがAクラスだ。教官たちが言ってた通り、けっこう逃げてる。

Episode : 82

「Aクラスで逃げたの、誰と誰？」
気になってイマドに訊いてみる。

「んー、まず俺だろ、アーマルだろ、ヴィオレイだろ、それにシーモアとナティエス。あとお前が牢壊して出てきちゃったから、プラス1。ミルとか他は分かんねー」

「あ、ミル、後から掴まったみたい」
あたしの言葉にイマドが食べる手を一瞬休めて、なんとも言えない表情をした。

「——教官に同情しとくか。つかミル捕まえるとかバカだろ。疫病神飼うようなもんじゃねーか」
「あたしもそう思う……」

彼女を中に入れるくらいだったら、外で好きにさせておいたほうが絶対にいい。もちろんそれでもかなり不安だけど、中に入れてしまうよりは間違いなくマシだ。

敵に回しても違う意味でイヤだけど、味方にいても妙に困る、それがミルだった。

「ったく、ホント教官たちアタマ大丈夫か？ お前捕まえて牢屋つてのもアホすぎだし。どうせ壊されるつてのに」

「自信あったみたい。魔法が弱められる結界があるって」
「その程度でかよ……」

イマドが食べる手を止めてため息をつく。

「お前の魔法の威力、その辺の連中の倍以上じゃねーか。それで最

上級やられたら意味ねーだろ」

「……あのね、面倒だから……精霊、呼んじやつた」
「そこまでやったのか」

イマドが苦笑しながら、お皿をおじさんに差し出した。

「すみません、おかわりもらえませんか？」

「おう、腹いっぱい食え」

即座にお皿に食事が盛られる。

「ありがとうございます。——にしても、何がどーなってるんだ？
とつさに教官ども引つ掻き回しに走っちまったから、よく分かんねえんだよな。なんか副学園長が好き勝手始めたつてのは、読み取ったけど」

「あたしもそれ以上は……つてイマド、追いかけてきてた教官たちは？！」

確か奪った教官たちの通話石内でも、イマドは重点的にマークされてたはずだ。なのにこんなところで食べてたら、きっと追い詰められて掴まる。

「一応捲いてきた。もう行くけどな」

「あたし行ってくる！ イマドはもう少し食べてて！」

あたしは食堂を飛び出した。

教官たちの通話石を起動させると、念話に変換された会話が聞こえてくる。

『イマド』ザニエス、まだ発見できません』

『施設を全部探してみる。案外食堂辺りにいるかもしれん』

『了解』

このままじゃ、見つかるのは時間の問題だ。

Episode : 83

走りながら考える。

教官を足止めしなきゃいけないけど、いつものあたしのやり方じゃダメだろう。カンの鋭い教官に、イマドじゃないとバレてしまう。

魔法と直接攻撃主体のあたしと違って、イマドのやり口はごく単純な罠を組み合わせるの攪乱だ。

ただ、イマドは相手の考えを読んだ上で逆手に取ってくる。そこが真似をするには難しいところだった。

教官たちの考えは、幸い通話石のおかげである程度分かる。だからそこから考えて、彼のやり方に似せるしかない。

今の状況だと、イマドなら食堂とは全く違う場所に居るように見せかけて、教官たちを引っ張りまわすだろう。だからそれに近い事をすればいい。

あたしは大急ぎで教室へ向かった。ほんとうは男子寮のイマドの部屋がいいんだろうけど、ここからじゃちょっと遠い。

校舎の廊下は真っ暗なうえ、誰も居なかった。ほぼ全員講堂へ集めてしまったから、見回りしかしてないらしい。

四階にあるいつもの教室へ駆け込んで、あたしは魔法を放った。

「トオーノ・センチツァー！」

雷の魔法で一瞬だけ辺りが明るくなる。ほぼ同時に通話石のほうで報告が上がった。

『教室が一瞬明るくなりました。イマド＝ザニエスの挑発行為かと』
『B班向かいます』

あたしは急いで教室を出て、幾つか離れた別のところへ入りなおした。そこで窓を開けて下を確かめる。

——誰も居ない。

これなら大丈夫だ。

軽量化の魔法を唱えて一気に飛び降りる。そしてすぐに校舎を離れた。

逃げながら校舎の方を見ると、いつの間にか教室の明かりがついてる。きつとイマドを探してるんだろ。

通話石からまた会話が聞こえてきた。

『B班到着、教室は空です』

『隠れてるかもしれん、周囲も探せ』

『了解』

これなら少しは時間が稼げそうだ。

本当はみんなと合流したりしたいけど、教官たちを放っておいたら戦力差でジリ貧になる。なるべく引っ張りまわして、出来れば1人ずつでも無力化したほうがいい。

——なんでこんなことになっちゃってるんだろ？

ふとそう思った。本当だったらもうとっくに食事を終えて、みんなでお喋りしてる頃なのに……。

長い夜になりそうだった。

Episode : 84

Armal

俺たちは磁石を頼りに、海岸を南へ進んだ。

地図がないからはずきり分かんないけど、上陸したところからは南向けてへずつと砂浜が続いてる。だからヴィオレイと相談して、行けるとこまで砂浜行ってみようって話になった。

で、月明かりの下を延々と歩いてる。

「本陣、どこかな？」

「知るかよ」

考えてみるとかなり無謀だ。

先輩の話じゃ、棧橋からならちゃんと立て札と道らしきものがあるっていう。けど関係ない砂浜に着いちゃったから、位置なんて見当もつかなかった。

分かっているのは、島の東西に高台があって、そこが本陣になっているってことくらいだ。

「高台ってあれかな」

「だと思っけど……」

暗いからはつきり見えないけど、砂浜の先が高くなってる。他にはそれっぽいところが見当たらないから、たぶんそうだろう。

周囲が切り立った崖でその上に校舎だのがある本島とちがって、ここは砂浜がなだらかに高くなって、自然に草なんかが生えてる地面に変わる。本島と違って狭いからか、生えてる木はまばらでちよつと小ぶりだ。ただそれでも、俺たちの背丈の倍はある。

どっちにしても、長く続く砂浜のほうが絶対に歩きやすい。だから俺ら、てくてく砂浜を行くしかなかった。けどそのうち、おかしなことに気づく。

「おい、なんか向こう、明かり見えないか？」

「うん、僕もそれ言おうと思った」

砂浜のまだかなり先だけど、小さな明かりが右往左往してた。

「先輩たちかな？」

「教官かもな」

「あ、それやだ。端っこよらない？」
「だな」

砂浜の真ん中は歩くのやめて、草と木の茂ってる傍に移動する。ここならよっぽど近づかれない限り、見つかったりしないだろう。木の陰に紛れるみたいにして、少しずつ近づいてく。

「教官たちだね。何してるのかな？」

「船に乗り込んでみたいだな——え？」

自分で言っというて不思議に思った。

今日の演習は泊りがけで、夜通し続くいちばん大規模なやつだ。だから先輩たちは帰ってこない。なのに教官たちが暗くなってから船に乗り込んでるって、なんかおかしい。

Episode : 85

ひとつひとつありそうなことを考えて、俺はすぐやなことを思いついた。

「もしかしてあの教官たち、反乱に加わるんじゃないか？」

「え、それヤバイよ。ただでさえ講堂とかあんな状態なのに、こっちの教官まで帰ってきたら、僕たち勝ち目ないじゃん」

「ああ……」

何しろ「教官」だ。上級隊の先輩たちを教える側だ。そんなの相手に、俺たち下級生が何か出来るわけ無い。しかも先輩たちがこっちへ引き離されてるから、俺らやられ放題だ。

「先輩たちに、何とか知らせなくちゃ」

「だな。でも教官たちに見つからないようにしないと」

様子を見ながら近づいて、見つかる前に木々の間に隠れる。

話し声が聞こえてきた。

「イマドⅡザニエスが逃げ回ってるらしいな」

「ルーフェイアⅡグレイスも脱獄したらしい」

「それはやっかいだな……あの2人が組んだら、さすがに手ごわいぞ」

内心ガッツポーズする。イマドが逃げ回っててルーフェイアが逃げ出したなら、かなり教官たちはてこずるはずだ。

けど、それも「今のままなら」っていう条件付きだ。もしこの教官たちがみんなで一斉に帰ったら、ルーフェイアだってまた掴まるかもしれない。

「ヴィオレイ、行こう。少しでも早く先輩たちに知らせないと」
「うん」

本当は今、俺たちが船を爆破でも出来ればいいんだけど、そういう技術はまだ教わってなかった。それに何人も教官が居る中を突破して船をどうにかするなんて、たった2人じゃ無理だ。

だから、急ぐ。先輩たちが事情を知って教官たちを足止めしてくれば、向こうはそれだけ楽になるはずだ。

細い道を見失わないように気をつけながら、俺たちは木々の間を進んだ。道が合ってるかどうかは自信が無いけど、向こうから教官が来る方向を選びながら歩いてく。

平坦だった道が、少しずつ上り坂になってきた。

「もしかして、そろそろ本陣かな？」

「だといんだけどな……」

そう期待しながらも、何だか心配だ。着いたと思ったら道を間違ってたとか、笑うに笑えない。

けど、今回は当たりだったらしい。坂を上りきった辺りで行く先に明かりが見えた。

「よかった、先輩たちだ！」

ヴィオレイが駆け出す。

「おい、待てよ」

慌てて俺は後を追いかけた。

「おい、せんぱーい！」

走っていくヴィオレイの前に、人影が立ちはだかる。そして次の瞬間、ヴィオレイは投げ飛ばされて地面に叩きつけられてた。

Episode : 86

とつさに手近な草むらに身を隠す。

「低学年か。どこから入り込んだ」

そつと見ると、教官だった。服装が違うからすぐ分かる。

「言え！」

「デルピスに連れてきてもらいました」

「はあ？」

暗いし遠いから表情は見えないけど、教官が呆れたような声を出した。というかたぶん、心底呆れてると思う。

「何がデルピスだ、赤ん坊の与太話じゃあるまいし。本当のことを言え」

「ホントですよ、デルピスです」

ヴィオレイ、どうも開き直ったらしい。

「教官なのに、生徒の言うこと信じないんですか？ ひつでー！」

「信じて欲しければ、もう少しまともな嘘をつけ！」

「だから嘘じゃないですってば！」

大声でヴィオレイが騒ぐ。

「ホントにホントなんですよ。デルピスがこうざっぱーんって飛んで、僕たち引っ張ってきてくれたんですってばー！」

普段の言動からじゃ想像つかないけど、開き直ったヴィオレイはかなり厄介だ。ミル並みに扱いづらくなる。

「あー、教官、信じてませんね？！生徒がホントのこと一生懸命訴えてるのに、それ信じてくれないなんて！ ひどいつ、ひどすぎ

るっ！ これじゃ何言ったってダメじゃないかーっ！」

「こ、こら、少し静かに……」

慌てた教官が止めたけど、ちよつと遅かったらしい。

「何ですか、やけに騒がしいですが」

聞こえた別の声に、思わず自分がにやけるのが分かった。この声、カーコフ先生だ。あの先生はいつだって俺らの味方だ。

ヴィオレイが声を張り上げた。

「先生、副学院長が反乱起こして、低学年人質にしていますー！」

「黙れっ！」

怒った教官がヴィオレイを殴り飛ばした。

そしてほぼ同時にこの教官も投げ飛ばされる。

「そういう理由で殴るのは感心しませんなあ」

教官を投げ飛ばしたカーコフ先生が、すつとぼけた口調で言った。

「自分がやられればほら、アンタも嫌でしょう？」

「この裏切り者が……」

「裏切り者？ 何ですかそれは。そもそも裏切るものがありませんなあ——ほらヴィオレイ、行きなさい。どこだか知らないが、何かすることがあつてここへ来たんだろっ？」

「は、はい！」

ヴィオレイが立ち上がった。

今のカーコフ先生の台詞からしても、反乱起こした教官以外は何が起こってるか知らない。だからまず、知らせないとだ。

教官が起き上がりながら通話石に何か言った。仲間を集めてるんだろっ。

Episode : 87

「さ、早くしなさい」

カーコフ先生が油断なく構えながら言う。

こっちへ視線を走らせたヴィオレイと一瞬目が合って、俺は頷いた。

2人同時に走り出す。

「ま、待てっ！」

ヴィオレイに追いつがろうとした教官の近くへ飛び出す。

「なんだっ?!」

予想してなかったんだろう、教官の動きが一瞬止まった。そこへカーコフ先生の蹴りが決まる。

「センス、ナイス！」

「予定と違うんだがねえ」

またすつとぼけた口調で先生が言った。

「私の予定じゃ、私がここで存分に大立ち回りして、その間に君たちがどつかへ行くはずだったんだが。これじゃつまらんなあ」

さりげに先生、怖いこと言ってるし。

「で、ヴィオレイにアーマル、さっき言ったことは本当なのかな？」

「ホントです、じゃなきゃ俺たち、わざわざ演習島まで来ません」

「だろうな。——やれやれ」

どういうわけか先生がため息ついた。

もしかして俺たち、減点とかされるんだろか？ それだと俺は成績悪いから、メツチャクチャにヤバイ。

けど先生の言葉は俺の予想とはぜんぜん違った。

「副学院長がもしかしたら、とは思っていたが、本当にやるとはねえ」

「先生、知ってたんですか？」

驚いて訊くと、先生は頷いた。

「知ってたというか、一応予測の中にあつた程度だがね。でもまさか、やるとは思わなかったねえ」

「すこ……」

そついつのを把握してる辺り、さすがカーコフ先生だ。

けど先生自身はそう思つてないらしい。

「すこかったら、今回のことも未然に止めてるだろうねえ。だからすこくないな。——で、出来たらいろいろ聞かせて欲しいんだが」

「はい」

俺たちは話し出した。

ルーフェイアが居なくなつたこと、みんなで探してて講堂に入れられずに済んだこと、イマドが教官たちを引っ張りまわしてること、ルーフェイアは噂の地下牢に閉じ込められてたこと、そして俺たちは船着場のおじさんに教えられて、隠してあつた船でここへ来たこと……。

先生が腕組みして考え込む。

Episode : 88

「だいぶ厄介な事態になってるねえ」

「はい……」

「だいいちそうじゃなかったら、俺たちこんなところまで漕ぎ渡って来てない。」

「ともかく手を打たないとだな。まずは演習を中止して生徒を帰すか。他の教官たちに気づかれると面倒だが……」

「あ、先生、それなんですけど」

砂浜でのことを思い出して言う。

「教官たち、なんか船着場で船に集まってました」

「……それは困ったな」

あんまり困ってなさそうな口調で先生が言う。

「先生、急がないとヤバくないですか？ あの教官たちが反乱に加わったら、低学年とかタダじゃ済まないです」

「だろうねえ。まあその代わり、上級生への連絡は楽だろうが。ともかく本陣へ行こう」

言って先生が歩き出した。

俺らもついてく。

「あ、先生、いいところに」

女の先輩がひとり、こっちへ走ってきた。

「病人が出たんですけど、なんか他の教官が見つからなくて」

「だろうねえ。みんな本島へ帰ってしまったらしいから」

「え？」

先生の言葉に、先輩が怪訝そうな顔をした。

「今、演習中ですが」

「私もそう思ってるよ。だが他の教官には違ったらしい」

そこで先生が急に姿勢を正して、命令口調になった。

「演習島で訓練中の全生徒に口頭で伝達。演習は直ちに中止、点呼後、全員船着場へ集合。また東隊の上級隊は伝達に加わらず、各自速やかに本陣へ集合！」

「了解」

理由なんてまったく訊こうとしないで、先輩が敬礼をして走り去る。

これが傭兵隊なんだ、と思った。四の五の言っていないで命令に従う、そういうところだと思い知る。

「センス、これからどうするんです？」

好奇心いっぱいってふうにヴィオレイが訊いた。

先生がのんびりと答える。

「実際には集まった上級隊の顔ぶれ次第だろうか……とりあえずあの連中の帰島は、可能な限り阻止したいねえ。あと万が一教官たちが帰島していた場合に備えて、船の確保だな」

「あ、船ならあります」

俺は答えた。

Episode : 89

「あるのか？ …… ああ、君たちが来た船か。どこにあるんだい？」

「えーっと……」

どう説明しようか考える。

「ああ、場所が分からないのか。ほら、この地図を使いなさい。今居る場所はここ、君たちが教官を見たっていう船着場がここだ」

先生がひとつひとつ、指を指して教えてくれた。

「で、どこから来たんだい？」

「えっと、この船着場まで続く砂浜を、ずーっと北から……」

「ほう、ずいぶん歩いたねえ。大したもんだ」

先生が感心する。

「で、その船は隠してきたかい？」

「え？ あ、そのまま……」

そういえば砂浜に乗り上げて、何もしないで放置だ。これじゃ教官たちに見つかったかもしれない。

でも先生は怒らなかった。

「今度からきちんと偽装しなさい。でないと、イザと言ったときに使えないからね」

「はい」

俺も、今度からは言われなくてもやれると思う。

「で、どのくらいの大きさかな？」

「ええと、手漕ぎで、何人か乗れるくらいかな……」

先生が少しだけがっかりした顔になった。きつと、もっと大きい

船だと思っただろう。けどすぐ表情を元に戻して言う。

「手漕ぎというところが気になるが、少なくとも上級隊を何人かは返せるな。そうすれば、向こうから迎える船が出せるか」

先生、もう先の先まで考えてるみたいだ。

そこへ上級隊の先輩たちが戻ってきた。

「集合しました」

「ご苦労」

ずらりと並ぶ先輩たちは、素直にカッコいい。

「先生、状況が変わったようですが」

「実はそうなんだ。どうも本島で、低学年が人質にされているらしい」

ざわつと先輩たちの間に動揺が走った。

中心らしい先輩——隣はルーフェアとよく居るシルファ先輩だけど、こっちは誰だろう——が訊く。

「詳しい説明を頂きたいのですが」

先生がもったいぶって頷いた。

「副学院長が、学院長に対して反旗を翻してね。それで低学年が講堂に集められて、人質になってるそうだ」

質問した先輩が絶句した。他の先輩たちもみんな息を呑んでる。

Episode : 90

「こ、子供たちの状況は……」

「講堂に集められてるといふ以外、情報は無い。また学院長の安否は不明だ」

波の音だけが響いた。

「あの、それって……」

先輩のひきつった声を、先生が遮った。

「まだ何も分からのんでね、何とも言えないよ」

「そ、そうですね」

さすがに上級隊の先輩たちも、こんな事態は考えたこともなかったみたいだ。かなり動揺してる。

先生だけが、落ち着き払った声で命令した。

「これより、上級生は全員本島に帰還する。またそれに先立って、上級隊は船着場にて船を確保する。戦闘になる可能性もあるので、警戒を怠るな」

「はいっ！」

先輩達の声が揃う。

先生が続けた。

「本来ならきちんと作戦を立てるところだが、その時間はない。各分隊毎に行動し、臨機応変に対処するように。なお交戦となった場合、手加減は無用だ。それから第1班は別行動とする」

「了解」

先輩たちが動き出す。

「先生、俺たちは？」

「他の上級生と一緒に、船で帰りなさい。さすがに実戦は危なすぎる」

「はい……」

先生の言ってることは正しいけど、なんだか物足りない。せつかくここまで頑張ってきたのに、最後はまるで留守番だ。

けどそんな俺たちを見て、先生は笑い出した。

「いやいや、おもしろいな。うん、可愛い可愛い」

「何がですか……」

女子なら喜ぶんだろうけど、男子の俺が男の先生に可愛いとか言われたって、ちっとも面白くない。

なのに先生、俺の答えまでもが面白かったらしくて、余計に笑ってる。

「先生！」

「ああいやいや、うん、悪かった。君たちには実は仕事があるよ」
思いもかけないことを先生が口にした。

「ホントですか?!」

「ああ。こんなところでウソを言っても始まらないしね。君たちには、乗ってきた船までの案内を頼みたいんだ——第1班！」

先生が残ってた上級隊を呼ぶ。

Episode : 91

たぶん最上級生の先輩たちが、俺の前に並んだ。

1人はイマドと昔同室だった、セヴェリーグ先輩だ。他は顔は見ただことあるけど、名前までは分からない。

「君たちはこの子たちが来た船のある場所まで行って、可能な限り早く本島へ帰島して欲しい。栈橋の船を確保できるとは限らないからね」

「了解です。本島へ帰島できた後は、どのように？」

「船着場で船を確保、演習島からの移送を行って欲しい。上級隊が演習島で船を確保してもしなくても、足は必要だろうしね」

「分かりました。——君たち、案内してくれ」

意外なくらいあっさり、先輩たちが命令に従った。俺はもっと細かく訊くと思ってたから、ちよつとびっくりだ。

「ん？ 方角が分からなくなったかい？」

驚いてぼけつとしてたら、先輩に1年生みたいな扱いされた。

「いえ、分かります。船着場から砂浜を、ずっと北へ行ったところですよ」

「なるほど、あの辺りか」

先輩たちは土地勘があるから、これだけで大雑把な場所が分かっただけだ。

けどそこで、思いもかけない言葉が出る。

「先生、船の場所がだいたい分かりましたので、この子たちは置いていっていいでしょうか」

「え……」

さっきの今でこれなんてヒドい。俺たち、船までの案内頼まれたはずだ。

「先輩、でも」

セヴェリーグ先輩が眉根を寄せて答えた。

「分かってる。ただ君たちを本島までは連れて行けない。そうなる
と砂浜に残していくことになる。そのとき、無事に本陣まで戻れる
って言い切れるかい？」

「それは……」

たぶん大丈夫だろうと思う。ここは定期的に魔獣が駆除されてる
し、さっきだつて歩いてきた。でも「絶対大丈夫か」って言われた
ら、分からない。

先輩が正しいって頭じゃ分かる。だけど納得行かなかった。

「先生！」

振り返って抗議すると、先生が肩をすくめた。

「すまんね、最初から行かせないなんて言ったら、船の場所を教え
ないと思ったんだ」

「そんな……」

これじゃ騙されたも同然だ。

先輩たちがすまなそうな顔で俺らに敬礼してから、砂浜のほうへ
歩きだした。

先生が言う。

「悪かった。けど実戦に君たちは巻き込めないしね。その代わり、
船の確保作戦を見に行こう。一緒に遠くから見ただけなら大丈夫だ

ろっから」

「……はい」

まだ納得行かないけど、ここでただ待たされるよりはマシそっだ。

お知らせ

自サイトにて、期間限定でSFを公開中です。よかつたら下のリンクからどうぞ

またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。
こちらはなろう内に掲載です。よろしく願いします

あとがき

新しい話を読んでくださって、ありがとうございます♪
前作とは一転、みんな揃っての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合い下さい。
い。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

Episode : 92

「さ、行こう」

先生に促されて後ろをついていく。

俺たちはずいぶん警戒しながら来たのに、先生はどっかへ散歩行くみたいな感じた。そんなだけ慣れてるんだなと思った。

と、先生が立ち止まる。

どうしたのか訊こうと思ったけど、そんな雰囲気じゃない。だから俺もヴィオレイも黙って先生の後ろに立ってた。

そうやってワケもわかんないまま時間が過ぎた後。いきなり前のほうでうめき声上がる。

「残ってた教官が居たみたいだね」

「残ってた……」

しばらく頭の中で考えてて、言葉の意味を知る。ようするに教官相手の実戦だ。

「まあ不意打ちだからね、こちらに被害はないよ。あの教官も気絶してるだけだろうしね」

そこまで言って先生がため息をついた。

「それにしても、昨今の教官たちはどうにもねえ……副学院長が人事権を使って勝手に入れ替え始めてから、本当にレベルの低下が激しい」

「え、そうだったんですか？」

初耳だ。というか俺なんて、全く気づかなかった。

まあたしかにここ2年くらい人気のあった教官が居なくなって、嫌な感じの教官が増えてはいたけど……。

「正直、わざとそういう者だけ採用しているのかと思ったほどだよ。いや、本当にわざとやっていたのかもしれないが。それにしてもだ、武器の扱いひとつ取っても、まず私が教えなければならぬような者ばかり——」

先生の話は終わりそうになかった。かなりストレス溜まってたらしい。

「だいたい、通り一遍の訓練を受けてちょっと実戦を経験した程度で、シエラで教えられるわけがないだろうに。いやそれでも下級生なら可能だろうが、上級生、わけでも上級隊に何か教えるなどだ、いムリだ。おかげで私のスケジュールときたら、朝から晩までびっちりときた。何もかもあいつらの尻拭いだ」

「せ、先生……」

カーコフ先生、こんな性格だったなんて知らなかった。

先生の話はまだ続いている。

「何よりも腹立たしいのは、こうやって私が尻拭いをしているというのに、それを連中が何とも思わないことだ。いや、別に私を持ち上げると言っわけじゃない。せめて悔しいと思って学ばいいものを、何もしないで済むのは楽でいいと思っている。向上心のカケラもない。子供たちのほうがよほどマシだ。なのに教える側だとふんぞり返っているのだから、救いようがない」

当分、続きそうだ。

「だいたい、教官ともあろうものが幾ら不意打ちとは言え、生徒に倒されてどうする。これで教えようというのだから、笑っしかない」

「あ、あの……」

「しかもだな、あいつらときたら——ああすまん、何の話だったか

な？」

やっと先生が正気に戻った。

Episode : 93

「悪かった悪かった、つい愚痴ってしまったね」

「あ、だいじょうぶです。けど今の話、ほんとですか？」

俺の言葉に、先生がちょっと首をかしげる。

「今の話とはどれかな？」

「その、だから教官たちのことです」

教官がそんなにひどい状態で、なのに何にも知らずにそれに教わってただなんて、ちょっとショックだ。

だからちゃんと聞きたかった。

「教官たち？」

「あの、だから教官たちが武器の扱いもまともに出来ないって……」

「ああ、そのことか」

先生がひとつ頷いて、また話し出した。

「実に情けない話だが、本当に出来てなくてね。いや、確かに扱うだけならあれでも何とかなるだろう。だが実戦というのは何が起るかわからない。だから通り一遍で済むわけがないんだ。ありとあらゆる状況を想定し、それに応じた扱いを覚え、果ては武器を失って敵から奪ったものを使うことまで考えてだな——」

質問したことをちょっと後悔する。

「だいいちシエラの本校というのは、その辺のM e Sとは違うだろう？　ならば教官もそれなりの矜持を持って当たらねばならんわけで、だからその人選にも細心の注意を持って当たらないといかんわけだが、その点がどうにも——」

いつまで続くんだろう？

「センス、それは分かりましたー。他の質問いいですか？」

たまりかねたらしく、ヴィオレイが口を挟んだ。

先生も「質問」って言葉は無視できなかったらしい。話を中断されたのに、嫌そうな顔もしないで答える。

「何だね？ 言ってみなさい」

「えーとですね、教官がダメダメなのはわかりました。でもダメダメだって分かって、どうして止めさせなかったんですか？」

ヴィオレイの質問、思ってたより鋭い。

「いい質問だ」

先生も褒めた。

「その点については、いろいろ理由があつてね。まあいちばん大きいのは、人事権を握られていたことなんだが」

「でも学院長のほうが偉いじゃないですか。ダメって言えばいいんじゃないです？」

ヴィオレイがなおも突っ込む。

先生が嬉しそうに頷きながら答えた。

「いいところを突いてるよ。ただ、なかなか君の言う通りには行かなくてね」

そこで一旦言葉を切つて、先生は腕組みした。

Episode : 94

「いい質問だ」

先生も褒めた。

「その点については、いろいろ理由があつてね。まあいちばん大きいのは、人事権を握られていたことなんだが」

「でも学院長のほうが偉いじゃないですか。ダメって言えばいいんじゃないです？」

ヴィオレイがなおも突っ込む。

先生が嬉しそうに頷きながら答えた。

「いいところを突いてるよ。ただ、なかなか君の言う通りには行かなくてね」

そこで一旦言葉を切って、先生は腕組みした。

「気に入らないからと言ってポンポンシステムを変えたら、信頼が無くなってしまうだろう？ だからシステムを変えずに、人を変えなくちゃいけない。けれど一度任命した人を急に変えるのは大変でねえ」

「じゃあ、そんな人、副学院長にしたのがまずかった？」

身も蓋も無いヴィオレイの言葉に、先生が笑い出す。

「なかなかハッキリ言うね、君は。だがうん、その通りだ。ただどちらかと言うと今回は、騙されたケースだな。副学院長に任命した当時は良かったんだが、そのあと欲に目がくらんだのか、豹変したんだ」

「あー、お決まりの……」

ヴィオレイの納得したような声。

俺もやっと思問が解けた。あの学院長がなんで反乱なんか起こされたんだろうと思つてたけど、そういうことなら分かる。信賴してた人に裏切られた学院長はショックかも知れど、たしかによくある話だ。

でもそこまで考えて、俺は引つかかった。先生さつき、「予想はしてたけど」って言つてなかっただろうか？
氣になつて訊いてみる。

「先生、だとすると『予想してた』って言つのはなんなんですか？」

「お、君もなかなか目の付け所がいいな」
褒められた。

先生がうんうん頷きながら説明しだす。

「予想してたというか、副学院長が自分の派閥を増やしていたのはたしかだからね。だとすると、そのうち主導権を取りにくるだろうとは踏んでいたんだ」

「なるほど……」

そついう予想なら分かる。けどそうになると、こんな騒ぎを許してるのが分からなかった。

「その……でも人質とか、まずくないですか？ 予想してたんなら、なんでそんなこと……」

上手く言えない。

でも先生は、俺の言いたいことを察してくれたみたいだ。

Episode: 95

「つまりあれかな、予想してたならなんで低学年があんなことにな
ってるのか、でいいのかな？」

「あ、はい、そうです」

予想してたんなら、防げたはずだ。そうすればあの子たち、あんな目に遭わないで済んでる。

何でそんなことになったのか、それが知りたかった。

「どうすればとか分かんないですけど、でも、もうちょっと何か他の方法が……」

「たしかに君の言うとおりだ。ただ学院長は、『様子を見る』と仰られてね。間違いに気づく機会は必要だろうと」

「それはそうですけど」

学院長の言ってることは正しいと思う。大失敗した生徒もいつも学院長が許してくれて、この学院追い出されないで済んでるし。

けど心が広いのも、こーゆー事態になるとちよつと問題だ。

「君の言いたいことは分かるよ。だが学院長だからねえ」

「ですよねえ……」

逆にだからこそ学院長、つても言えるわけで。

「まあそういうわけで、副学院長の行動が予想を上回った、というところかな」

「……上回らないで欲しかったです」

正直に感想を言っと、先生が吹き出した。

「いいねえ、そのストレートな物言いは。若さだなあ」

先生がひとしきり笑ったところで、少し遠くで爆発音がした。海のほうだ。

ついさっきの笑顔から一転、先生が少し難しい顔になる。

「どうやら作戦は失敗らしいな」

「失敗？」

少し考えて、俺はやっと意味を理解した。

「それって、船の確保が出来なかった、ってことですか？」

「そうなるね。どうやら爆破されたようだ。行ってみよう」

歩き出した先生の後を、俺もヴィオレイも慌ててついてく。

棧橋の周りは騒然としてて、船の後のほうから煙があがってた。

「状況は」

先生の声に、近くに居た上級隊の先輩が答える。

「交戦と今の爆発で怪我人が数名。ただ幸い防御魔法を展開していたため、1人が頭を打った以外は軽症です。また教官たちは見張りと思われる数名を残して、ここには居ませんでした。1隻を残して船が無くなっていたので、既に帰島したと思われます」

「やっばり残った見張り用連中用の船だったか。しかし学院の備品を爆破とは……関わった全員の給料から弁償だな。船は高いんだ」

先生の妙に現実的な台詞に、先輩たちの表情がちよつと緩んだ。

Episode : 96

「それで船だが、直せそうかい？」

「すぐには無理だと思えます。浸水してて、沈没を避けるために砂浜へ引き上げているくらいですから」

「おやおや、それだと修理屋にここまで来てもらわないとだな。依頼料を弁償代に上乘せだ」

単に場を和ませようとしてるのか、それとも本気なのか分からないけれど、ホントこの先生は面白い。

「先生、どうしますか？」

心配そうな顔で先輩が訊いた。

「このままでは、本島へはとて……」

「ああ、心配には及ばないよ。じき向こうから、迎えが来るだろうからね」

言いながら先生が通話石を出す。

「やれやれ、こんなこともあるつかと持ってきたが、本当に使うハメになるとはなあ」

「それ、何かふつうと違うんですか？」

ヴィオレイが訊いた。

通話石は使い勝手がどんどん改良されて、毎年のように新しいタイプが出てる。けど先生が持つてるのは、手のひらサイズの操作盤に通話石と記憶石をはめただけの、ごくふつうのタイプだ。

「ふむ。どこか違うように見えるかい？」

「見えないです」

ヴィオレイの実も蓋もない答えに、また先生が笑い出す。

「本当に君は面白い子だなあ。うん、その通り。別にどこも違わない」

ふつうだつてこと得意気に先生言ってるけど、大丈夫だろうか？
なんかこう微妙にズレてて、ちよつと心配になる。
けど、ヴィオレイはそんなこと気にしなかったらしい。

「じゃあ、何が『念のため』なんです？」

「教官たちには知られずに、学院長やムアカ先生と連絡を取るためのものさ」

俺たちはもちろん、報告してた先輩たちも表情が変わった。

「じゃ、じゃあ、それがあれば……」

「そういうこと。まあ今すぐには行かないかもしれないが、学院長もムアカ先生もさすがに気づいてるはずだ。西に陣取った子たちが帰ってくるまでには、連絡くらいつくだろう」

最後に「楽観的な見方だが」と先生は付け加えたけど、俺たちは気にならなかった。今までどうにもならなそうだった流れが、一気に変わった気がする。

「さてさて、連絡を取ってみるか」

先生がいたずらっぽくウインクして、通話石を操作した。

「誰か——おお、ムアカ先生ご無事でしたか。ええ、こちらも何とか。はい、下級生の件は訊いてますよ。勇敢な子が2人、海を渡って知らせにきてくれましたから」

繋がった。これならイケる。

俺とヴィオレイは目配せしあつて、ちよつとだけガッツポーズをした。

Episode: 97

Tasha side

ふと目が覚めた。

(……何時ですかね?)

時計を探りながら考える。ただ窓の外を見る限り、いい加減日も暮れた頃のようにだ。

タシユアは普段ならこんな時間に寝たりしない。夜更かしはするが、基本的に昼は起きている。

ただ、夕べは任務でほぼ徹夜だった。そして午前中までかけて事後処理も終わらせ、やっと学院へ戻ってきたのだ。そんな状況で、周囲に合わせて夜まで起きている趣味はなかった。

起き上がる。

(どうしますか……)

起き抜けなのもあって、もう少しだけ待ってから何か食べたい気がした。

なんととはなしに魔視鏡を立ち上げる。

(何か来ていますかね?)

昨今は魔視鏡のネットワーク網の発達が著しく、新しい魔令譜のお知らせなどが、登録をしておけば来るようになっていた。

その中には稀にだが興味深いものが混じっているため、タシユアはチェックを欠かさなかった。

いつもどおりの手順で進めていく。が、今日は同じように行かなかった。どれだけ待っても、学外のネットワークに繋がらない。

何かのエラーかと立ったまま2、3度命令を出しなおしてみたが、結果は同じだった。

（……ふむ）

机の前に座って、本格的に操作を始める。

（こちらの経路は生きていますね）

寮内は問題ないようだ。

そのままひとつひとつ確かめていくと、ネットワークが生きているのは学内だけで、そこから外へが繋がらなかった。

（これはどうにもなりませんか）

学内では問題がないところを見ると、自分の魔視鏡の問題ではないだろう。おそらくは学院と外とを繋ぐ、高位通話石の異常だ。さすがにその修理は、タシユアの手には余った。

魔視鏡は一旦諦めて、少し考える。

高位通話石は今や通信の要だ。何かの連絡をするときに、これを使わないということは殆どない。

逆に言うとそれほど重要なため、複製を作り2つか3つセットで置くのが一般的だった。そうすればイザというとき、他が肩代わりできる。

もちろん学院もこの仕様だ。なのに今は、そのバックアップさえも動いてない。異常事態と考えていいだろう。

（何が起こりましたかねえ）

念のために大剣を手にし、寮の外へ出てみる。

Episode : 98

廊下はやたらと静かだった。

（泊りがけの演習ですしね。当然ですか）

考えながら歩を進める。

通信網の状態から見て、内側から外への連絡を意図的に切っただろうことは分かる。問題は誰が何の意図でやったかだ。

（まあ、職員の誰かでしょうね）

高位通話石を1つだけ遮断するのなら、出来なくもない。だがバックアップの稼働まで意図的に止められるのは、アクセス権限を持つ一部の者だけだ。

それが生徒でないのは、考えるまでもなかった。

だが一方で、最も権限の大きい学院長がしたとは思えない。彼はやや甘いところはあるが性格は温厚で、少々のことでも寛大に許すことが殆どだ。だからこんな嫌がらせまがいのことはしないだろう。そうになると、対象はほぼ絞られてくる。

（――学院長と対立する連中、ですか）

生徒のどこまでが気づいているかは分からないが、職員間には派閥が出来て二分している。正確には「勝手に分派活動をしている」と言ったほうがいいかもしれない。

片方は学院長を中心とするものだ。属しているのは古株の教官が多く、学院長が直接採用した人が殆どらしい。性格もみなやや甘いところはあるものの、いかにも教師らしい子供好きばかりで、学院生にも慕われている。ただかなりの数が分校へ転任したり辞めたり

で、最近はごく一部になっていた。

そしてもうひとつが、副学院長を中心とするものだ。

こちらは新しく赴任した教官が多いのだが、タシユアの目から見
て教師として問題がある者がやたらと多かった。技術的にもごく当
たり前の水準で教える立場としては力不足だし、性格も高圧的で教
師としては問題がある者ばかりだ。

だが古株の教官たちが居なくなつた後を埋めるように次々と採用
されたため、現在ではかなりの数にのぼる。ふだん受ける感触から
すると、職員の半数どころではないだろう。

その副学院長派が、何かとうるさい上級生たちが居ないタイミン
グで何かやらかした。それがいちばんありそうだ。

もつとも副学院長はじめ深く考えないうえそそっかしい者ばかり
なので、単純に誤ってバックアップまでダメにした、という可能性
もゼロではないが……。

そんなことを思いながら踊り場まで来て、タシユアは足を止めた。
自室にいるときからやたらと静かだと思っていたが、上の階から
も人の気配が感じられない。

（この階なら分かりますが……）

ここは個室ばかりで、上級隊ばかりだ。そして今日は泊りがけの
演習があるため、任務でなければそちらへ行っているはずだ。だか
ら無人なのはおかしくない。

タシユアがここに残っていたのも偶然だ。予定ではもう少し任務
に時間がかかるはずだったが、成り行きで徹夜となつたために早く
片付いて、早々に帰って仮眠していた。

Episode : 99

だが他の階も気配がないのは異常だ。

ふつうに考えれば上級生が居ない寮は無法地帯で、低学年がやり放題ではしゃいでいるはずだ。なのに、全くそんな気配はない。

念のために階段を上がってみたが、やはり低学年が騒いでいるはずの階は無人だった。

（自由にさせておいては困る、と）

低学年が居ないとなると、ただ事ではない。これが真っ昼間なら十分在り得るが、外はもう暗くなっている。

この時間帯は当番のある者以外は自室で過ごしたり、食堂へ行つて夕食を取ったり、図書室へ行ったり、各階の共用スペースでお喋りをしたり、果ては廊下を走り回ったりと、それぞれ思い思いに過ごして良かった。それが居ないのだから、教官が命じてどこかへ連れ出したのは間違いない。

（マニュアルでは、この対応がされるのは災害時でしたか）

だが、そういう気配はなかった。そもそもそんな事態なら、とっくに目が覚めている。

（やはり、教官がらみですかね）

高位通話石の遮断の件から考えて、それがいちばん可能性が高そうだ。

とりあえず様子確かめようと寮を出る。

（おや、あそこですか）

暗い寮とは対照的に、寮と校舎との間にある講堂は明かりが灯つ

ていた。周囲を教官が囲んでいるところから見ても、間違いないだろう。

死角へと周り、中の様子を覗う。

（低学年がほぼ全員ですか）

目測で数えた感じ、そうとしか思えない。

（まあ、頭の悪い人間が考えそうなことですが）

最近採用された教官の水準から思うに、安直な考えで騒ぎを起こしたのだろう。特に今夜は上級生が居ないため、やり易いと踏んだに違いない。

（目的は……学院の掌握ですかねえ）

確証があるわけではないが、可能性が高かった。

高位通話石の異常、特にバックアップの停止は、ほぼ間違いなく管理者が引き起こしたものだ。他の人間でも不可能とは言わないが、難易度が高すぎる。

また低学年を集めたのも、間違いなく教官たちだ。彼らが勝手に集まるわけがない。

何か緊急事態が起こってこれから島外へ逃がすというならまだあり得るが、それならわざわざバックアップを潰したりしない。イザと言うときには外への通信が可能かどうかは、死活問題だ。

何をどう見ても、「知られたくないことをしようとしている」としか思えなかった。

やっているのは、副学院長派と見ていい。

学院長やそれに準じる一派は子供好きだ。また公正明大を基本にしていて、何か企むようなことはしない。子供たちの安全を第一に考えつつ、きちんと説明して納得もさせる。そういう者ばかりだ。

それが、こんなマネをするとは思えないし、そのメリットも見当たらない。

Episode : 100

副学院長とその一派が悪巧みを実行に移し、その一環で予想外の騒ぎを起こしがちな低学年を監視下に置いた、というところだろう。
(ヒマですこと)

権威などなんとも思わないタシユアにしてみると、何でもここまで労力を払ってコトを起こすのか理解できない。

そもそも当該するだけの能力がないからこそ、今の立場に甘んじているはずだ。それを自身を変えるのではなく無理やり環境を変えようなど、自身を客観視出来てないが故だろう。

加えて、それに同調する教官が多いのも気に入らない。

(能力が無い人間ほど、欲は人一倍ということですかね)

ただ、何かをしようという気にはならなかった。立場上、教官たちが下級生を傷つけるとは思えない。そんなことをすれば、自分たちが学院を掌握した際にすぐ困る。

この学院は、単独で存在しているわけではない。幾つもの分校を各地に抱えており、微妙な力関係で成り立っていた。

例えば規模で言えば本土の分校のほうが大きいし、やはり本土の金持ち付け箔付け校は政財界の師弟が多いため意向を無視できない。首都の分校もやはり有力者が多いし、他国にあるものは当然違う主張をしてくる。

一方でこの本校は採算は取れているものの、規模では小さい方だ。Mesとしての実力では今なおトップを誇るが、他校もそれぞれ独自性を打ち出して対抗していた。

こういう背景が在るため、本校の発言力は外の者が思うほど強く

ない。しかも他校は隙あらば本校の発言力を削ごうとしているから、おかしい真似は出来なかった。

——なのに、万が一生徒を傷つけでもしたら。

この辺の事情は、教官なら誰もが知っているはずだ。

逆に言うなら、生徒を傷つけるようなことは出来ない。そんなことをして他校から糾弾されたら、副学院長が学院を掌握する意味が無くなる。

（まあ、もう失いつつある気もしますがね）

この騒ぎを外へ知られずにどう学院長の交代をするつもりなのか、見てみたいくらいだ。

（さて、どうしますか）

状況さえ分かっただけじゃ、さして用は無い。通信網が使えないのは少々不満だが、事が済めば回復するだろう。

適当に歩いていく。途中何ヶ所か教官が見張りをしていたが、難なく通り抜けた。

人影のない校舎を抜けると、明かりの漏れる食堂が目に入る。

（……夕食にしますか）

思えば任務から戻ってきたときに、部屋にあったものを少し食べただけだ。後は寝てしまっただけで何も口にしていなかった。

正面の入り口には教官が立っていた。
構わず近づく。

Episode : 101

「何をしに来た」

呼び止める教官に平然とタシユアは答えた。

「夕食を食べに来ただけです。ここは食堂で、食事を摂るための施設だったはずですが？」

言って入ろうとしたタシユアへ、後ろから教官が手を伸ばす。

（まったく）

そう思っている間にも身体は勝手に動いていた。身体を入れ替えながら教官の腕を掴み、相手の勢いを利用しながら捻る。

鈍い音。そして悲鳴。骨が折れたか関節が砕けたのだろう。

「ここがどういう学校か、教官ともあるうものがお忘れのようですね。後からの不意打ちに対処する方法も、散々教えているというのに」

嘯いてからタシユアは食堂へ入った。呻いている教官は放置だ。

そのうち誰かが見つけるだろう。

中は当然ながら人の姿が無かった。奥にここの従業員がいるだけだ。

「おや、食べに来たのかい？」

「ここへ他のことをしに来る人間が、いるとは思えませんかね」

毒舌を吐きながらも軽食を頼み、トレイを持って適当な席へ着く。

（静かでもいいですねえ）

元々タシユアは人ごみも騒音も嫌いだ。だから普段も混んでいない時間に来たりする。だから貸し切り状態というのは、むしろ心地よい。

と、従業員の1人がこちらへ来た。

（食事のジャマはしてほしくないのですがね）

そう思いながらも口にしなかったのは、相手が何か知っていそうだったからだ。

食べながら黙って待つ。ややあつて、相手のほうから言葉をかけてきた。

「あんたは、演習に行かなかったのかい？」

「任務でしたので。別段、珍しいことではないと思いますが」

シエラの本校では常に誰かが任務に出ているといってもいい。そのくらいしないと経営が賄えないのだ。

（ぼつたくり同然ですが）

任務をこなしたからといって、その報酬が直接生徒の手に渡るわけではない。多少の手当ては出るものの他には無く、報酬のほとんどは学院の金庫行きだ。

ただ家賃が無料で三食賄いつき小遣い付き、上級隊になれば給料が出て、任務も手早くこなせば余った時間で行き帰りにちよつとした観光が出来る。どの任務も片手間にしかないタシユアには悪くない条件で、だから学院に居ついている。

従業員はまだ横に立っていた。

「まだ何か？ 用が無いのならお引取り願いたいのですが」

「あ、いや。その、外はどうなってるんだ？」

「どう、と言われましても。晴れて夜空が綺麗ですよ」

タシユアの答えに、相手が酢でも飲んだような顔になる。

Episode : 102

「いや、そういう意味じゃなくて」

「そちらが何も言わないのに意図を理解しろなど、無理難題を言われても困りますね」

答えが予想外だったのだろう、もう一度啞然としてから、従業員は話し始めた。

「ええとだから、下級生が食べに来ないんだ。上級生が来ないのは演習だから分かるんだが、下級生が来ないのはおかしいだろう？」

「そうですね」

カップに入ったスープを口に運びながら同意する。

(……イマイチですね)

しばらく置いてあったのか、スープはやや冷めていた。火から下ろしたての熱々のほうが美味しい種類なのに、これはあまりよくない。

従業員のほうは、タシユアの同意の言葉を「話の続きを促している」と解釈したらしい。また話し始める。

「なんか、下級生が講堂に集められてるらしいんだが……何か知らないか？」

「ご自分の目で確かめてきてはどうです？」

「え、でも、見張りが」

「先ほど入ってきたときは、怪我でもしたのか倒れていましたがね」
自分がやったことは棚に上げて言う。

「ホントか?! それなら、もしかしたらあの子達に夕食を——あ、

そつだ、奥に逃げてきた生徒が1人居るんだ。いろいろ知つてそうだから呼ぶよ」

氣を利かせたつもりなのか、バタバタと従業員が奥へ走つていった。

（食事中のところで、走らないで欲しいのですがね）

しかも頼んでも居ないのに、さらに人が増えるらしい。

だが奥から覗いた顔を見て、タシユアは別の言葉を口にした。

「こんなところで、何をしているのです」

「先輩こそ、なんでここにいらっしゃるんですか」

言いながら厨房の奥からイマドが出てくる。

「私は単に、任務帰りで仮眠してただけです。あなたこそ、何故講堂に居ないのですか」

「こつちが外にいる間に、あいつらが勝手に集めたんですよ」

「島内にいるのに命令が分からないのは、問題だと思ひますがね」

言いながら考える。

自分も氣づかなかつたのでそうではないかと推測していたのだが、やはり一斉放送等は使われなかつたようだ。おそらくは教官が寮へ出向いて、低学年だけを集めたのだらう。

（講堂に上級生を入れないため、といったところですか）

タシユアがそうだったが、大掛かりな演習があつても上級生、特に上級隊は任務がらみで寮に残っていることがある。

だが人質にするなら無力なほうがいい。そのために全員集めようとして上級生に知られるより、多少取りこぼしたとしても、人知れず下級生だけを集められる方法を取つたのだらう。

Episode : 103

「で、あなたはそのまま逃げ回っていると」

「逃げ回ってるっつーか、たまたまダチと一緒にだったんで、見つかったときとつさに教官たち引き付けただけですってば」

イマドはあまり深く考えずに言ったようだが、見過ごせない情報だった。

「ダチと」と言うからには、外に他にも居たはずだ。だとすると案外逃げた生徒が居そうだ。

「その後逃げているなら同じだと思いますがね。ところで、他に誰が講堂から逃げ出したのです？」

タシユアの問いに、後輩がすらすらと答えた。

「逃げ出したってより、捕まらなかったってほうが正解ですけど――
―アーマルとヴィオレイ、あとシーモアとナティエスが逃げてますね。他に診療所にも何人が居るとか。ミルのヤツは逃げてたけど、なんか捕まったらしいです」

「あれを捕まえてどうする気やら……」
思わずそんな言葉が口を突いた。

何しろあのミルドレッド、ありとあらゆるものを引つ掻き回す天才だ。敵に居てもたまらないが、味方に居たらもつと困る。

そんなものをわざわざ捕まえるというのだから、物好きとしか言いようが無い。

教官たちのレベル低下は予想以上だと思いながら、タシユアは確認した。

「逃げ出したのはそれだけですか？」

「俺も全部は知らないんで。あーあと、ルーフェイアのヤツが逃げてます」

「おや、命令無視とは珍しい」

ルーフェイアは良くも悪くも優等生で、教官に逆らうようなことはまずしない。なのに逃げ出しているというのは興味深かった。

だがそれを横からイマドが否定する。

「あー、別にアイツ、講堂から逃げたとかじゃないですよ。一番最初に居なくなっちゃまって俺ら探してたんですけど、地下牢に入れられてたらしいです」

「何をしているのやら」

ある意味ルーフェイアらしいが、そんなところに入れられるとなると素直も行き過ぎだ。

だいいち普段の彼女の素行から見ても、何か非があるとは思えない。逆に言うなら言いがかりでしか収監できないわけで、ならば徹底的に説明を求めれば済む話だ。

けれど大人しく収監されたというのだから、それもせずに言いなりだったのだろう。

ただ今は「逃げている」というところから考えるに、牢破りはしたようだ。

（よくまああの子が、そんな型破りをする気になりましたねえ）

深く考えず他人に従っただけと思っていたが、多少は考える頭が出来てきたらしい。

「で、ルーフェイアはそのまま霍乱ですか」

タシユアの言葉にイマドがため息をついた。

「さっきまでここに居ましたよ。けどあいつ、俺の身代わりしに飛び出しちゃったんで」

「彼女に囿を任せて自分は食事と」

からかわれて、更にイマドが大きなため息をつく。

Episode : 104

「アイツのほうが俺より強いですって」

面白くなさそうなのは、言っていることが事実だからだろう。

もっとも、イマドが平均より劣るわけではない。むしろ平均よりかなり上だ。ただルーフェイアは文字通り桁違いで、同級生の追隨を許さない。

——知ったことではないが。

当人同士の関係など、お互いで決めれば済む話だ。他人が口を突っ込む必要はないし、当人たちも合わないと思うならさっさと別れればいい。

ただこのカップルは肝心のルーフェイアが何も分かっていないから、話がそこまで進むかも怪しいのだが……。

いずれにせよイマドの一連の話から、副学院長とその一派がルーフェイアを危険視していたことは分かる。

（まあ妥当な判断ですか）

上級生が大規模な演習で居ない今、ルーフェイアたちが本島では最年長だ。その中でもトップの実力を持つ彼女は、マークされて当然だろう。

同時に、恐らく同じAクラスの面々も危険視されているはずだ。現にイマドは追い掛け回されている。

だが話を聞く限り、危険視されているメンバーはかなりが掴まらずに済んでいるようだ。それもルーフェイアが居なくなっただけで探していたためというのだから、皮肉な話だった。

（いずれにせよある程度、同級生たちで連携しているようですね）
ルーフェイアを収監したという牢が、ありきたりの物のわけが無い。加えて武器も取り上たはずだ。またイマドや他の同級生の身の安全と引き換えに、くらいのことを言った可能性もある。

それでも脱獄しているのだから、ある程度の情報をルーフェイアは得ているはずだ。恐らくは掴まらずに済んだ友人たちの誰かが、その辺りを手引きしたのだろう。

（甘いですねえ）

なんでもそうだが、やるなら徹底的にやらないとダメだ。今回の場合ならまずイマドをはじめルーフェイアの友人たちを何人も収監し、それで脅してルーフェイアを捕まえ、一緒におしこめるくらいしないと、何かの弾みで逃げ出される。

そういった手間を惜しんでルーフェイア1人を牢へ入れて済んだと思うようでは、最悪に備えているとは言い難い。

（実際、見事に逃げ出されましたしね）

教官たちはご自慢の場所へ閉じ込めたつもりだったのだろうが、ルーフェイアに常識は通用しない。自身への影響が無いのいいことに、精霊を呼んだ上で同時に魔法くらいは簡単にやってのける。もし何もさせたくなければ、足かせとして誰かを一緒に収監しないとダメだ。

（これで教える側だというのだから、教わるほうがたまりませんね）
少なくとも生徒の考えを上回るくらいのことは、してほしいところだった。

「あなたはどうするのです？」
いろいろと考えつつ、戯れに後輩に聞いてみる。

Episode : 105

「あなたはどうするのです？」

「俺ですか？ 食ったんでまた出ますよ。アイツ1人に任せとくわけにやいかないんで」

「ありきたりですね」

もつとも、それが悪いわけではない。時間を稼いで援軍を待つのは定石だ。だが、確実に勝ちに持っていくには足りない。

こちらの言葉が意外だったのだろう、怪訝そうな顔でイマドが訊いてきた。

「そういう先輩はどうするんです？」

「何もするつもりはありませんよ、今のところは。もつとも暇ですからねえ……さて、この状況ですとどちらにつくと面白いですかね」

後輩は表情を変えなかった。ただ多少雰囲気が変わった気はするから、何か考えてはいるようだ。

その後輩に視線を向けたまま言葉を続ける。

「油断しきった目の前の後輩を捕らえても面白そうですね。ルーフエリアも釣れるでしょうし、高く売れそうですね」

「——あいつらじゃ踏み倒しそうですね」

後輩が軽口を叩いたのとはほぼ同時に、あらぬ方向から嬌声が響いた。

「じっはーん！ おっなかすいたー！」

「ミルドレッド、ここは騒ぐところではありませんよ」

言わずと知れた学院一のトラブルメーカーが、取り巻きを連れて

食堂へ入ってくる。

「えーでも、お腹すいたしー」

「だからと言って、騒いでも空腹は治らないと思いますがね」

言いながらざっと見た感じ、勝手に出てきたわけではなさそうだ。武器を手にした教官たちが、子供たちの後ろに居る。

（食事だけはさせることにしましたか）

見た感じ五月蠅さに耐えかねて渋々のようだが、放置よりはマシだろう。あるいは、ミルドレッドが大騒ぎしたのかもしれない。

（まあ考えがあつて……とは思えませんが）

もし仮にあつたとしても、彼女の場合起こす騒動で帳消しだ。

入ってきた人数は、およそ2クラス分ほど。順番に食べさせるつもりらしい。

「誰かー、ごはんー」

「おうっ！ 座れ座れ、今すぐ食わせてやる」

厨房から従業員たちが飛び出してきて、食堂内が慌しくなる。

と、教官の1人がタシユアへ視線を向け、足音も高く寄ってきて声を上げた。

「何故ここにいる！」

「夕食を摂りに。ここは食堂ですから」

答えが意外だったのか、一瞬教官が立ち尽くす。そしてすぐ、また声を荒げた。

Episode:106

「上級隊は演習だろう!」

「任務でしたので」

それだけ答えて、タシユアは軽食の残りを口に運ぶ。

目の前の教官は何か言いながら武器を向けようとしたが、別の教官が来て何か囁き、結局何も起こらなかった。

(こつこつ損得勘定は出来るんですね)

ならば今回の騒動の損得も計算すればと思うが、彼らにとってはメリットのほうが大きく見えたのだろう。

この間にイマドは姿を消していた。イザとなるとプライドなどあっさり捨てて、なりふり構わないタイプなだけある。

(――さて、後輩たちはどう出ますかね)

少しは慌ててくれると面白いが、その辺が確認できないままだ。まあどさくさ紛れに急いで姿を消しているので、多少は本気にしたかもしれないが……。

そうしているうちに、別の一団がまた入ってきた。順番に言ってもかなりハイペースで入れ替えるつもりらしい。

(うるさくなりましたね)

普段の食堂に比べれば、がらがらと言っていい程度だ。だが人が入ってくればそれだけ騒がしくなる。

お茶を飲み終え、トレイを手にタシユアは立ち上がった。

「ど、どこへ行く!」

「どこへ行こうと自由だと思いますがね。私の場合演習は任務で免

除されていますし、講堂へ行く必要もないはずですし」

教官たちにしてみれば目の届くところに置いておきたいのだろうが、従う義理はなかった。

それで退学と言われても、タシユアとしては一向に構わない。学院にある程度従いつつ居ついているのは、単にそれが楽だからだ。別にここを追い出されても、生きていくくらい何とでもなる。

「ご馳走様でした」

言いながら食べ終えたトレイを所定の位置に置き、食堂を出る。ダメージを与えて置き去りにした教官は見当たらなかった。既にどこかへ運ばれたらしい。

（さて、どこへ行きますか）

月明かりの下考える。そもそもが任務を早く片付けたがための空き時間だ。予定などあるわけがなかった。

現時点でいちばん面白そうなのは、この状況を引つ掻き回すことだ。双方が互いの思惑で動いているところへ、両方に対して横槍を入れる。大混乱は必至で、いろいろな意味で楽しい見世物になるだろう。

だが。

（面倒ですしねえ……）

確かに面白いのは面白いのだが、労力に見合わない気がする。

Episode : 107

（まあ、様子を見ますか）

自分が居るとは教官たちは思っていなかったようだし、イマドをからかっておいたので生徒たちも慌てているだろう。

意図したわけではないが、両方の陣営に横槍を入れた格好だ。なら少しのんびりして、また何か動きがあつてからでも十分だ。そもそも、何かをする義務も無い。

ふと見ると、目の前の図書館の扉が少し開いていた。この騒ぎで閉め忘れたらしい。

（借りていきますか）

たしか、面白い新刊が入っていたはずだ。

ふらふらと館内へ入り、面倒なので灯りをつけぬままとりあえず棚を見たところ、首尾よく目当ての本を発見した。

手にとって勝手に貸し出し手続きをし、片手に図書館を出る。

（一旦戻りますかね）

このままこの辺をウロウロしていても、しばらくは何も起こらないだろう。だったら部屋へ戻って学内の様子を魔視鏡でさぐりながら、のんびりしていたほうが楽だ。

図書館の外へ出ると、低学年たちがわさわさと動いていた。食堂を出てくるグループと入るグループとが、入り口の辺りで右往左往している。おそらくタイミングが一緒になって、狭い入り口を塞いでしまったのだろう。

（少し考えればいいものを）

そんなことを思いながらも横目で素通りし、講堂もそのままスルーして、タシユアは一旦自室へ戻った。

（さて……）

2台あるうちのひとつ、学内用の魔視鏡を立ち上げる。部屋を出る前に確かめたとおり、学内の通話網は生きている。だったらそこを傍受すれば、大体のことは分かるはずだ。

（教官たちのはこれでしたね）

本来通話石は、傍受が非常に難しい。オリジナルの石と共振する子石の間でしか、通話が成立しないためだ。

だが横断的に通話を可能にする高位通話石が発案されたことで、そこへ割り込む形で傍受ができるものへと変貌していた。

タシユアが何度か魔視鏡を操作すると、発声器から音が流れ出す。

（活発ですこと）

低学年の食事の入れ替えの様子、あるいは講堂の様子が、次々と報告されていた。

傍受される可能性を承知で偽の情報を流している可能性もあるし、使われている魔視鏡網自体もこれひとつとは限らないが、それでもおおよそのことが分かりそうだ。

（あとは待ちますか）

教官たちの騒々しい報告を頭の片隅で聞き取りつつ、タシユアは図書館から借りてきた本を広げた。

Episode : 108

N a t i e s s

「ああ、貴重な魔法陣が」

壊れた牢見ての学院長の最初の台詞が、それ。入ってた誰かさんのことは、ちっとも心配してない。

しかも学院長ったら、あっちこっち触りながら嘆いてるの。

「この牢と魔法陣、300年以上前に敷設されたものを改良しながら来た、歴史あるものなんですよ」

「歴史ある牢ってヤかも」

思わずあたし、つぶやいちゃった。

だって、そんなものに歴史あってもねえ。どうせだったらもっと、綺麗なものとか凄いものに歴史欲しいもの。

学院長のほうはそれどころじゃないみたいで、しゃがみこんだり伸び上がってみたり。

「……学院長、とりあえずここ離れますよ。教官どもが戻ってきたらヤバイですから」

見かねたシーモアに言われちゃったりして、これじゃどっちが年上だか分かんない。

「修復に幾らかかるやら……これでも一応、文化財としては貴重なんです」

「分かりましたから、とりあえず隠し通路」

言ってシーモア、学院長を引っ張っててる。

にしても、この学院の建物がそんなに価値があったなんて、ちょ

つとオドロキかも。古いだけだと思ってた。

ちなみに古い建物だっただけあって、隠し通路のひとつが地下牢隣の物置に続いてたの。で、あたしたちそこから潜り込んだんだけど、誰も居なかった。牢の中は空っぽだし、見張ってる人も居なくて。

要するに、ルーフェ（だと思う、たぶん）が脱獄しちゃって、見張ってた人も探しに行っちゃった、ってことみたい。

ただ幸い牢は、思った程は壊れてなかった。上のほうに鉄格子のはまった窓があったって学院長は言うんだけど、被害はそこが大穴になってるくらい。たぶんあそこから出てったんだろうな。

とりあえずそれ以上見るとこなさそうだから、みんなで隠し通路へ戻る。

「建物崩れなくて、よかったですねー学院長」

「確かにそれは僥倖ですが、地下牢が……」

学院長、やっぱりちよつとシヨックみたい。

「あれを修理するとなると、大変なんですよ。いったい幾らかかるやら。学院もそんなに余裕があるわけじゃないんですが……」

そこか、と思っちゃったり。まあ確かに何をするにも、世の中お金が要るわけだけど。

「だったら学院長、ルーフェイアに請求すりゃいいんじゃないかい？ あの子だったら出せるだろうし」

「ああ、確かにそうですね」

シーモアの提案に、学院長がなるほど、って顔をする。

Episode : 109

「カレアナでしたら、事情を話せば少しは出してくれそうですね」

「学院長……」

なんだかため息。まあ学院つてばお金ないから分かるけど、それにしたつて。

そしたら学院長、あたしのこと見て笑って言ったの。

「分かっていますよナティエス、ルーフェイアは被害者だと言いたいのでしょうか？」

「です」

だってルーフェッたら、思いつきり巻き込まれ。はつきり言つて、何にも悪いことしてない。なのに牢屋壊して請求つて……。

ただあの子お金持ちだから、平気な顔して出しちやいそうだけど。

「それにしてもルーフェ、どこ行っちゃったのかな？」

あたしが言つと、シーモアが肩をすくめた。

「分かりやしないよ、あの子の行き先なんて。だいいちあの子じゃ、島内どこだつて行けるだろ」

「確かに……」

さすがに島外へは出てなそうだけど、あの子じゃ野宿だつてへっちゃらだろうし。

「ま、牢から出たなら心配ないさ。上手くやるよ、ルーフェなら」
「そうだね」

口でそう言いながら、でも意外だったな、と思った。

何しろルーフェ、大人しい子。教官に逆らうとかあり得ない。だ

から牢にも入ったんだろうし。なのに逆らって派手に壊して出てくとか……何があっただろう？

後で会ったら、絶対訊いてみよう。

それからあたし、学院長のほう向いて。

「このあとどうするんですか？」

いちばん肝心なこと訊ねてみた。

この隠し通路に居る限り、あたしたち安全だと思う。でも逆に言う、なーんにもしないままってワケで。それはちよつと、面白いしプライド許さないし。ルーフェほどにはいろいろ出来ないのわかってるけど、ただ隠れてるだけって言うのもつまらないし……。

「そうですね」

学院長がちよつと下向いて、魔光灯で伸びた影が揺れた。

「いちばんの懸案事項は、低学年の子たちですからね。あの子たちを解放しないと。ただ、そのためには最低限、上級生に帰って来てもらわないとなりませんね。戦力が足りません」

あたしも学院長の言うとおりだな、って思った。

講堂の後輩達は、絶対なんとかしてあげなくちゃダメ。ただそれでも、教官たち相手に上手くいくかどうかは微妙。数が多いのは有利だけど、教官たちが本気出したらどの程度かわかんないし。

そう考えちゃうとちよつとため息。あたしたち本当に大丈夫なのかな？

ただシーモアは、そこまで悩んでないみたい。

「そしたら、演習島にでも知らせに行きます？」

けるつとして、そんな無謀なこと言ってる。

Episode : 110

「ムチャ言わないでください学院長。というか、連絡取れないんですか？」

「連絡ですか……先ほどの通話石で、誰か出ますかね」
学院長が思い出したみたいに、通話石いじった。

あたしたちも耳そばだてながら、黙って隣で待つ。

「——おや、ムアカ先生。これをお持ちでしたか」

シーモアと2人でガッツポーズ。だってこれでだいぶ違うもの。
学院長は、ムアカ先生と話してる。

「ええ、何とか無事です。よ。おや、そちらにも生徒が居ますか」
話からすると、講堂行かずに済んだ子が他にもいるみたい。

「おや、ミルドレッドが講堂に？ 連れて行かないほうがいい気がします……」
今度はシーモアと2人で肩すくめた。あの子を連れ込むなんて、

教官たち何考えてるのかな。

というか、どう考えたって自殺行為。ぜーったい引つかきまわされて予定が狂って、ヒドい目に遭うの間違いなし。

「こちらにも2名ほど居ますよ。助けてもらってます」
それから学院長、だいぶいろいろ話してから通話を切った。

「何か分かりました？」

「ええ。ただ、予測とあまり違いはありませんね。一部に確証が取れたというだけです」

そう前置いて、学院長が話し出す。

「騒ぎの首謀者は、残念ながら副学院長で間違いなさそうです。あとあなたたちと同じAクラスは、だいぶ逃げ出してるようですね」
聞きたかったことが次々と学院長の口から出てきて、ちよっと嬉しいかも。

「そうそう、ルーフェイアも脱獄したあと、ムアカ先生のところに顔を出したようですね」

「わ、やっぱり無事だったんだ！」
思わず手を叩いちゃった。

もちろん、あの子に何かあったなんてぜんぜん思っていない。でも「無事」っていう知らせを聞くのって、思ってるだけとは重さがまるつきり違うもの。

「ルーフェイアとイマドが自由に動ける状態では、教官たちは振り回されるでしょうね……気の毒に」

学院長つたら、なんだか同情してる。

まあ言いたいことは分かるんだけど。でも困らされてる相手に同情とか、ちよっと納得いかない。

「でも学院長、あの2人が引きつけてくれたら、相当楽じゃないですか」

シーモアに訊かれて、学院長が頷いた。

「ええ。ただ演習島から他の教官たちが帰ってくる可能性もあるので、あまり時間はなさそうですね」

「え、それ大変！」

思わず声が大きくなって、慌てて口を押さえる。

Episode : 111

「そんな短時間でみんな逃がすつてのは、ちょっと難しいだろうね」
「うん……」

思わぬところで事態が詰まっちゃった。
でも考え込むあたしたちに、学院長が「もしかしたら」って前置いて教えてくれたの。

「どうもミルドレッドが、動映機を持って捕まったようなんですよ」
「うわ大胆」

ホントにあの子、怖いもの知らず。けどそういうもの持って入ったってことは、きっとコッソリ撮影してるんだろうな。

って……。

「もしかしてそれって、その映像を公開したら、全部片付きませんか？」

シーモアがあたしが考えたのと同じこと言う。

学院長が頷いた。

「他校に公開した、あるいはすると言えば、事態は収束するでしょうね」

「やった！」

思わず手叩いて声上げちゃって、あたしまた慌てて自分の口を押さえる。

「まったく、さっきから落ち着きなよナティ」

「ごめんごめん、でもすごいんだもん」

全員逃がすのに比べたら、映像持ち出すほうがずっと簡単。これなら何とかなるかもしれない。

だけど当然、まだ問題はああるわけ。

「飯に上手く撮れたとして、どうやって持ち出すかだね」

「うん……」

これ、意外に難関の気がする。中へ入るってつまり掴まることだし、掴まっちゃったら外へ出られないし。

「何かいい方法、あるかなあ……」

「うーん、あたしもちよつと思いつかないね。けど動いてりゃ、そのうちなんか見えてくるんじゃないか？」

「そうかも」

ちよつといい加減かな、って気もするけど、悩んで立ち止まってもしょうがないだろうし。

ただ、ふつうに考えたら陽動かな、って思う。別のところで騒ぎを起こして、本当にやりたいところを手薄にする。

けどこれって、どの教科書にも載ってるくらい定番の作戦。だから教官たちも、きつとすぐ気が付いちやいそう。

それを上手く騙して映像が入った記録石をもらう方法が、なかなか考え付かない。

「困っちゃったなあ……」

「確かに困るね。けどここで腐ってたってしゃーないよ」

「うん……」

こういうのは、だいたいが時間勝負。時間が経てば経つほど、たいてい不利になる。だからなるべく早く、何か決めて動かなくちゃ。

Episode:112

「どっから、手つけなきゃね……」

口でそう言いながら、あたしはなんか引つかかった。

何か、って言われるとぱっとは出てこない。でも引つかかってる。きつと副学院長のこと。

「副学院長、なんだよね」

あたしは口にしてみた。だってこういうとき、言葉に出してみる
と考えがまとまるから。

「副学院長がどうかしたのかい？」

「うん、あたしもよく分からないんだけど……けど、なんでこんな
ことするのかな？」

そこがよく分かんなかった。

「なんでって、自分が偉くなりたいたいからじゃないのかい？」

「最後は確かにそうだけど。でも、でも……そのうち偉くなれたと
思うの」

自分で言ってみて、違和感の正体が分かる。

——そうだよな。

確かに先輩たちの居ない間狙ってるし、教官たちもほとんどが副
学院長の味方してるけど、今やる必要があったのかな？ っと思う。

だって今「副」学院長なんだから、このまま普通に続けてれば、
次は学院長に大抵なれるもの。

それを言ったら、シーモアも考え込んだ。

「確かにね……なんでリスク冒すのか、そこは分かんないね。メリツトが少ない」

「でしょ」

学院長も頷いた。

「そこが私にも、分らないところなのですよね……。わざわざ騒ぎを起こせば、失脚する可能性がある。そうなれば元も子もないのですから」

「ですよねえ」

今だってちゃんとお給料出てるはずだし、本校の副学院長なら次は学院長の可能性大。数あるM e Sの中でもいちばん有名な、シエラのトップは目の前。

なのになんで、こんな騒ぎ起こすのかな？ どうにも理由が分からない。

「うーん、定番の金じゃ？」

そう言ったのはシーモア。

「人間なんて大金積まれりゃ、寝返るやつ多いだろ」

「そうだけど……かなりのお金になりそう」

シエラって給料もそんなに悪くないけど、何よりすつごく「格」が高いって、前に先輩に聞いたことある。だからここを卒業しただけでも優遇されるけど、先生してたってなるとどこでも通用するんだ、って。

だったらその副学院長までしたのに寝返ったなんて、自分をゴミ貯めに捨てちゃうようなもの。もったいないったらありやしない。

まあ頭が悪すぎて、目先のお金に釣られることはあるかもだけど

……でも副学院長、けっこう切れ者に見えるし。
そしたら、考え込んだ学院長がぽつと言ったの。

Episode : 113

「そういえば彼には、娘さんが居ましたね」

「え、じゃあ誘拐?！」

「それだ!」

勢い込んで言ったあたしたちに、学院長が苦笑。

「まあ無いとはいいませんが……可能性は低いでしょうねえ。そうではなくて、確か娘さんが何か、生まれつき大変な病気らしいんです」

「え……」

これは予想外。

「じゃあ、その治療費ってヤツじゃ?」

「あるかも」

ベタすぎる話だけど、案外そういうのって多いもの。

ただ、ホントにそうだとすると……。

「なんか副学院長、許せないかも」

あたしの言葉に「分かる」って顔でシーモアがうなずいた。けど、学院長は不思議そうな顔。

「何故です?」

少しだけ間を置いて、シーモアが答えた。

「だって学院長、あたしがそんな病気になったって、誰も助けになんか来やしないよ」

学院長がはつとした顔になる。

シーモアは言い出したら止まらなくなっちゃったみたい。

「そりゃ、自分の子供が可愛いのは分かるけどね。そのためにあたしらこんな目に遭うのかい？ 何が教師さ、あたしらのこと一山幾らで、自分の娘と引き換えてるだけじゃないか」

言いすぎ、とは思わなかった。だってウソじゃないもの。

あたしたちを、その娘さんより可愛がって、なんては言わない。言わないけど、もうちょっと考えてほしい。

みんな家もなくて親もなくて、でもまあいいかなってやってるんだから、そっとしておいてほしいのに。

しばらく間をおいて、学院長がため息みたいな声で言った。

「……気持ちばかりです。確かに理不尽ですから。けれど今は、そこは後回しにしましょう。低学年を何とかするほうが先です」
「——はい」

あたしもシーモアも、この話はここで終わりに。だって学院長困らせたかったわけじゃないし、低学年をどうにかしなきゃいけないのはホントだから。

「それにしても、副学院長が何考えてんだか確かめたいね。」

「うん。もしお金とか病院なら、案外ルーフェに言ったら何とかなっちゃうかもだし」

自分で言ってから、あっと思う。

お詫び

お休みを頂いてしまい、申し訳ありませんでした。

ほぼ体調がもどりましたので、ペースを戻します。またよろしくお願ひします。

お知らせ

自サイトにて、期間限定でSFを公開中です。よかつたら下のリンクからどうぞ

またこれとは別に、異世界トリップの連載も始めました。こちらはなろう内に掲載です。よろしくお願ひします

あとがき

新しい話を読んでくださつて、ありがとうございます。前作とは一転、みんな揃つての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合ひ下さい。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

Episode : 114

「この手があつたね……」

「あるねえ……」

「ありましたねえ…… まあ実際に出来るかは、何とも言えませんが」

学院長つたら、さすがに面白くなさそう。

でも気持ちは分かるかも。あたしだって自分じゃ心配するだけなのに、自分より年下の子にあっさりお金で片付けられたら、すつごく微妙な気分になると思うもの。

「……どっちにしても、どうしてこんなことしたかは、副学院長に聞いてみたいよね」

あたしが言ったら、学院長が頷いた。

「ええ。その辺りが分かれば、何か打開策があるかもしれません」

学院長の言葉を聞いて、やっぱりいい人だなんて思う。自分と学院をこんな目に遭わせてる副学院長のこと、まだ何とかしてあげようと思ってるんだもの。

——相談すれば、よかったのに。

そうしたら何もこんなマネしなくたって、いい方法あったと思うんだけどな。

「何とかならんかね。副学院長だけ呼び出すとかさ」

「それで何とかなるなら、こうなってるないんじゃないかなあ」

シーモアの言いたいこと分かるけど、ちょっと呼び出すのは無理そう。だいいちそれが出来たら、苦勞して無いと思うし。

それにしても、何かいい方法ないかな……。

「――娘さんのこと、確かめられないかね」

「うーん、本土まで行ければ出来ると思うけど」

けどこの状態で、船出せるのかな？　なんか無理そう。かといって通話石は今使えるかどうか分かんないし、仮に使えても他の教官に聞かれちゃうだろうし。

正直八方ふさがり。けど必死に頭ひねって何か動かないと、このままじゃ絶対にジリ貧だし。

そのときなんか通話石いじってた学院長が、小さく声を上げたの。

「どしたんです？」

「それが……どうもタシユア＝リュウローンが、副学院長側に付いたと」

「え？」

耳を疑う、ってこういうことだと思う。

タシユア＝リュウローンって、要するにルーフェが仲良し（？）のタシユア先輩。で、ルーフェが言うにはものっすごく強くてスキルも高いって。

そんな人が向こうに付いたら……絶対まずい。

「学院長、それヤバくないですか？」

シーモアの問いに学院長が頷いた。

「彼は案外面倒くさがりですが、何に興味を示すか分からないところがありますからねえ。面白そうだと思ったのかもしれませんが」

「面白そうって……」

教官に脅されたとか、お金積まれたとか、せめてそういう理由にしてほしいんだけど。

Episode : 115

「付くにしたって、ふつうこっちだと思っただけだね」

「んーでも、あの先輩、いじわると毒舌で有名だし」

ルーフェはいい人いい人言ってるけど、ぜーったいそんなことない。

あの先輩けっこういじわる。すぐ周りやり込めて、やられたって人もいっぱい。

だいいちルーフェだってしょっちゅう泣かされてるのに、なんであんなに懐くかな？

まあそういう先輩だから、副学院長についちゃうってのはありそうだけど……。でもひどい目に遭ってるのはこっちなの、分かんないのかな。

とはいえ、あの先輩が敵に回っちゃったら、すっごく厄介だと思う。

なにしろルーフェが言うんだから、実力は確か。もう3年くらい前だけど、ルーフェとイマドとタシユア先輩の3人組で、突入演習の最短記録も出してるとし。

「ああもう、どうしてこう面倒なことばっかり起こるかなー」

「こういうときは悪いほうへ転がる、って言うけど、たままないね」

シーモアの言うとおり、ホントに八方ふさがり。

ともかく副学院長を何とかしなきゃなんないわけだけど、どう見たって戦力不足。先輩たちがみーんな演習島だから、戦えるのなん

てホントに数人ってとこ。

対して教官は、なんだかんだ言ってもあたしたちの「先生」なわけ。

筆記教科は別として、実技担当なんて言ったら、やっぱり手も足も出ない。ルーフェは別かもだけど。

それからなんたって、集められちゃってるチビちゃんたちが足かせ。評判のことがあるからうつかりやれないとは思うけど、でも怪我したりしない範囲でひどい目に、っていうのは十分あり得るわけで。

それを考えると、迂闊なこと出来ないもの。

これに加えてタシユア先輩が向こうについてちゃったとか……サイアク。

「ともかく、集まったほうがいいよね」

「そうですね。このままでは埒が明きません。せめてルーフェイアたちと合流して、策を練らないと」

言いながら学院長が、わざわざ用意してたって方の通話石を手にとった。

「誰か居ればいいのですが……おお、カーコフ先生、これをお持ちでしたか」

自分で自分が笑顔になるのが分かったり。

だってカーコフ先生って、実技の先生。だから今は、演習島に行ってるはず。そこと連絡が取れたってことは、つまり演習島の先輩たちとも連絡取れたってこと。

「先生、状況は——おや、既にご存知とは」

学院長がびつくりした顔してる。でもあたしももちろん驚いた。だって演習島とこって、連絡取れてなかったはず。なのにカーコフ先生、どうして知ってるんだろ？

「——なるほど、10年生のAクラスの子が知らせに行きましたか」話を横から聞いててまたびつくり。あの距離を知らせに行ったなんてすごい。

「ええ、私は何とか。そちらと同じAクラスの子が、助けてくれますよ」

学院長がニコニコしながら言う。褒められた感じがちょっと嬉しい。

「そちらはどうですか？——え、船が？ではすぐには戻れませんかね……」

カーコフ先生の話が聞こえないから分かりづらいけど、どうも演習島、船が無くて戻れないみたい。

——どうしよう。

これだと頼みの綱の先輩たち、せっかく気づいても戻ってこれない。それじゃ気づいてないのと変わらない。

「なるほど、そちらへ行っていた先生方は、もうこちらに向けて演習島を出たと」

今だってどうにもならない状況なのに、これで教官増えちゃったら……。

演習島へ行った教官たちのうち、どのくらいが副学院長の味方なのかは、実際にはわかんないと思う。

けど間違いなく学院長派のカーコフ先生は、取り残されちゃってるわけで。それを思うと、ほとんどは副学院長の一派なんじゃないかな？　って気がする。

「そうなると面倒ですね……船が調達できればいいんですが」
学院長の声もちょっと暗かったり。当たり前だけど。

その時、シーモアが隣ではっとした顔になったの。

「どうしたの？」

「いや、船あるかも。——学院長、訓練島は？」

シーモアに言われて、学院長も「あっ」って顔になる。

「確かにあそこには、船が——カーコフ先生、今のは聞こえましたか？」

通話石の向こうの先生に、学院長が訊いた。

答えは聞こえないからわからない。けど学院長の表情から見て、向こうも同意した感じ。

「ええ、ええ。行ってみる価値はあるかと。訓練島を預かる彼も、私の友人ですし」

学院長が「彼」って言うのは、訓練島の船着場に居るおじさんのことかな？ だったら先輩たち、来られるかも。

「ええ、あとは……」

「静かに！」

学院長が言いかけたところで、シーモアが低く鋭く言って。

（どうしたの？）

小声で訊いたら、彼女が低く答えた。

（誰か来たっぽい）

思わず身体が硬くなる。だってここに誰か来るって、隠し通路が見つかった、ってことだもの。

学院長が小声で状況を知らせて、通話をやめる。

それからあたしたち、黙りこくって耳をそばだてた。

しん……と静まり返る通路の中、確かに遠く、何かがガタガタいう音。靴音にも聞こえる。時々何かが反響したみたいな音は、声なのかな？

どっちにしたって、悪い知らせ。ここはあたしたち以外居ないは

ずなんだから、物音がすること事態おかしいんだもの。

ただずーつと聞いてたら、少しずつ遠くなってた。ここ全体が迷路みたいになってるから、どこをどう行けばいいのか分からないんだろうな。

（移動しよう、こっちです）

通話を打ち切った学院長を先頭に、あたしたち狭い通路を歩き出した。

Episode : 117

Mil side

夜になるとまだ冷える季節、講堂はけして暖かいとは言えなかった。だから、みんなぴったりと身体を寄せ合っている。

夕食はまだ来ない。水は自由に飲めるしトイレも行けるが、肝心の食事が来ない。

（何考えてんのかなあ？）

それがミルの正直な感想だった。

大人というのはとかく分からない。ミルは心底そう思っている。正確に言くと、本音も建前もよく分かる。だがなぜいろいろと、意図と違う結果になることをあえてするのか分からないかった。

何か信念あつてのことなら、まだ理解できる。けれど見ていると、それでさえない。

（よくわかんない）

ニンゲンというのは、本当に謎だらけのイキモノだ。

だがそうは言っても、この講堂を支配しているのはそのニンゲンだ。だから謎だらけの行動をよく見抜いて予測して裏をかなければ……などは、ミルは全く考えていなかった。

（オモシロイことないかなー）

彼女の行動原理はこの一言に尽きる。

面白そうか、面白くなさそうか。やってみたいか、みたくないか。全てをこれだけで決めるのがミルだった。

そして今は、あまり面白くない。だから何か面白いことを見つけ
るか、さもなければ作るかだ。

どうやったらいちばん面白そうか、彼女はつらつらと考える。

面白くなさそうなことの筆頭は、たぶん現状維持だろう。寒くて
お腹がすいたままなど、面白くないことこの上ない。

だとすれば、今の状況を変えれば少しは面白くなるはずだ。

（どうしよっかなー）

どうせやるなら派手なほうがいい。そのほうが絶対に面白い。け
れど、何をどうやったら派手で面白くなるのか。

あれこれ考えて、ミルは立ち上がった。

「そこ、座れ！」

教官の1人が間髪居れずに命令してくる。

それに対してミルは言い放った。

「トイレ！ もっちゃう！」

恥ずかしげもなく言われた言葉に、教官が言葉を失う。

「行っでいいでしょ！ 間に合わないー」

「い、行っでいいが……もう少し、違う言い方はないのか？」
「ないですっ！」

きっぱり言っでミルは駆け出した。少々崩れながらも並んで座っ
ている生徒達の間を抜け、講堂後方にあるトイレへ向かう。

入り口にも見張りの教官が居たが無視して中へ入り、空いている
ところを見つけ、ドアを閉めた。

Episode : 118

「さて、つと」

言いながら彼女は白墨を取り出した。

「らつくがつきらつくがつき」

小さく歌いながら壁に次々と書き付ける。

自分たちの欠点は、子供で力に欠けるところだろう。一方で強みは、なんと言つても数が多いことだ。

武装している教官たちと丸腰の生徒たちでは話にならない、そう思っているのがほとんどだろうが、ミルはそうは思わなかった。

要は混乱を起こせばいいのだ。そして混乱を起こすだけなら、人数が多いほうがやり易い。

書いた内容は、まさに「落書き」だった。明かりが消えたらみんなで電撃、教官をやつつけろ！ みんな大脱走で鬼ごっこ、男子にもどんどん教えちゃおう、というだけだ。

ただ、今は意味を持つ。ロクに食べさせてももらえずに押し込められて、生徒たちの不満は増す一方だ。そこへ、こんな言葉が広まれば……。

それを書き終えてはそつと次へ移り、五つほどの小部屋全てに書き付けた。

もちろんミルも、全員が賛同するとは思っていない。だがなにしろ千人近くいるのだ。話が広まれば1割動いただけでも大混乱になる。そしてひとたび混乱すれば、みんな一斉にここから逃げ出すだろう。

魔法を選んだのは、単に手軽だからだ。なにしろ口がきければいいのだから。

もちろん、教官たちは対応策は立てているだろう。魔法の威力を抑えるための魔法陣を作っているかもしれない。

けれどそれが問題になるのは、本気で相手を倒そうと思うときだ。目くらましならみんなで魔法をバラバラと放って——どうせぴったりなんて揃わない——教官が驚いた隙に逃げ出せばいい。

一部が動き出せば、あとは放っておいても動き出す。そうなければ数で不利な教官たちでは、それ以上閉じ込めておくことはできない。それに外へ出てしまえば、生徒たちの独壇場だ。

ここへは仕事で来ているだけの教官たちと、駆け回って遊んでいる生徒たちでは、土地勘が違う。それに小柄な分、潜り込める場所も多い。これを全部追いついて捕まえるのは、相当骨が折れるはずだ。

そのあとどうなるかは分からない。けれど状況をひっくり返して分散すれば、かなり面白いことになる。何よりミルとしては、面白ければ何でもよかった。

それに通話石で聞いた話では、しばらくすれば教官たちも来るが、先輩たちも引き返してくる。そうなればさらに島は混乱して、大騒ぎになるだろう。

（どこで見物しようかな）

そんなことを考えながら今度はミルはスカートをたくしあげ、オーバーパンツの中に手を入れる。

出てきたのは、手のひらより少し大きめのポーチだった。

Episode : 119

「チエック甘いよねー」

まあ「こんな」場所をボディチェックと称して触るうものなら、盛大に大騒ぎするつもりだったのだが。

学院はその性格上、女の教官がかなり少ない。しかも今回、見張りをしている教官たちの中に、その数少ない女性陣の姿は無かった。きっと女の先生たちは子供に手を出すのを嫌うから、最初から頭数に入れてもらえなかったのだろう。

ただそれが隙を生んでもいた。男の教官では年頃の生徒のボディチェックなどとすると大騒ぎになるから、全身丁寧とはいかないのだ。

それにミル、ここへ連れてこられた段階で一つ武器を渡している。加えてそれなりの後ろ盾を持つ彼女には、教官たちも及び腰だ。だからそれ以上は探さなかったのだろう。

二つに割れたポーチの中は弾力のある素材で、その素材のくぼみに銃がはめ込んであった。大きさは手のひらくらい。だが見かけに反して威力はある。魔法で構造が強化されているせいだ。

——とはいえ、殺傷力はやはりタカが知れているが。でも殺すことが目的でない今は役に立つ。

ポーチのくぼみにはまった銃を引っ張り出し動作を確認したが、問題なさそうだ。

（おっけーおっけー、万事りょーこー）

にまにまとほくそえんでいると、外から教官が怒鳴ってきた。

「まだ入ってるのか！」

なかなか出てこないミルに業を煮やしたのだろう。

「いい加減にしろ、もう終わっただろう！」

「終わってません！」

こちらも負けじと怒鳴り返す。

「っていうかセンセひどい、女子にそんなこと言わすの？！ エッチ、変態！」

教官からはそれ以上返ってこなかった。さすがに分が悪いと思っただろう。

（セクハラさまさま〜）

誰も見ていない小さな空間で、ぺろりと舌を出す。

男の教官たちがいちばん手を焼くのが十代の女子だ。何かと言えばすぐ騒ぎ出す上に、迂闊に持ち物にも触れない。

しかもヘタなことをすればすぐ「変態」だの「ロリコン」だののレッテルが貼られ、あつという間に知れ渡る。それも女子特有の交友関係の広さで、他の分校にまで知られてしまうからタチが悪い。

そしてミルは、自分がその一員だということを自覚していた。これを使わない手はない。

女子トイレに落書きしたのも、教官がそう簡単にはチェックできないからだ。

講堂に居る女子はおそらく100人ほどだが、それが入れ替わり立ち替わりトイレに来るため大抵誰か入っている。

そんなところへ男の教官がずかずか入ってきたら、大騒ぎになること請け合いだ。

Episode : 120

ミルとしてはそんな騒ぎは無視していいんじゃないか……などと
も思うが、世の中そうは行かないらしい。

まあそのおかげでコトがやり易いのだから、文句はないのだが。
それからミルは通話石を取り出した。

（誰か居るー？ ミルちゃんだよー）

小声で話しかけると、すぐ応答が来た。

（ミルドレッド、無事でしたか）

（あ、がくいんちょーだ。はい、ぶじです）

そして外の教官に気づかれないうつ、らしくないきばきとした
やり取りで、彼女は状況を聞きだした。

曰く、同じクラスの生徒はけっこう教官の手を逃れたようだ。ル
ーフェイアも脱獄したと言うし、イマドも逃げ回っているとか。シ
ーモアとナティエスは学院長と一緒にだし、アーマルとヴィオレイに
いたっては訓練島にまで行っている。

（みんな楽しそうだなあ……）

仲間たちが聞いたら抗議しそうなことを思いつつ、さらに状況を
聞く。

そしていくらかのやり取りで、首謀者は副学院長らしいことと、
どうもお金が絡んだらしいところまで聞き出した。

（……うーん？）

よくある理由だが、どうも引つかかる。

今回の一連、上級生が泊りがけの演習のときを狙ったりルーフェ

イアを投獄したり、下級生を一堂に集めたりと、一見すると用意周到だ。

だが、そもそもの目的がピンとこない。

仮にお金が必要だとして、なぜ学院を乗っ取る必要があるのか。乗っ取って学院長職を交代するにしても、他校は納得するのか。交代したとして、学園は維持できるのか。

だいいちお金が必要だとしても、シエラ本校の副学院長だ。けして薄給ではないはずだし、転職すればもっと高給取りになれるだろう。

その他も考えれば考えるほど、メリットよりデメリットのほうが多い。

（こんなじゃ、ふつうはやらないよねえ……）

ミルの知る限り、人は自分にとって何らかのメリットがあるときしか動かない。

ただその理由が多種多様で、他人のために動くことが楽しいからというメリットだったり、お金が欲しいだけだったりするから、複雑に見えるだけだ。

だとすると、副学院長のメリットはなんなのか。

（何かぜったい、隠してるよね）

一見お金か名誉欲しさに見せかけて、実際の理由は違う。その線がいちばんありそうだ。

——あるいはこの騒ぎそのものが、ただの茶番か。
それにしてもやっていることが大掛かりな気がするが、絶対に「無い」と言い切れない。何よりそう考えると、出来そうも無いこ

とを始めたことに納得が行く。

お詫び

あけましておめでとうございます♪

去年は結局終盤休載する形になってしまい、大変申し訳ありませんでした。

安心したのもつかの間、最後の最後でちょっと三途の川に近づきすぎましたw

今年は休載しないよう頑張ります

日本にも、読んでくださる皆様にも、今年はいい1年になりますように

お知らせ

異世界トリップの連載も始めました。
なろう内に掲載です。よろしく願います

あとがき

新しい話を読んでくださって、ありがとうございます♪
前作とは一転、みんな揃っての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合いです。
い。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

Episode : 121

(けどねえ……?)

理由としてはしつくりくるのだが、それが今の地位とお金を捨てるに値するのだろうか?

最後まで首をかしげながらミルは通話を切り上げ、個室を出たミルは今度は窓に取り付いた。

小さな通気窓をそつと開けてみる。

顔の高さの窓は、出ようと思えば出られそうな大きさだ。だがミルはそれはせず、手だけ出して窓の外を探った。

(あつたあつた)

壁とは違う感触を得、それを引っ張る。

引っ込めた手についてきたのは、まず糸だ。そして手繰り寄せていくと、けして大きくない布の袋が現れた。

(ゲットゲットー)

中身は例の動影機だ。

それをスカートの中に隠し、銃はベルトで肩から提げて上着を羽織って、やっとミルは出てきた。

「あーよかった。間に合わなかったらどうしようと思った」

「——いいから早く戻れ」

「はい」

呆れ顔の教官を尻目に最初とは別の、トイレ近くの列へ座る。

「こ、こら、そこじゃないだろう!」

「今日はお腹の調子が悪いからここ! てか、こんなこと言わせないで!」

テキトーなことを言い放つと、教官は呆れ顔で、だがそれ以上言わなかった。言ってもムダだと思ったのかもしれない。

（失礼しちゃうー）

ぷりぷりしながら周囲の様子を覗う。

疲れ切った様子で座り込んでいる生徒達。だがその中で、本当に少しずつだが、囁きが増えているようだ。

（いけるかな? うん、いけるかも）

ふふ、とミルはほくそえんだ。

お詫び

あけましておめでとうございます♪

去年は結局終盤休載する形になってしまい、大変申し訳ありませんでした。

安心したのもつかの間、最後の最後でちょっと三途の川に近づきすぎましたw

今年は休載しないよう頑張ります

日本にも、読んでくださる皆様にも、今年はよい1年になりますように

お知らせ

異世界トリップの連載も始めました。
なろう内に掲載です。よろしく願いします

あとがき

新しい話を読んでくださって、ありがとうございます、
前作とは一転、みんな揃っての大立ち回り……の予定です

【夜8時過ぎ】の更新です、たぶん。よろしければお付き合い下さい。
い。

感想・評価歓迎です。お気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5976s/>

家路 ルーフェイア・シリーズ16

2012年1月5日20時50分発行